

慨
嘆
の
白
い
王
子

WORLD

ARUTE

黒子仮面



どうしてぼくを殺すんだ。エメザレ。

声にならない声で彼は叫んだ。口を動かしても血が吹き出てくるだけで、音にならない。

唯一、涙だけが彼の気持ちをエメザレに伝えた。

すまない。ぼくはお前に嘘をついた。

彼はエメザレの服を引っ張って耳を引き寄せ、最後の力で口を動かした。それでもやはり声は出ずに、口の中の血が泡立つだけだった。

エメザレはそんな彼に哀れそうな眼差しを向け、そして彼を一度貫いたその剣を再び掲げた。

ぼくはちゃんと約束を覚えていたのに。

約束を果たそうと思っていたのに。

制裁の刃が振りかざされるその時ですら、まだ諦めきれずに頭の中で叫び続けていた。

大好きだったのに。

おまえのようになりたかったのに。

ぼくは大きくなったのに。

おまえの力になれると思ったのに。

エメザレ。

ぼくは――――

今まで抱いていた、エメザレへの尊敬や憧れや思い出やいろいろなもの、その全てが、巨大な何かに変わろうとした瞬間、彼の心臓に剣が突き刺さった。

ぼくは――――

急激に冷たくなり、ぼんやりと霞んでゆく世界のなかで、エメザレの漆黒の髪色と血に濡れた悲しそうな微笑が目に焼きついていた。

この国、クウェージアはエクアフという種族が暮らす小さな国だったが、到底暮らしやすい国とはいえなかった。

クウェージアでは白い髪のエクアフ、ユグリヴェ族が、黒い髪のエクアフ、ウェリアシア族を劣悪な方法で支配していた。

王族をはじめ、貴族はすべて白い髪のエクアフで、黒い髪のエクアフは市民の位すら貰えなかった。

クウェージア建国から約四百年、白い髪はその体制を維持し続けてきたが、限界はすぐそこまでやってきていた。

黒い髪の反乱が頻発し、彼らは白い髪の国外追放を要求したのだ。

もともと白い髪のエクアフは、北の国スミジリアンからきた移民だったのだから、もとの国へ帰れという黒い髪の主張は当然のものだった。

しかし、白い髪はスミジリアンに帰る気などさらさらなく、黒い髪を白い髪と平等に扱うか、それともさらに厳しく差別を行なって弾圧するかで、意見が二つに割れ、白い髪の中では内部分裂が起こっていた。

クウェージアの国王グセルガは熱烈に後者を支持していたが、少数の力を持つ貴族が反対したことで、王の意見はすんなり聞き入れられなかった。

崩れ行く足場が実は認識しているよりも、はるかに巨大であることによりやく気付いた魯鈍な王は、哀れにも王権を振りかざして喚き、検討中という理由で国内会議を勝手に中断した。

しかし、その対処は当然だが、なおさら国の安泰を害した。国全体に倦怠の念がたち込め、すべての都市は静寂と暗澹に支配されて、いずれ起こるだろう巨大な時代の荒波を恐れては皆、息を潜めて暮らしていた。

もはや希望からは見放され、完全なる失望に狂乱した黒い髪は残虐かつ冷淡に、今以上のものを希求した。

それでもグセルガは、黒い髪の切なる願いを拒絶し、亡き王妃セレイリスとの間に生まれた一人息子に、自分の屈折した神聖なる思想を継承させようとしていた。

その息子の名はイウといった。

純潔なユグリヴェ族の子であったから、髪も肌も雪のように白く、気持ちの悪いくらいに血管が透けて見えた。

白色に近い、淡い灰色の瞳はいつも憂いに満ちていて、明るい雰囲気はまとわせなかった。

十になるが、意思はグセルガの厳格な教育に打ち消され、満足にもものも言えない臆病者で、およ

そ王の器にはふさわしくない脆弱な少年だった。

しかし、彼の稀有な意思をいわせれば、彼は黒い髪との平等を望んでおり、けして強圧的な支配を行いたいわけではなかった。

悲惨なことだがこの少年は、グセルガと根本的に異なる価値観を備えて生まれてきてしまったのだ。

それが本格的な悲劇へと繋がったのは、国内会議の中断から約三ヶ月後、宮廷で黒い髪が働くことを正式にグセルガが許可したことが原因だった。

本当に突然であったから、イウをはじめ大臣や宮廷中の召使は少なからず驚いた。

黒い髪嫌いのグセルガが、黒い髪を宮廷で働くことを許したというのは、喜ばしいことのようにであったが、その目的が黒い髪と白い髪の平等でないことは、グセルガの身近にいる人物に限らず誰の目からみても明らかだった。

建前としては、黒い髪的能力を自身の目で直接量り今後の方針を検討するとのことだったが、宮廷で働くことを許された黒い髪はたった一人であり、その内容は雑用と掃除であった。

たかだか一人の掃除の仕方で、黒い髪という種族の何が量れるのだろうか。

イウはそのやってくる黒い髪を、ひどく愚かしく思った。常識で考えれば、ひどい扱われかたをされることくらい理解できるだろうに、それでも勝ち目のない戦いに挑もうとする黒い髪は何を思っているのか不思議でならなかった。

「...父上」

重苦しい空気をさらにひどくするような弱々しい声で、イウは夕食を前にして口を開いた。

父と呼ばれた偉大であるべき王は、その仮面のように固い表情のままで息子の方を見た。愛の欠片もない眼差しに息が詰まって、彼は口を開いたことを後悔するように、グセルガからテーブルに綺麗に並べられた夕食へと目をそらした。

出来うる限りの孤独を望むグセルガの意向で、食事時には一切、大臣も召使も部屋の中には入ってこない。

普通なら苦痛この上ないこの時も、誰にも聞かれたくない話をするのならば都合がいい。

「なんだね」

広く静かな部屋にグセルガの無機質な声が響く。

「黒い髪が.....来るのですよね？」

「そうだ。時代の流れには逆らえぬ」

その答えは意外だった。めずらしく本音を口にしたのだろうか。グセルガの表情は厳しいものだった。

「どのような経歴の者なのですか……？」

「なぜそんなことを訊く。そうお前と関わることはなからう」

グセルガは夕食の前菜を口に運びながら言った。

「それは…そうですが……」

「まあいい。奴は軍人だ。前線で戦って何度となく功績を挙げている。黒い髪曰く英雄である」と

「軍人…ですか？ 軍人に城の掃除を？」

心の中で小さな怒りを感じた。

戦場の前線で国のために命をかけて戦ってきた軍人に対して、その能力の量り方が掃除とはどうしたものか。

長けているであろう武術でも剣術でもなく、床を磨くことで黒い髪の今後を決めるなど。屈辱もいところだ。

「孤児院育ちだからな。悪しき黒髪の象徴としては素晴らしい経歴の男だ。お似合いの役職だと祝いの言葉でも送ってやりたいものだ」

なぜそんなに憎むんだ！

彼の心は叫んでいた。けれどもこの言葉を口にしてしまったら、かろうじて繋がっている絆のようなものは断ち切れて、この先長い人生を無言と無関心に耐えて生きなくてはならなくなる。王が死ぬまで。

永遠のように長い時間を、常に畏怖しながら生きながらえるのは嫌だ。

これ以上の重圧を支えて生きるのは、このひ弱い王子には不可能な話だった。

悔しくて、彼はただただ肉きりナイフを力いっぱい握り締めていた。

「孤児だと何か悪いことでもあるのですか？」

「ふふ」

気持ち悪いことに鉄仮面のまま、口の片端だけ引きつって王は笑った。

「これ以上、お前が関わることはなかろう」

また部屋の中に静寂が戻った。美味であるはずの食事を味わうこともなく、なにが変わったわけでもないこの環境に毎度ながら嫌気が差した。

また何もできなかった。

弱い少年の心は悲しかった。

その日はなんの変わりもない曇りの朝だった。一年中雲に覆われ、晴れる日が珍しいくらいこの国の気候は無気力に拍車がかかりそうだ。

重い鉛色の空は低く、雲が落ちてきそうに見える。

今日は冷える。雪が降るのかもしれない。

イウは早朝の窓の外をなんとなく眺めながら、そんなことを思った。

クウェーシアの宮廷の装飾にはほとんど白い色が使われていた。

宮廷の外に広がる白い髪都市もそうであるが、基本的に白い髪の住む建物には白色が使われる。

純潔な白、それはいうまでもなく白い髪を象徴する色だが、それが限りない皮肉と思っているのは、もはや黒い髪だけではないだろう。

贅の限りを尽くし、細微まで抜かりのない凝った形態を維持し続ける白い宮廷には、人工的な華美はあれども温かみはない。

その冷たい宮廷でイウが快適な居場所を見つけるのは、途方もなく難しいことであったが、幸運にもグセルガの隣という誰も寄り付かない場所が空いていた。それが唯一、イウの居場所らしき居場所だった。

そして今、例により横には玉座に座る重い表情のグセルガがいる。それはいつも恐れている父の顔だ。

頬がこけ、やつれたその顔はまるで死にかけた廃人のようで、濁りきった灰色の瞳の中には威圧的で恐ろしい、ひとを寄り付かせない力があつた。

それと同時に孤独感や絶望感、怒りや憎しみや恐怖がグセルガを取り巻いていて、そばにいただけでひどい重圧がかかってくる。

イウはにわかに恐くなって、下を向いた。父は愛や敬慕の対象ではなく、畏怖と敬遠の対象そのものだった。

グセルガは、多くの裏切りと愛する妻を亡くしたことで重い人間不信に陥り、実の子であるイウですら完全には信用していなかった。

それが辺りに伝わるので、なおさら他人との隔たりは強くなっていった。

グセルガから気休めの信頼を得るためには、ただ彼の言うことをきく以外にない。
イウは自分の居場所を手放したくなかったので、日々積もってゆく不満などは、ごく小さなことであっても言わないようにしていた。

それがなおさらイウの脆弱さを強めているのだが、愚鈍なグセルガが気付くよしもない。
だが、表面上のきれいな付き合い方は疲労と意趣を招くに過ぎず、とても進み出て弁を交わす気には些かもなれない。ほとんどは沈黙である。

その厳粛な静寂のなか、重々しい音をたて扉が開いた。

そして、大勢の白い髪 of 兵士に取り囲まれ、背に剣を突きつけられたまま、その男はやってきた。

たった一人の丸腰の男に対して、お前は敵だ、と言わんばかりの嚴重過ぎる警戒のしようだった。

全てが白い宮廷の中で黒い髪 of 男だけが目立った。

彼にもわかっているだろう。これから起こる自分への惨劇くらい。どれほどの恐怖や痛みと戦うことになるだろう。

その男の顔には今、どんな凄まじい怯えや後悔がうつっているのだろうか。

イウはその男を見ようと身を乗り出したが、兵士に囲まれた男の顔は見るできない。

「武器は持っていないのだな」

何度も暗殺の危機にさらされたグセルガは、どんなに嚴重な警護のなかでも安心を手に入れることはない。常に他人を恐れている。

「はい。何も」

兵士の一人が答えた。

「なら、全員下がれ」

兵士の群れの中から、ひざまずき王に面を下げる黒い髪 of 男が姿を現した。

「国立軍事教育所ガルデンから参りました。エメザレでございます」

丁寧だが覇気のある声だった。美しいと言ってもいい。

「エメザレ(劣化)か。お前によく合う良い名だな」

グセルガは嫌味を言った。

グセルガは、それしか安心を得る方法を知らないのだろう。

悲しいことだが、グセルガの固く閉ざされ破壊しつくされた心は、それが信用を確かめるのに最も適した手段であると狂信している。

「恐れ入ります」

「顔を上げろ」

グセルガの言葉にエメザレはゆっくりと顔を上げた。

その顔にイウは驚いて息をのんだ。

彼の顔には、微々たる怯えも後悔もなかったからだ。

恐れのない真っ直ぐな姿勢。前を見据える勇気に満ち溢れた黒い瞳。

穢れを知らないかのように澄んだ空気をまとわせ、上品で理知的な、人を惹きつけるには十分な顔立ちと、穏やかな威厳を持っていた。

それは今までに見たことのない、確固たるものとして強く洗練された印象であった。それが無性に羨ましかった。嫉ましいと言ってもいいくらいに。

暗い世界の中で、エメザレの周りだけが明るくなった。

エメザレのその様子には、グセルガも一瞬言葉を失った。

「ふん」

しかし、すぐに侮蔑するようにして鼻で笑った。

「お前をここに招いたのは、四百年にもわたる黒い髪への支配を続けるべきか否か、わたしが自分の目で見て判断したかったからだ。

お前の行動一つで黒い髪の歴史が変わる。それを自覚し慎重に行動しろ」

「はい。陛下」

「エメザレ。お前はわたしに絶対の忠誠を誓うかね」

答えを信じるはずがないのに、グセルガはきいた。

「はい。陛下。全て陛下の仰せのままに」

「よいか。今お前がここにいられるのは、わたしの善意によるものだ。
けて黒い髪には開かれることのなかった、宮廷への扉をお前にだけ開けてやったのもわたしだ
。

わたしに感謝し、絶対に服従し、どんな事があろうとも、一切口答えはするな。
わたしだけではなく、白い髪の誰にも反抗してはならん。口数は少なく、余計なことはするな。
そして、何があっても仕事を休んではならない。
お前は黒い髪の中で最も有能なのだから、これくらいはできるであろう。
これらが守れなければ、即刻宮廷を去ってもらう。わかったな」

「はい。陛下。承知いたしました」

イウはグセルガの勝手な決め事に、心の中で異議を唱えたが、エメザレの口調は変らない。特に
驚いた様子もなく、すんなりと承知した。
あまりにもあっさり承諾するので、イウのほうに驚いて目をしばたかせた。
これでは自ら進んで煉獄の惨苦に身を捧げると宣言したと同じこと。その結末は明らかだ。

「よかろう。ではお前の監視をする者を紹介しよう」

「ジヴェーダを呼べ」

「ジヴェーダ...！」

イウは驚いて声をあげた。その名はあまりにもこの国では有名だったからだ。
ジヴェーダはこの国で最も恐れられている拷問師である。
純潔な白い髪ではなく二代前の片方が黒い髪であったが、ひとを従わせる術を知り尽くしており
、その残酷無慈悲な振る舞いは忌み嫌われると同時に、敵に向けられるには極めて都合のよいも
のであった。
その劣悪なる才能のために彼は宮廷に入ることを許されたのだ。

しかし、存在が邪悪の象徴であると揶揄されるジヴェーダは、王子の前に姿を見せることを硬く
禁じられていた。
まるで化け物のように扱われ、影で悪口を叩くものは多いが彼を前にしては誰もが口をつぐみ、
関わりを持たないよう気をつけるのが常だと聞いている。

グセルガは黒い髪の監視役にあろうことか拷問師をつけるつもりでいるのだ。
そうとわかると、黒い髪への同情がよりいっそう深まった。

「どうかしたのか、我が息子よ」

王の口は笑っていた。

「い...え、何でもありません...」

なんと酷いことを！

出かかった声を無理に押し込めた。

哀れなエメザレに目をやると視線が合った。彼は微笑んだが、イウはそれを無視してうつむいた。

「お呼びでございますか。陛下」

王の間に現れたジヴェーダは噂通りの粗暴をにおわす顔立ちだった。

白い髪には珍しいくらいの長身で、がたいもよくがっしりとしていて、軍人にしては華奢なエメザレより確実に一回りは大きかった。

無作法極まりない無造作な髪には潤いがなく、だらしのない制服の着こなしでわかるように、彼が褒められた人物でないのは確かだった。

「お前の監視と面倒は、そのジヴェーダがみる。わからないことは彼にききたまえ」

せせら笑いを浮かべながらグセルガは冷たく言った。

「はい。陛下」

「では、さっそく床を拭く仕事に取り掛かるといい。ジヴェーダ、頼んだぞ」

その言葉にジヴェーダは意味ありげにうなずいた。

二人がいなくなってから、イウは恐る恐る声を出した。

沈黙の心地よい父との関係のなかで、自ら口を開くのは本来遠慮すべきことであったが、それよりエメザレのおかれる立場と現実が知りたかった。

「あの、父上.....」

「なんだね」

「ジヴェーダというと、拷問師のあのジヴェーダですか？」

「そうだ。ジヴェーダはひとを従わせる術を知り尽くしている。エメザレもまた、彼の思うがままとなるだろう。

第一エメザレは我等より劣等した黒い髪だ。尻を叩く役くらいつけねば、床一つ満足に磨けまい」

「.....そうですか」

エメザレを完全に見下した態度に苛立ちを覚えたが、イウは心の口を閉じた。例えイウが意見したところで、状況は変わらないだろうし、無意識にグセルガとの関係がこじれることを恐れた。彼は一人では何もできないのだ。

「何か不満かね」

「いえ。ただ...その、父上はエメザレを.....その...殺すつもりでいるのですか？」

イウがそうきくと、グセルガは突然大声で笑い出した。

「なぜ、そう思うのだね？」

怒りは含まれていなかったが、意地悪く試すようにきいた。

「いえ...。なんでもありません」

「エメザレを。殺すつもりはない。愛しい息子よ、わたしはそんなにも残酷にみえるのか。殺す理由もない。殺す必要もない」

「すみません。余計なことをでした...」

イウは慌ててうつむいた。これ以上、グセルガの顔を見たくも話したくもなかった。ただ憎しみに似た何かが、イウの胸の中を激しく駆けまわっていた。

しかし、殺さないと言ったグセルガの言葉が信じられなくなるくらいに、エメザレの扱いはひどいものだった。

エメザレは日に日に痩せ細り、生気がなくなって、やっと息をしているかに見えた。何かには操られているかのように、ひたすら床を磨き続ける姿は、滑稽としか言いようがなかった。

エメザレの近くには必ずジヴェーダの姿があり、何かがあるとすぐにエメザレを鞭で打った。それは何かの罰というよりも、ジヴェーダの気分によるものが大半だったが、それでも口答えせずに命令に従うエメザレの姿は、少し気持ちの悪いくらいだった。

最初の頃はあまり見ないようにしていた。偶然に見かけたとしても無視して通り過ぎていた。無論、可哀想には思ったが、残念ながら救う手立ては見当たらないし、それがまた自分の無力さを強調させるので少し苦手に思っていた。

しかし、どうしてもエメザレのことが気になり、その思いは増す一方で、無意識にエメザレを探している時もあった。

遠くからエメザレの背中を見つめて心配することが唯一彼にできることだった。

そして三ヶ月、イウはエメザレを見続けて気がついた。

エメザレこそが仲間であると。

エメザレにも居場所はないのだ。だから、かろうじて手に入れたこの狭い居場所の中に留まっていたくて、だから、どんなことをされても我慢して一生懸命その場に這いつくばっている。それは、はたから見れば醜態でしかないが、それを改善する手段を打てば、確実にその粗悪な居場所すら失ってしまう。その輪廻からは抜け出せないのだ。

だから気付いた瞬間に、エメザレのことが愛しくてたまらなくなった。

きっと自分の気持ちをわかってくれると思った。

王子である自分が、白い髪と黒い髪の平等を望んでいることを伝えたら、エメザレは喜んでくれるのではないかと思った。

もしかしたら愛してくれるかもしれないと。

イウはそんな希望を抱いた。

イウの希望はどうしようもなく強くなって、何度も彼に夢を見させた。とても幸せな夢を。

エメザレと一度話しをしてみたと願ったが、それが王の耳に入りでもしたら一生信用されることはないだろう。二度と口をきいてくれないかもしれない。ずっと無視をされるかもしれない。それはとても恐ろしいことだ。

それでも、イウはエメザレと話しがしたかった。どうしても。

しかしエメザレと二人きりで話しをするのは、なかなか難しいことだった。エメザレの傍らには一日中ジヴェーダ張り付いているし、イウの方にも何人かの目付役が常にいたからだ。

夜に部屋を抜け出すしかない。

些細なことだが、いけない、と言われたことを一度もしたことがないイウにとって、これは大変な決心だった。

そしてエメザレが宮廷に来てから三ヵ月半という月日が流れて、ようやくイウは行動に移した。

昼間の華やかさを失い静まり返って闇に包まれた城の廊下を、月明かりを頼りにそっと歩いた。

広い、広い城の召使の部屋の先の馬小屋を越えて、更に奥に行った所の使われてない物置。そこがエメザレに与えられた部屋だった。

ひどくかび臭く、馬小屋からくる臭いも強く、かつて白かったらしい壁の塗料がわずかに残っているだけの汚い部屋だった。

腐りかけの扉には取っ手がついていたが、鍵はついていないようだった。

イウは取っ手に手をかけた。声をかけなかったのは、勇気がなくて中の様子を伺いたかったからだ。

突然に中からジヴェーダの怒鳴り声がした。

イウは慌てて取っ手から手を放したが、扉は開いてしまったようで、隙間からエメザレとジヴェーダの姿が見えた。

夜までも、ジヴェーダが傍にいるとは思わなかった。

「俺の話を知っているのか、エメザレ」

幸いにもジヴェーダは扉が開いたことに気が付いていない。

ジヴェーダはエメザレの頭を片手でわしづかみにして壁に押しつけていた。

「俺の言うことをきくのは、そんなに難しいことか？ ただこの城から出ていくだけだ。それくらいできるだろう」

しかし、エメザレは答えない。

「何とか言えよ！」

エメザレの顔を壁からもぎ放すと、今度は思い切り突き飛ばした。

彼は倒れなかったが、ジヴェーダはそれが気に食わなかったのか、エメザレの胸ぐらを掴んで床になぎ倒した。

かなり派手に転倒したので、相当な衝撃を受けたはずだが、エメザレは呻き声ひとつたてず、起きあがろうともしなかった。

「声ぐらい出せよ。つまらない奴だな。この口は飾り物か」

床に倒れたままのエメザレの顔をのぞくようにしてしゃがみ込んだジヴェーダは、持っていた鞭の柄をエメザレの口に無理やりねじ込んだ。

たまらず、咳き込むエメザレの姿を見て、ジヴェーダは高笑いをした。

「ああ、無様だ。これが黒い髪のもも有能な男の姿か。実に滑稽だ。誇りも威厳もあったもんじやないな」

「私は出て行きません。私はあなたの功績にも加担しませんよ」

さすがに腹が立ったのか、エメザレがやっと口を開いたが、出てきたのはそんな言葉だった。イウは咄嗟に口に手を当てた。自分が言ったかのような気がしたのだ。

そんなことを言ったら殺されてしまうよ！

イウの心の声はエメザレに叫んでいた。

「なんだと、生意気な！」

言うが早いか、ジヴェーダは体を起こしかけていたエメザレをもう一度床に突き倒すと、馬乗りになった。

「くそ野郎！」

ものすごい形相でエメザレを睨みつけ、こぶしを顔にめがけて振り下ろした。

「やめろ！」

気付いた時には既に、イウはカー杯に叫びながらその部屋に飛び込んでいた。どうやらジヴェーダのこぶしはまだ、エメザレの顔に到着していない。

こんなことができたのか。

イウは自分のしたことに驚いた。

エメザレとジヴェーダは、突然のイウの登場に絶句して固まった。

「王子……なぜ、ここに？」

この状況に気まずさを感じたのか、ジヴェーダはすぐにエメザレを解放した。その問いを無視してイウはエメザレに駆け寄り、彼を抱き起こしながら、ジヴェーダを睨み付けて言った。

「いい加減にしろ！ 彼が何をしたっていうんだ。これ以上エメザレを傷つけたら、ぼくが許さないからな！ さがれ！ 部屋から出て行け」

ジヴェーダはその奸悪のあふれ出す目を細めて、低い位置にいる二人を見ると、なにか言いたげな顔をした。

「なんだ」

「いいえ。失礼いたしました」

納得いかないといった声で、ややぶっきらぼうに言うと、エメザレに一瞥をくれて部屋から出ていった。

「イウ王子。私をかばうと、罰を受けますよ。あまり私と関わらないほうが……」

エメザレは背に回されたイウの腕を、優しく振りほどきながら言った。

さっきの転倒でやはり強く頭を打ったのか、彼は軽い脳震盪を起こしたようで、ふらふらしていて一人では立ち上がれそうになかった。

「罰なんてどうでもいい。それより手当てをしないと」

そういと、エメザレは複雑な表情をして、すまなさそうに微笑んだ。

近くで見るエメザレの顔は傷だらけで、固まりかけた血液がいたるところに、こびりついていた。

床に座り込んでいるエメザレにイウは手を差し伸べたが、エメザレはそれをさりげない動作でよけ、壁に手をつけて何とか立ちあがった。だがすぐに、眩暈でもしたのか座り込んでしまった。

「大丈夫？」

「なんでもありませんから」

心配になってエメザレの顔をのぞくと、彼は必死にそう言った。

「どこがなんでもないんだよ。自分の顔を見てみなよ。こんなになって……」

けれども、エメザレの瞳はいまだに真っ直ぐだった。そして見据える先には漠然とした死があった。しかし、彼はそれを恐れているようには見えない。このまま死んでしまっても構わないというように諦観を抱えている。

「王子、なぜここにいらしたのですか？」

なんだか少し悲しそうな声だった。

「なぜって……心配で……」

いざエメザレを前にすると話すのが恥ずかしくなって、イウはエメザレから目をそらせた。

「感謝致します。王子。私のような黒い髪に情けをかけて頂いて……」

エメザレは床に頭を摩り付けるようにして深く頭を下げた。

「やめて！顔をあげてよ！」

エメザレに恐れられているような気がして嫌だった。つい叫ぶと、エメザレは慌てて顔を上げ不思議そうにイウの顔を見た。

「ぼくは、黒い髪が劣等してると思ってない！ぼくは黒髪が醜いと思わないし、お前を卑しいと

も思わない！ぼくはお前のことが心配で来たただけだ。だから……ぼくは、ぼくだけは敵じゃないんだ」

しばらくエメザレは座ったままイウを見上げていたが、やがて静かな黒い瞳が鮮やかな感情を抱いて輝いた。

「良かった」

エメザレは呟いた。

「私はここへ来て良かった。王子に会えて。その言葉を聞けて。感謝致します。ありがとう。ありがとうございます。あなたは私の希望です」

「そんな……」

そんなふうに出てくれたのはエメザレだけだった。

いつだって、否定されてそれに耐えてきた。グセルガの作った型のなかに入って、気持ちを変形させてきた。誰も自分の存在を認めてはくれなかった。頼りにされたことも感謝されたこともなく、ただ目を開けて息をしているだけだった。

そんなイウを今エメザレは希望と呼んだのだ。

心から嬉しく思った。

劣等感の塊であった少年の凍りついた心を暖めるには、その言葉は充分すぎた。

だから、エメザレには死んでほしくない。できれば宮廷でずっと働いてほしいが、それが彼を傷つけるなら、その望みは諦めていい。それよりも、幸せな場所で彼には生きてもらいたい。

イウはしゃがんで床に座り込んでいるエメザレの腕を掴んだ。

「城を去るんだ。エメザレ。このままだと死んでしまうよ。確かにこの国は不条理だし、お前が納得できないのはわかるけど、ぼくが絶対変えてみせるから。

だから意地を張るのはもうやめて、父上に仕事をやめさせてほしいと頼むんだ」

願いを込めてイウは言った。

「無理ですよ」

「どうして。そんな体でどうするつもり？ そこまでして、一体何がしたいんだ？」

エメザレの答えがにわかには信じられなくて、イウは少し強くきいた。

「私にはね、黒い髪 of 希望がかかっているんです。みんな、私に期待しています。平和解決の希望をつないでいるのは、私だけだから。

私が陛下に認められて、陛下が私たちを積極的に平等に扱うことを約束してくれさえすれば、もしかしたら、誰一人死なず、戦争は起こらないかもしれない」

「そんなの夢物語だよ！」

悲しくなってイウは叫んだ。

しかしエメザレはそんなことくらいわかっているのだろう。それが余計に歯がゆくて、悔しくて仕方がなかった。

「そうですね。そうかもしれませんが。でも私はその可能性に全てをかけているのです。だから、自分からやめるわけにはいきません。

私は自分に微塵の価値もあるとは思っていませんが、そんな私の微々たる犠牲で国を変えることができるなら、それは喜ぶべきことのように思います。素晴らしいことです。とても誇りに思っています」

どうしようもないくらいに頑な声だ。エメザレの決意が変わることはけしてないのだろう。改めてイウは自分の無力さに失望した。

「死んでしまうかもしれないんだよ？ どうして何も恐れていないの？ どうして？」

やりきれない思いが溢れ出して、いつの間にかイウは泣いていた。

「あなたもいつか、死など恐れなくらいに全てを信じ、大きな夢を見ることがあるでしょう。陛下の厳格な思想の下で、消えることのなかったその意思の強さを持っているのならば、私のしたことの意味をわかってくださると信じています」

そう言って微笑んだエメザレの瞳には、諦念に似たたくさんの希望が埋め込まれていた。

しっかりとした口調で言われたその言葉は、少年の胸に深く深く突き刺さり激烈な印象を与えた。イウの求めていた純粋な正義と「正しい」正論が、そのなかにあったからだ。形式じみた称賛や置物のような綺麗ごとではなく、確固たる意思として存在するそれは、いまだかつてないくらいに強く心に響いた。

イウの心はエメザレへの憧れで一杯になった。

これほどまでに正しいひとはいたのだろうか。否、全てのものは間違っていた。

そう、答えは限りなく簡単なことだったのだ。

グセルガの「間違い」はイウのなかでその時、完全に証明された。

結局、イウがエメザレに会ったことはグセルガの耳に入らなかった。

おそらくジヴェーダはイウと話すことを禁止されていたのだろう。面倒事がいかにも嫌いそうなジヴェーダは自分の身を案じてか告げ口をしなかったらしい。

だがそのことはあまり関係なかった。どちらにせよ、今日こそ自分の意思をしっかりとグセルガに伝えるつもりでいたからだ。

「毎日毎日、殴らればかりにされ、それでも懲りずに床を磨いている。なんて愚かなのだろう。あの濁り汚れた黒い瞳を見たか。我々を恐れ、憎んでいる。あの男には気をつけるのだ」

そう呟きながらグセルガは朝食の席にやって来た。傍らの召使はその呟きを聞いているのかいないのか、黙って王の座る椅子をひいた。

グセルガは黒い髪を目に映すことすら嫌悪していて、エメザレという存在を可能な限り無視し、できるだけ顔を合わせないように心掛けていたが、今日に限っては何の手違いかエメザレに出会ってしまったのだろう。

いつにも増してグセルガの顔は不機嫌だった。

「ち、父上……！」

いつもはおとなしい息子が、いきなり大声を出したのでグセルガは驚いた表情をした。

「なんだね。我が息子よ」

「それは…ぼくは、違うと……。それは、違うと思います……」

イウは言葉をつまらせながら、それでも精一杯言った。

少し間を置いて、考えてから不思議そうにグセルガはきいた。

「それで、どう違うのだね」

「エメザレが何をされても怒らないのは、この国を思っているからです。けして、誇りが無いわけでも、愚かなわけでもなくて……」

グセルガの顔から血の気が引いてゆき、表情がどんどん硬くなっていくので、いくぶんイウは心配になって、口をつぐんだ。

「どうした。続けたまえ」

ひかれた椅子に座りもせず、イウの言葉に耳を傾けた。

「だから、エメザレは父上に認めてもらえるよう、すごく……努力しています。なぜ、認めてやらないのですか…？」

重苦しい、しばらくの沈黙の後、グセルガは深刻な顔で言った。

「イウ。それは非常に危険な思想だ。実の息子の口から、そんな言葉が飛び出てくるとは、正直心外だ。お前にいらぬことを吹き込んだ悪しき者はエメザレか？」

「……いえ。違います」

「エメザレはお前を脅し、口止めまでしたのか。前々から、息子に悪影響が及ぶことを懸念していたが……」

だんだんと強く大きくなる声に、イウは自分の意見を言ってしまったことを後悔した。しかし、今さら後悔などしたところで、全く無意味である。グセルガはとまらなかった。

「エメザレをここへ呼べ」

召使はその怒鳴り声から逃げるようにして、黙ったまま背を向けると走っていった。

「違う。違うよ。父上！ぼくが勝手に思って言ったんだ。エメザレは何も言ってない！」

なぜ父は自分ではなくエメザレに矛先を向けるのだろう。

エメザレのためを思って言った言葉は残酷にもなんの役にも立たず、逆に窮地に追い込もうとしている。

「我が息子よ。お前までわたしを裏切るのか！」

ついに、それは叫び声になった。

「違います。父上、ぼくはあなたを裏切るつもりは――」

「早くしろ！早くエメザレをここに連れて来い！」

自分を表現することは、そんなにもいけないことなのだろうか。グセルガがイウ考えを認めるはずがないのはわかっていた。それで自分が傷つけられるのは、覚悟して言った意見ではある。ただエメザレを助けたかっただけなのに。それなのに。取り返しがつかないことだとわかりつつもイウは心底嘆いた。

「お呼びでございますか。陛下」

エメザレは音もなく現れると、グセルガの前でひざまずき頭を下げた。少し遅れてジヴェーダも現れたが、王の様子をうかがって隅のほうに立った。

「お前に一つ言っておく。我等より劣った、黒い髪のお前がこの城で働けるのは、わたしが慈悲をかけているからだ。わたしの思いやりと優しさ以外に、お前を救えるものはない。お前はそれをわかっているのかね」

静かに始まったグセルガの言葉はいつもより余計に重く聞こえた。グセルガの瞳の中では狂気に似たなにかが輝きを放っていた。だからといって、イウに何ができるわけでもない。この場から逃げたい衝動に駆られたが、それすらもかなわない。

「はい。わかっております」

「わたしに感謝しているかね」

さらに静かな声でグセルガはきいた。

「はい。いつも感謝しております」

「そうか。わたしに感謝しているのだな。ならば、なぜ我が息子に余計なことを教えた！わたしが大事に大事に育ててきた息子に！なぜいらぬ事を吹き込んだ！なぜわたしは息子にまで裏切られないとならない？お前だ。お前のせいだ！」

金切り声で叫んだ。グセルガを取り巻く不穏な空気は激的な怒りとなって、殺意すら漂わせていた。

「違う！父上、ぼくの話聞きいてください！」

体を振るわせながらも、腹から声を絞り出した。エメザレが殺されてしまいそうで、ただ恐ろしかった。城の中で、自分以外に彼の味方をする者は、一人もいない。少しでもエメザレの力になりたいと、イウは必死に悲鳴を上げた。

「私はイウ王子に、余計なことを教えた覚えはありません」

しかし、その願いはエメザレの一言によって崩れ去った。

明らかに声の調子が変わった。まるでグセルガに対して喧嘩を売るような声の感じだ。

グセルガを睨み付けるエメザレの目には、微笑と優しさではなく、これまでの仕打ちへの恨みと憎悪が込められていた。

なぜこんなことをするのか、イウは不思議に思った。いつもの穏やかな声で言えば、グセルガの怒りをかうことはなかったかもしれないのに。苦痛や憎しみを我慢することなど、エメザレには簡単にできたはずなのに。

疑問を投げかけるようにエメザレを見ると、彼はイウの方を見て優しげな表情をした。

「口答えをするな！ 劣等した黒い髪め！」

もはや、エメザレが言ったことなど聞こえていない。グセルガはエメザレのそばまで行くと、いきなりにひざまずいたままのエメザレの頭を蹴りあげた。

エメザレは体勢を崩して倒れ、床でさらに頭を強打したが、グセルガはかまわずに何度も彼の頭を踏み付けた。

「なぜ、こんなもののために！ わたしが！」

声は裏返り、グセルガは狂ったかのように何度も何度もエメザレを蹴りつづけた。それでもエメザレは抵抗するわけでもなく、悲鳴を上げるでもなく、全てを受け入れていた。

しばらくして、疲れたのかグセルガはエメザレを蹴るのをやめた。しかし、グセルガの怒りがおさまったわけではなさそうだった。

これ以上見ていたくなくて、イウは両手で頭を抱え、その場にうずくまった。

「ジヴェーダ。それを痛めつけろ。手加減するな」

グセルガは、部屋の隅で薄ら笑いを浮かべて見物していたジヴェーダに言った。

「ここで、でございますか」

遠慮気味に彼はきいた。

「そうだ。我が息子の目の前で、わたしに逆らうものはどうなるか教育してやらねばならない。みておくがいい。我が息子よ。二度と見られぬような、惨い光景をその目に焼きつけておけ」

そう言うと、泣きながら震えているイウの髪を引つつかんで、無理やり椅子に座らせ、それを見せ付けた。

白い大理石の床が、次第に赤く染まってゆく。皮膚という皮膚が傷付けられ、全身から血が吹き出して、血生臭い匂いが部屋中に広がった。ジヴェーダの鞭を打つ音や、殴る音がイウの頭の中で響き広がる。

でもエメザレは、ただ黙ってどこか前を見つめていた。きっと彼は死を見つめているのだ。静かに。彼はその時を待っているのだ。

それがイウには信じられなかった。自分は玉座に座って見ているだけで、止めることもできずに、頭を抱えて震えながら泣いているのに。自分にはけして受け止められない、酷い現実をエメザレは何の抵抗もなく受け止めている。

どうしてこんなに無力なんだろう。

ごめんなさい。ぼくが悪いんだ。

何かしなくては。何か――

しかし、そう思うだけで、結局イウは何もできないままに、エメザレは少しも動かなくなった。鮮血の絨緞に横たわるエメザレを前にグセルガはこう言い放った。

「白い宮廷に黒い無能者はいらない」

「ぼくの言うことを誰も聞いてくれないんだ……。だから...手当てのしかたがわからなくて……。ごめんなさい、ごめんなさい……。ぼく、何もできなくて...ぼくのせいなのに……」

自分の無力さが歯がゆくて、自分が憎くて、後から後から涙が零れ落ちた。泣いたところで、どうにもならないことくらいわかっても、涙が止まらなかった。

「なにも、王子が謝ることなんてありませんよ」

しかし、エメザレの声は擦れていて、耳をそばだてなければ聞き取れないくらいに弱々しかった。

「私が陛下に生意気な口をきいたせいですから。それに、あなたは私をここまで運んでくださった。重かったでしょう？」

イウは頭を横にふった。エメザレが重いはずがない。十歳のひ弱な少年が運べるほどだ。痩せきったエメザレの身体は、生きているのが不思議なくらいに軽かった。

そんなエメザレを引きずって、イウは自分のベッドに彼を寝かせたが、一国の王子が怪我の手当ての仕方を知っているはずがない。どんどん紅色に染まっていくシーツを前に、彼は泣きじゃくりながら、吹き出す血を押さえるので精一杯だった。

「ぼくのせいで……許してくれ。ぼくらを許して。こんなことになるなんて……。ただ、ぼくは、父上があんまりにもお前をばかにするから…悔しくなって。ごめんなさい……」

「平気ですから。心配しないでください。私は見た目より頑丈にできていますから。すぐに治りますよ」

エメザレの明るい声が、余計イウの心を締め付けた。

「でも……でも、右目が潰れてしまったよ……。痛かったでしょう？ もう、治らないよね。ごめん……許せるはずないよね。ごめんね」

何度も踏みつけられた右側の顔は変色し、ひどい箇所は抉れて赤い肉が見えていた。殺すつもりだったのだろう。傷は深く、骨も幾本か折れている。特に足はひどく折れ曲がっていて、もう軍人としての役目が果たせないのは明らかだった。

「いいんです。片目くらい。足でも手でも、何でもいいんです。それで、少しでも望みが繋がるなら、そんなもの少しも惜しくないんです。

私には我慢することくらいしか、できることがないから……だから、私は今まで、今までずっと……」

エメザレは声を殺して泣いていた。涙を見せるのが恥ずかしいみたいで、骨の浮いてみえる不自由な手で顔を覆って、すすり泣いた。

「すみません。あなたに、こんな姿を見せたくなかったのに……」

そう言って彼はイウに背を向けようとしたが、思うように動けなかったらしく、少し体を浮かせたただけであきらめた。

「あまり体を動かしちゃ駄目だよ。ゆっくり休んで。ぼく、そばにいるから」

「いえ、そんな――」

「いいから、おやすみ。ぼくはお前のそばに居たいんだ」

唯一自由のきく、それでも傷だらけのエメザレの右手を、優しくなでるようにして握った。

「王子。あなたに一つお願いがございます」

目を閉じる前に擦れる声でエメザレが言った。その声は何か祈りのようだった。

「なんだ？」

「どうか、黒い髪を救ってください。どうか、戦争が起こらぬように。誰も苦しめないように。あなたが王になった時は、必ず良い国にすると、私と約束してください。

そして自分自身の意思でものごとを判断することを、けして忘れないでください」

エメザレは小さな、やっと振り絞った声で言った。

「わかった。絶対に守るよ。良い国にする。だからエメザレ、ぼくが王になった時はきっと、ぼくのそばにいてくれ。ぼくが迷ったり、何をすればいいかわからなくなったりした時は、お前が助言をするんだ。そうすれば、もっと良い国になるよ。そうでしょう？」

また、全てが間違っている場所でイウは生きなくてはならない。しかし、エメザレの正しさだけは消えないだろう。エメザレの言葉の一つ一つが、彼の心をつくる基盤となって、力強く支えていた。

「はい。王子。約束いたします」

優しげな顔には必死さと希望がみなぎっていて、でも自身は時代においていかれることを、誰よりも悟っていて、だからとても清々しいようで、それでもどこか憂愁が漂っていて、それを全部浮かべて彼は微笑んでいた。

そしてエメザレは安心したように静かに目をつぶった。

彼が一番優れているのだ。

彼が一番正しいのだ。

その思いが色あせることはなく、むしろもっと強烈な色で塗りつぶされていった。

しかし、あの次の日に宮廷からごみのように放り出されたエメザレの行方はわからない。この国はあの時と何も変わっていない。いや、さらに悪くなっている。

エメザレを無能者にしたことで、グセルガの黒い髪は白い髪よりも劣っているという説は、無理やり証明された。王に逆らった貴族は次々と処刑され、弾圧され消えていった。何かができるかもしれないのに、何もしなかった。無力だった。何も変えられていない。

小さな少年にはエメザレへの罪滅ぼしとして、グセルガに無意味な反抗するぐらいしかできることがなかった。そして、滑稽なほどに無力な自分に歯がゆさを感じ、かんしゃくを起こしては、強烈に刻み込まれたエメザレへの憧れを口走った。

イウはいつまでも信じていた。

いつか自分がこの国を変え、そしてエメザレと共に暮らすことができると。

エメザレはどこかで生きていて、それをずっと待ち望んでいるのだと。

明確な答えを見つけられずに迷走を続ける中で、エメザレという存在だけが、絶対的に正しいものとして、なかば妄想のように神格化されていった。

グセルガは何とかしてそれをとめようと、今まで以上に厳しく接したが、すればするほどイウの妄想は強くなるばかりだった。

イウの異常なまでの思いは、グセルガだけでなく宮廷で暮らす全ての召使と国中の白い髪から疎まれ、それは皮肉にもあのジヴェーダと肩を並べるほどにひどいものとして扱われた。

元々希薄だった父との関係は完全に崩壊し、理解しあえる仲間もおらず、ほとんど自分の部屋から出ることもなくなり、まるでクウェージアの王子は死んだかのように無視され、話題すら出ることはなくなった。

エメザレの解雇から四年という時が過ぎた。

自己の正義に心酔し、儚い希望にすがり付いたままの少年は十四になった。

ある時、父がイウを食事に呼んだ。呼んだというよりも強制に近かったが。

グセルガと食事を共にするのは半年ぶりだった。部屋から出るのさえ久しぶりだ。イウは大勢の召使に連行されるようにして歩いた。すれ違う白い髪目は犯罪者に差し向けられるもののように侮蔑的だった。

連れて行かれた部屋には何十人もの家来が壁に張りついて、人形のようにずらりと並んでいる。

「座るがいい」

無駄に長いテーブルの遠くに父は座っていた。召使がひいた白いきれいな椅子に、イウは大人しく座った。

「イウよ。わたしの愛しい一人息子よ。お前はまだ、わたしの言うことが正しくないと、言うつもりかね」

「訊かずともおわかりのはずです」

すかさず召使はイウの目の前に豪華な料理を出したが、彼は目もくれずに椅子に座るなり父の厳めしい顔を睨み付けた。

「あなたの頭は古すぎるのです。父上。もう意地を張るのは止めにしませんか。ぼくに王位を譲ってください。ぼくはこの国を平和と平等に導く自信があります。あなたは老後を穏やかに過ごしていればいい」

「イウよ。わたしがお前のことをいつでも一番に考え、この世界で最も愛しているという事をまず認めてほしい」

突然イウは顔面をテーブルに伏せ、肩を震わせながら大声で笑いだした。もはやグセルガがなんと言おうとも、イウの耳には間違いにしか聞こえない。

グセルガはそれを異様な目で見ながらも黙っていた。

「嘘ならもう少し、うまくついたらどうですか。愛しているのなら、ぼくに王位を譲ってくださいよ」

やっと笑い終わってから、顔をテーブルに伏せたまま言った。

「それはできぬ。お前の考えはこれまでの国家体制を維持していくうえで非常に危険だ」

「ぼくは今の国家体制を維持する気は毛頭ありません。ぼくは、ただこの国の繁栄を願っているだけです。あなたはこの国を救う術を知っているのに、救おうとしない。ただ苦しめて自分で納

得しているだけ。あなたがいるからぼくは何もできないが、あなたが許してさえくれば、ぼくは何でもできるのです」

「哀れなイウよ。おまえは狂っている」

グセルガはそう吐き捨てた。その瞳には歪められた期待と希望ではなく、イウへの嫌悪と否定が映っていた。

「ぼくは狂ってなどいません」

「目を覚ませ。我等、白い髪は常に全てにおいて優越していた。常に特別な存在だった。この世界で最も有能であり、最も美しく、神エルドに必要とされている。黒い髪とは価値が違うのだよ。白い髪に誇りを持て。彼らを支配することは、世界ができたときから既に決まっていたことだ。低俗な彼らに同情する必要はない」

太古の昔から続く、白い髪の強い選民思想。

エルドという神に仕え、旧世界の大戦でエルド派として戦った、種祖エクアフの子孫とされている白い髪。

黒い髪は種祖エクアフの右腕であったシャイヤの子孫とされているため、根拠のない優劣が、一万年の時を経てもごく自然なことのように残っている。

そして、遠い昔に存在した白い髪の超大国デネレアは、世界の三分の一を支配していた時代もあった。

その栄光と繁栄の余韻は、エクアフという種族全体が廃れ、衰退の一途を辿っているこの時世においてもなお続いているのだ。

世界の端にある小国が、この不安定な世界情勢を前に、内部で髪の色がどうのと言っている余裕は本来ならばないのである。

「それは、あなたの抱いている妄想に過ぎない。髪の色なんて関係ない。むしろ心の美しさにおいては、あなたのほうが劣っている」

「わたしを侮辱する気か！」

グセルガは立ち上がり、近付いてきたかと思うと、いきなりイウの目の前にあった皿を思い切り投げつけた。

金属でできた固い皿は、鈍い音を立ててイウの額に当たった。

しばらくしてその場所から血が流れ出てきたが、イウは血を拭いもせずにグセルガを睨み付けた。

「そうやって、自分の意思を押しつけては、拒否する者を殺すのですね」

グセルガは押し黙って、顔をそむけた。傷心ではなく怒りのために。

「なぜエメザレにあんなにひどい仕打ちをしたのですか」

「その名を口にすると聞いたはずだ」

イウの顎を片手で引っつかんで言った。

「それを承諾したつもりはありません」

「なぜお前はあの男に固執をする。一体エメザレはお前に何をしてくれたと言うのだ？」

「ぼくに正しさを教えてくれました。この城の中で彼だけがぼくの理解者だった。エメザレはあなたに従順だったはず。あなたに感謝し、尊敬と忠誠を持って接していたはず。あなたの知る中で、最も有能で信頼の置ける人物だったはず。それなのに、なのにあなたは彼に屈辱を与えた。片目を奪った。無能者と呼ばせた。あなたの身勝手な下らない考えのために！」

抑えきれないエメザレへの憧れがほとぼしった。そして、過ぎ去った出来事を思い出しては、エメザレ以外の全てのものへ怒りを覚える。

正しいのはエメザレだけだ。彼はそれ以外に正しいものを知らない。もしそれを正しくないというのなら、それが間違いなのであって、それは彼の確信を揺るがす理由にはならない。

「もういい」

「あなたはエメザレが怖かった。認めたらどうですか？」

イウは激しく責めるようにきいた。

「愛しい息子よ。一つ教えておいてやろう。お前に王位をわたす気はない。お前に、わたしの国はやらぬ」

「いちいち愛しいと付けるのはやめていただけませんか。ぼくを憎んでいるくせに」

「お前がどう思おうと関係ない。息子よ、わたしは再三にわたり、わたしの考えを受け入れてほしいと願ってきた。しかし、お前はどんなにわたしが説得しようとも、きく耳を貸さなかった。これは大変に残念なことだが、しかたあるまい」

「なんだと言うのですか」

「三日後までに、お前が考えを変えなければ、お前を処刑台に送る」

イウは一瞬言葉を失った。

「.....処刑？ぼくを？」

「わたしの息子はお前だけだ。しかし、わたしに従順でないお前に、わたしの国を譲るわけには

いかん。例え、わたしの血を引いていなくとも、わたしの死後もわたしの望んだ方向に、この国を導いてくれる誰かに王位を譲りたいと思っている」

世界が収縮していくのを感じた。約束を果たせなくなることを恐れた。急に押し黙り、イウは父の顔を見つめた。

「心配しなくとも、お前はいつまでもわたしの愛しい息子。三日後までに、どんな手を使ってもお前の危険な思想を正し、その悪意に満ちた妄想から救い出してやろう」

無表情の下にある怯えを見透かして、グセルガは満足そうに笑みを浮かべた。

「ジヴェーダを呼べ」

「ジヴェーダ……」

弱々しくイウは呟いた。グセルガは更に口の端を吊り上げて明らかな喜びを表した。あの日以来、ジヴェーダはイウの前に現れたことはなかった。無論忘れはしなかったが。

「ごきげんよう。お久しぶりですね。王子」

そして開かれた扉の向こうから、相変わらず横暴さと奸悪さを垂れ流しているジヴェーダが姿を現した。あの忌まわしいジヴェーダが。エメザレを傷つけ蔑ろにした、憎むべきジヴェーダが。

イウは、悪びれもせずに軽い口ぶりでそう言いながら、軽い足取りで近づいてくるジヴェーダを睨んだ。

「よく、ぼくの前に現れたものだね」

イウの言葉には答えず、ジヴェーダはグセルガにひざまずいて見せた。

「ジヴェーダ。我が息子を頼んだ。どうあっても三日後までに考えを変えさせろ。何をしてもかまわん。それができなければ、お前の手で息子を殺せ」

「はい。陛下。仰せのままに」

あの時のように、ジヴェーダは意味ありげにうなずいた。

「まあどうぞ」

連れて行かれたところは、地下牢でも拷問室でもなくジヴェーダの部屋だった。それなりに豪華な部屋だったが物があふれ、掃除もしていないのだろう。なんとなくほこり臭い。

特に暴力を振るようなそぶりもなく、ジヴェーダはイウをいすに座らせ、何を考えているのか茶に菓子まで添えて、それをイウの前に差し出した。

興味本位で見渡すと、あちらこちらに本が散らばっていた。拷問に関する本が多く時々シクアス語の本もあった。

案外努力家なのかもしれない。

奥にはアンティーク調のガラスケースに拷問器具が並べられており、なぜかそこだけはほかと違ってきれいにされていた。

ジヴェーダは向かいのいすに座り、自分にも茶を入れると音を立ててすすりながら口をひらいた。

「陛下はどうやら、今回ばかりは本気のようにですよ。意地を張っている余裕などないではありませんか。その若さで死にたくないでしょう？」

イウは答えなかった。

まさか自分を処刑すると言い出すなんて。

イウの表情は硬かったが、内心、彼は焦っていた。死を恐れているのではない。というのは正確でないかもしれないが、それよりもエメザレとの約束を果たす術を見つけ出したかった。

「べつだん、私にはあなたが処刑されようがされまいが、どうでもいいことなんですがね。でもエメザレのために死ぬのなら、彼がどのような人物であったか、ちゃんとあなたに教えて差し上げたほうがいいと思ひまして。

彼はあなたが思い描いている人物像と、だいぶ違うようなので、もし真実をお伝えすることであなたの気が変わるなら、それも良いかと」

興味なさ気にそう言いながら、ジヴェーダは菓子を頬張った。

「どういう意味？」

にわかにエメザレの話題を出されて、イウは怪訝な顔をした。

「ああ、そうだ。その前にせっかくなので自己紹介をさせていただきますか」

流れを断ち切って、ジヴェーダは唐突にそんなことを言った。

「紹介などされなくても、お前が性悪なのはわかっているよ」

言ったが、イウの言葉は聞き流された。

「私は灰色の髪の手問師です。神は信仰せず、必要とあらば男とも遣る。さて私を軽蔑しますか？」

ジヴェーダの声は、ばかに明るく冗談のようにも聞こえたが、目は真剣だった。突然に性癖まで語られて十四の少年は少なからずたじろいだが、意地になって答えた。

「髪の色や職業を軽蔑する気はない。信仰も個人の自由だと考えている。だが、同性との行為は軽蔑する」

「真面目に答えて頂けて嬉しいです。それでは本題に入りましょうか」

ジヴェーダは明るく言い放ち、作った笑顔を試みせた。

イウは不思議に思ったが間髪いれずにジヴェーダは話しだした。

「エメザレが国立軍事教育所で育ったのはご存知ですね」

「知ってる」

「あの施設は孤児が入れられるところです。全ての権利は国にゆだねられ、世間とは完全に隔離されている。そして二十五歳になるまでは基本的にあの施設からは出られない。あの時エメザレは二十三歳。外の世界を知らなかった」

クウェーシアにおいて孤児は国の所有物であり、女は外国に売りに出され、男は国立軍事教育で訓練を受け兵士となる。終身兵役の孤児は一生、国の監視下に置かれるが二十五を過ぎれば家庭を持ってよいことになっており、教育所を離れて指定された地域に住むことが許されていた。

「だからなに？」

イウは苛立ってきた。

「つまり、彼の思想は極端に偏っていた。彼が正常だったとは言い切れないし、物事を常識的に

判断できたとも思えない。その証拠のひとつとして、彼は同性と肉体関係を結ぶことに不自然さを感じてはいなかったようですし。まあ、二十三年間男だけの世界で生活してきて、そういうことが一度も起こらないほうがおかしいですがね。どちらにせよ、そんな男のいう正義など信じるに値しない」

「でも、そうだとは言い切れない。エメザレは違うかもしれない！ エメザレの正しさは、変わりはないんだ。わかりもしないのに決め付けるな！」

「わかりもしない、ね……。どうでしょう」

ジヴェーダは言葉をにごらせながら冷笑した。

「どうって？ どういうこと？ 言いたいことがあるならはっきり言え」

「世間知らずの王子様。あなたはいつだって現実から顔を背けている。自分の信じたいものしか信じず、ききたいことだけしかきかない。私は証拠を提示して教えて差し上げたではないですか。だからそのままの意味です。いうなれば一種の、体験に対しての私の意見と感想のようなものですが」

やっと言っていることがわかった。

ジヴェーダは、エメザレを屈辱したと、遠まわしに言っているのだ。

「なぜ、そんなことを……」

汚らわしいというよりも、まずその事実が受け止められない。

「なぜって、明確な理由なんてありませんよ。王子。気が向いたからです」

顔色一つ変えず、ジヴェーダはそれを思い出して楽しんでいるかのようにだった。

気が向いたからという理由で犠牲になったエメザレは、その時どんな気持ちだっただろう。どんなにつらかったらうか。自分には想像もつかないが、それが精神的にも肉体的にも大きな苦痛であったことくらいは理解できる。

「貴様！ そんなくだらない劣情のためにエメザレを玩弄したというのか！ 汚らわしい！」

イウは身を乗り出して、向かいに座るジヴェーダの首を掴み言った。

テーブルに置かれたティーカップは小さな音を立てて揺れ、わずかに中身をこぼして白いクロスに染みを作った。

「おやまあ、ずいぶん難しい言葉をご存知ですね。あれは、あなたにも見せて差し上げたかつ

たですよ。おしかったですね。エメザレの部屋を訪れたとき、あなたは変な勇気など出さずに黙って聞き耳でもたてていればよかったんですよ。行為に対するエメザレの反応を観覧していれば、彼を正義だとか憧れだとか、ばかなことを言い出さずに、平穏な生涯を送れたでしょうに」

イウの怒りにも全く動じる気配はなく、彼が感情的になるとジヴェーダはさらに強く冷笑を浮かべて、わざとらしく彼の気に障るような単語を並べた。

「黙れ！ ジヴェーダ」

イウはジヴェーダの首を力一杯に絞めたが、反対にその腕を掴まれた。

「彼は同性愛者だ。あなたは最初におっしゃいました。同性との行為を軽蔑すると。私を軽蔑するのならエメザレのことも軽蔑すべきだ。そうでしょう？」

「だってそれは.....お前が無理にしたことだろう」

「それに関してはそうですが、エメザレは私を一番喜ばせてくれたといっても過言ではない。経験の違いでしょうかね。彼のほうが私なんかより、よほど経験が豊富なようでしたから」

ジヴェーダは腕を掴んだまま、イウの悲痛な表情を見つめてにこやかに言った。

「聞きたくない！ 黙れ！ 黙ってくれ。知りたくない」

耳を塞ごうとしたが、ジヴェーダの手はそれを許さない。
そしてそのままジヴェーダは、その話しをし始めた。

何時間もずっと事細かに、何度も繰り返してその話をした。

ジヴェーダが、その時エメザレはどんな顔をして、どんな声を上げて、どんなふうにしたのか何度も何度も説明したから、目をつぶるとジヴェーダの話すその時のエメザレの顔が浮かんでくる。

見たくも想像したくもない、その時のエメザレの顔が。エメザレの締め付ける間隔と、中の熱さと、絶頂のときの悦楽の悲鳴が、イウの頭と身体を這い回る。
これ見よがしな、そんなエメザレの姿が浮かんで、次の一瞬に彼の微笑があり、消えるとまたその姿が浮かんでくる。

吐き気がする。エメザレをそんなふうに見てはいけない。
壊さないでくれ。
ぼくのエメザレを。
綺麗なエメザレを。

正しさの基準を。

でも、それでも微笑んでいた。エメザレが頭の中で。彼は真っ直ぐ前を見つめていた。

「それで？いかがですか、あなたの考えは」

ひと段落着いたのか、ジヴェーダは話をやめてイウから手を離した。

やっと自由を手に入れたイウは、力なく椅子に座り込むと頭を抱えてうずくまった。ジヴェーダの声など聞こえなかった。彼は襲い来るエメザレの淫靡な様の幻影と独り戦っていた。鼓動は高鳴り身体は憎いほどに熱くなっている。

気持ちが悪かった。

「もうエメザレが正義だとか言いませんよねえ」

ジヴェーダは可笑しそうにしながら言った。

「……エメザレは正義だ」

やっと振り絞った声で、自分に言い聞かせるように呟いた。

「おやまあ、強情なんですね」

「お前はなんて邪悪なんだ！」

ジヴェーダの呆れ返った声に腹を立てて、イウはあらゆる憎しみを込めて叫んだ。

「邪悪？私が邪悪ですって？私は拷問師です。これが仕事なだけですよ。

灰色の髪というのは実に不便で待遇が悪くて、白い髪にも黒い髪にも蔑まれて、つける職業なんて本当に少数で、ちょっといい物を食べようと思ったら拷問師になるくらいしかないんです。私が好き好んで灰色髪に生まれてきたのだと思います？ 憧れて拷問師になったとでも思っているのですか？

私はあなたの父が築き上げた、この国の不条理に苦しむ被害者の一人に過ぎない。

それでもあなたは私を邪悪だと言うのですか？

王子は最初におっしゃいました、髪の色も職業も軽蔑しないと、同性との行為だけ軽蔑すると。それなら私もエメザレも変わらないはずだ！」

ジヴェーダは声を張り上げた。それは今までの、他人をなんとも思わない飄々しさからは、想

像できないほどに真剣な怒りが含まれているようだった。

「まあいいですよ。気が変わらないなら」

イウが少し驚いたようにジヴェーダの顔を見ると、彼は先ほどの感情的な言葉を恥じるように妙な笑みを浮かべ、また小ばかにしたような物言いで続けた。

「しかし、エメザレへの気持ちが変わらないのだとしたら、困りましたね。どうやって約束を守るつもりなんです？」

「今、考えてる」

「考えるも何も、方法は一つしかありませんよ」

「わかってるよ！」

ジヴェーダの言うとおりの、約束を果たす方法は一つしかない。

グセルガの意思を継ぐこと。

グセルガの死後、自分の思ったとおりの国を作ればいいじゃないですか。と、イウを覗き込むジヴェーダの瞳は語っている。

「それではエメザレを裏切ることになってしまうのではないかと、心配しているのでしょうか？ 物事というのは結果が全てですよ。過程がどうであれ、最終的に約束を果たせばいいんです。もし途中で黒い髪と対立する時があったとしても、陛下の死後和解できるでしょう」

打って変わってジヴェーダの口調は穏やかでなだめるようになった。

「つらいのはわかります。あなたはこの四年間、ずっと独りで戦ってきた。誰も味方をしてくれず、みんな異様なものでも見るかのようにあなたを見ていた。陛下からも嫌われ、罵られ、愛情が断ち切られても、それでもあなたは独りで耐えた。

まるでエメザレのようにね。ならば、彼もあなたの辛さをわかってくれるはずですよ。ここで、あなたが意見を変えないとエメザレは永遠に救われないのですから。この世界でたった一人、あなたしかエメザレを、黒い髪を救ってやることはできないのですから。だから仕方のないことです。あなたは間違っただけです。最後にエメザレはあなたに感謝するでしょう」

囁かれた言葉は優しく、生ぬるい希望で、イウの心は満たされかけていた。ジヴェーダの言うことが、そう間違っているようには聞こえなかったし、むしろもっともな言い草に思えてならなかった。

それでいいのだろうか。

甘い言葉に包み込まれながら心のほんの片隅でイウは思った。

「終わりましたよ」

ジヴェーダは唐突に大声を出した。

部屋の外で誰かがこの会話を聞いていたらしい。少々の間を置いて部屋の扉が開いた。

「部屋にお戻りを」

ジヴェーダは自信に満ちた声でそう言った。

それしかないんだ。

それしかない。

自室にこもった少年は自分を説得させるのに必死だった。薄暗い部屋の中で自分の存在を隠すように縮こまり震えていた。後ろめたい気持ちがないわけではない。それは卑怯なのではないかとも思った。でもそれ以外にどうにかできそうにない。

「はぁ」

彼は吐息を吐いた。

それ以上に恐ろしかったのは、先ほどの淫靡な顔のエメザレが頭の中で巣くってどうにもおぞましい妄想が止められないことだった。

平穩を保とうとすればするほどエメザレのことを思い出し、そしてジヴェーダの言った言葉が頭を侵しては身体を熱くさせた。何より軽蔑すべきはエメザレのそのことよりも自分の身体の方であるようだった。イウは心底、自分を罵って嘆いた。その嘆きは三日経っても止まることはなかった。

「答えは出たか」

玉座に座り、見下す位置にイウを置いてグセルガが言った。二人だけの空間に静かな声が響く。グセルガとの距離は昔よりずっと遠かった。

「……はい。父上」

「ではきくが、黒い髪についてどう思うのだね？」

その問いにイウは小さく答え始めた。

「黒い髪は、我々白い髪よりも……」

「何を言っているのか聞こえない。大きな声で言え」

その荒々しい声。昔から大嫌いだった。否定ばかりしてなにも認めようとしないうえ。穏やかさから無縁の顔。濁った瞳。何もかも大嫌いだ。

「……黒い髪は、我々白い髪よりも明らかに劣った存在であり、その暴悪で陋劣な性質は、我々の秩序と安穩を乱し、我々にとって大変に有害な種族であることは確かです。

よって我々は我々の廉潔な血筋と高次な文化を固守するために神エルドより与えられた種族的特権を行使し、劣族への支配と更生を慈善的に行うのです」

「やっと、理解したのだな」

「はい。父上」

グセルガの目など見れなかった。

仕方がないことだ。それしか手段がなかったのだから。これはエメザレのためだ。けして自分のためではない。きっとわかってくれるだろう。どれだけ悩んで出した答えか。

「エメザレはどうだ」

エメザレの名が胸に響いて、心を痛くした。

「答えられんのか」

「彼は――ぼくが考えていたような、高潔な人物ではありませんでした……。全て、父上のおっしゃる通りでした」

エメザレは軽蔑するだろうか。でも、これ以外に幸せになる方法なんてあるだろうか。素直に処刑されれば、エメザレは悲しんでくれるだろうか。

しかし、それで何が変わるといえるのだろうか。

「よかろう」

満足そうにうなずいてから、グセルガは話を続けた。

「では、もしお前が王となったなら、この国をどう統治するべきだと思うかね」

「黒い髪を弾圧しつつ、この国の平和を守ります」

「しかし、お前はエメザレと契りを交わしたのだろうか？ 白い髪と黒い髪が平等に暮らせる国にする」と

そうだ、あの時約束した。忘れてはいない。忘れたわけではないんだ。

許してくれ。エメザレ。

「そんな約束など忘れませんでした」

言った言葉はあまりにも、あまりにも虚しかった。

これは幻だろうか。

罪悪感のあまり幻覚を見ているのだろうか。

でもぼくには、まるでお前がすぐそばにいるように見える。今、父上の横に立って、微笑みながら剣を振りかざしているような気がする。そして今度はぼくのほうを見て、悲しそうな表情を浮かべている。

お前はぼくの見ている夢なのか？　これがぼくの望んでいることなのか？

イウの視線の先には、まぎれもないエメザレの姿があった。それが現実なのか、妄想なのか彼の答えが出る前に、エメザレはグセルガに剣を振り下ろした。

瞬間、世界の時の流れは限りなく緩やかになった。ゆっくりと、グセルガの首が傾き、そして綺麗に落ちていくと、かつて頭のあった部分から赤い羽根が広げられたかのように美しい角度で鮮血がほとばしった。

それは光り輝く赤い光のように。それは狂喜すべきこと以外のなにものでもない。その時、鏗

びた蝶番がやっと外れて、束縛から解放されたのだから。

血煙のなかから姿を現したエメザレは、初めて宮廷に訪れたあの時のエメザレそのものだった。

恐れのない真っ直ぐな姿勢。勇気と希望に満ち溢れた瞳。何も失われてはいなかった。全てそろっていた。あの穏やかさも、あの優しさも、あの微笑みも、瞳も。

それは待ち焦がれ、憧れ、手に入れたかった、あのエメザレだった。そのエメザレが、今こちらに向かってゆっくりと近づいてくる。微笑を浮かべて。

イウはエメザレに両手を差し伸べた。とても嬉しかったから。

父上を殺してくれた！これでぼくは王になれる！全てが救われる！

誰も死ななくていいんだ。戦争は起こらない。

ぼくは自由になったんだ。約束を果たす時が来たのだ。

長かった。辛かった。でもこれからは、ずっと一緒だ！

「エメザレ！」

たくさんの意味と気持ちを込めて彼の名を呼んだ。

少し前に言った父への言葉など忘れて。虚偽の裏切りのことなど、その罪悪感など、彼の出現できれいにかき消されてしまっていた。

エメザレのもとに早く行きたくて、イウは駆け寄った。希望で輝く幸せな未来のほうへ。

そして彼を抱きしめた。強く強く。とても嬉しかったから。

エメザレの胸の鼓動は早かった。身体が震えていた。上から冷たいものが落ちてきた。何度も

「泣かないで」

エメザレの顔に手を当てて優しく涙を拭った。

なぜだろう。胸が痛い。お前と会えて嬉しすぎるからだろうか。でもいいんだ。ぼくのこと。それよりそんな悲しそうにするのはやめてくれ。何も悲しむことなんてないんだ。ぼくがずっとそばにいるよ。

エメザレの顔を引き寄せた。もっとよく見たかったから。

「お前は……誰だ」

イウは絶望してきいた。

確かにそれはエメザレの顔だった。だが、何かが違って見えた。何が、と言われれば答えようもないが、とにかくそれはエメザレではなかった。

限りなくエメザレに似た何か。

「私はエメザレ」

声は同じ。でもエメザレではない。

「違……う…」

胸が痛すぎて声が出ない。苦しい。息ができない。なぜだろう。

酷い不快感に気づいて自分の胸を見たイウは、ようやくその痛みの理由がわかった。当然の痛みだ。イウの胸には深く剣が刺さっていたのだから。

その光景を目にして頭の中は完全に混乱し、それが夢であることを願った。ますます痛みは酷くなって辺りが霞んでゆく。世界が歪んで感覚が薄れていく。怖くなって、わけのわからないままに、イウはエメザレにしがみついた。

その力は自分でも驚くほどに凄まじいものだった。もはや立っていられなくなって、床に倒れこむその時も、エメザレから手を離さなかった。二人で一緒に床に崩れ、起き上がろうともがくエメザレをイウは離すまいと髪を掴んだ。

そしてもう片方の手は偶然にそこにあった右目に爪を立てていた。

なにか不思議な感覚だった。なにかに操られているように、無意識のうちにイウは、目の中に指を突っ込んで眼球を抉り出そうとしていた。

エメザレはイウの手を引き離そうとしたが、死に際の深い呪いのような力に勝つことができない。

ついに眼球は傷付いて出血し、その血は流れ落ちて、イウの頬をぬらした。

「ああっ！ 血が！ ゴルトバの血が！」

エメザレは右目からの出血に気付くと、悲痛な声でそう叫んでイウから飛びのいた。

「う、ああ……ぎいやあああああ！」

それとほぼ同時に、イウの絶叫が部屋に響き渡った。

熱い。

血が炎よりも熱い。血がおかしい。

まるで生きてでもいるかのように、それは毛穴をこじ開けて、無理やり皮膚の中に侵入しよう

とする。

痛い。

焼かれながら皮膚が剥がされるような感覚だ。

どうにかそれを追い出そうと体中をかきむしるが、それは体内で猛烈に走り巡っている。

恐ろしい。

何かが変形してしまいそうだ。

でも、そんなことはもうどうでもいい。

どうしてぼくを殺すんだ。エメザレ。

強く思ったが、それは声にならなかった。ただ手を伸ばした。エメザレの方に。

それが精一杯だった。

エメザレはイウから間を置き、しばらく様子を見ていたが、その姿に同情でもしたのか差し出されたイウの手を握った。

そして彼は何かを言ったが、強烈な熱さと痛みがその声を消した。

違うんだ。エメザレ。

話したいことや、聞きたいことがたくさんあった。そのエメザレがここにいるのに、何も言えないことが苦しくて、何も知らずに死ぬのが悔しくて、涙がこぼれた。

あの言葉は嘘なんだ。ぼくが王になったら、ちゃんと約束を果たすつもりだったんだ。

どうしても伝えたくて、気力だけでエメザレの服を引っ張った。口を耳に近付けて、動かしてみたが、音にならなかった。

しかし、その愛しいエメザレは、自分に向かって剣を振り上げていた。

ぼくはちゃんと約束を覚えていたのに。

約束を果たそうと思っていたのに。

終わりを告げる、一振りに刹那の輝くものを見た。

大好きだったのに。

おまえのようになりたかったのに。

ぼくは大きくなったのに。

おまえの力になれると思ったのに。

エメザレ。ぼくは————

長い歳月のなかで育った、エメザレへの全ての感情が、なにかに押し潰され破壊されて、新しいひとつのものに変わろうとしたその時、彼の胸に二度目の刃が突き刺さった。

ぼくは————

急激に冷たくなり、ぼんやりと霞んでゆく世界のなかで、エメザレの漆黒の髪色と血に濡れた悲しそうな微笑が目に焼きついていた。深い闇の底へと意識が堕ちて、無機質な感覚が辺りを征服しようとも、その映像は鮮明だった。永遠のように。

かつて、私は英雄と呼ばれた。そしてたくさんの人々の希望だった。

私はそれを望んだわけではない、英雄になどなりたくなかった。

私はただ、何かの役に立ちたかっただけなのだ。

その地位に酔いしれていたわけではない。ただ、人々を絶望から救いたかっただけなのだ。

しかし、たくさん期待を背負い、数多の犠牲を払って、行き着いたのは暗い部屋の汚いベッドの上だった。

拷問され、両足を失った。右目は潰れて、左目の視力もだいぶ落ちた。

顔にはかつての面影などは微塵もない。左手はもう動かない。

そして唯一残った右手はベッドにくくりつけられ、私は固くかび臭いベッドに横たわっている。

それは全て自業自得なのだ。私に不満をいう資格などない。私はこうなることがわかっていて、そうしたのだから。

だから私は生きている限り続く拷問に耐えなくてはならない。

あの拷問から、三年と半年経つ。それにしても長いものだ。私には三年半が百年にも二百年にも感じられた。一体、あとどれだけ生きろというのだろう。

長すぎて、耐えられそうにもない。

それ故に、私は死を望んでしまうのだ。

「帰ったよ。エメザレ」

彼は私の部屋のドアを静かに開けて入ってきた。エスラール。それは私の親友であり恋人の名だ。

世間では白い眼でみられる同性の恋人。嫌悪と軽蔑の眼差しで、私たちは見られ馬鹿にされる。

どんなに嘲笑されようとも、私を見捨てなかった、愛しい恋人だ。

背が高く、しっかりとした体格で、年は同じだが私より無邪気だ。

この国では弱者の象徴であるような黒い髪を、少し長くして癖のある髪質とうまく合わせている。

「おかえりなさい」

私は言ったが、おそらくエスラールには聞こえなかつたろう。

つまらないことだが、私は自殺を試みて自分でのどを切ったことがある。そのせいで、のどが潰れてしまつてうまく声が出せないのだ。

それでも、そばで耳を澄ませてくれればなんとか意思は伝わるようだ。

「お前の好きそうな本を買ってきたよ。留守にして悪かつたな」

「ありがとう」

そう言ったものの、私はあまり嬉しくなかつた。

本を買う金の余裕などあるはずがないのだ。それでも、本を読むことくらいしか楽しみがない私のために無理をして、彼はいつもどこかに行くときは本を買ってきてくれる。自分のことはいつも後回しで、私のことを心配してくれる。

でも私はそうされる度に自分を情けなく思う。

「すまない。手が痛かつたか？ きつく結びすぎた？」

赤黒く変色した私の手を見て、エスラールは慌てて紐を解いた。

彼の留守中に二度も自殺未遂をしたから、それを恐れてこんなことをする。

申し訳のないことをしたと思っている。私は二度も彼を裏切つた。でも、死の誘惑に勝つ自信がないから、手を縛られても仕方がない。

「エスラール、ザカントはどうだつた？」

「何も変わつてないよ。あそこは。もちろん、この国も何も変わつてなかつた」

クウェージアという国は、不平等であり不条理の国だ。白い髪の種類は白い髪だからという理由だけで支配権を握り、黒い髪の種類は黒い髪だからという理由だけで支配される。

私たちは黒い髪の種類であり、また孤児でもあつた。

クウェージアにおいて、孤児は国の所有物だ。私たちは、生きている限り戦い続けなければならない、終身の軍人にされた。私たちは国家の作つた檻の中で、生涯を送らなくてはならなかつた。

だが、私はそんな状況に不満などなかつた。檻の中しか知らない私には、それが当然のように感じられたからだ。

親を知らない私だつたが、一つだけ親から譲り受けたものがある。

黒い髪は劣つてなどいないという思想だ。

誰から教わつた訳でもないのに、その思いだけは揺るがなかつた。何度、劣つていると教え込まれても、そんなはずはないと思つた。確かに優れてはいないかもしれない。でも劣つてもいい。

だから、それを証明するために、いずれ起こるであろう、黒い髪と白い髪の戦争を阻止するために、少しでも小さな犠牲でこの国が救われるように、私はクウェージアの宮廷へと赴いたのだ。

どうなるかもわかっていた。私なんかの力で、クウェージアを変えることなどできないと。殺されてもいいと思っていた。

あれは、私の中で最後の賭けだったのだ。

そしてこの様だ。

世間は私を英雄に祭り上げておいて、こうなった途端に罵った。

私が育った、国立軍事教育所であるガルデンからは不名誉除隊をさせられ、更にガルデンのある軍事都市ザカントからは永久追放された。

つまり死ねということだ。私はそれでも構わなかった。私は自分のできることはしたし、力が足りなかったのは自分のせいだと思っていたからだ。

だが、愛すべきエスラールだけは、唯一私を見捨てずに、あろうことか軍を脱走してまで私についてきてくれた。これは死刑に値する罪である。

従って、エスラールもまた、ガルデンからは除名処分にザカントからは永久追放された。

軍人の地位を剥奪され、何も持たないままに逃げ出してきた私たちには住む場所も一文の金もなかった。

私たちはしばらく、放浪した。目立たないように、ある時は橋の下で、ある時は路地の隙間で眠り、食べ物は畑から盗んだ。

どこか遠くへ行ければよかったのだが、私を連れて長旅をするのは無理だとわかったエスラールは、外国へ行くことを諦め、ザカントの隣町でひっそりと暮らすことになった。

そしてちょうど、二十五年の途中兵役を終え、ガルデンを出てザカント内で家と家族を持つことを許された、同期のヴィゼルが私たちを探しにきたのだ。

ヴィゼルは、初めてザカントを出た日に、初めて関係を持った女性と結婚した。彼女は娼婦だったが、エスラールが言うには愛嬌のある可愛らしい女性であるらしい。

二十五年分の給料が国から支払われ、小さいながらも家も与えられたヴィゼルは、自由になった途端、私たちの行方が心配になったそうだ。

ヴィゼルは自分のもらった中から五年分の給料を私たちにくれた。その代わりに、エスラールはガルデンの同志が率いる革命軍に協力することになった。

どうやら私の思想は、私がいなくなった今もガルデン内で引き継がれているらしい。私の思惑とは全く正反対の方向に、ことが進んでいるのは否めないが、ここまで無力な私が今更なにを言っても仕方がない。

「戦争はいつ起きるの？」

ガルデンの革命軍はすでに、黒い髪の種族を結束させていた。国中の黒い髪はもはや革命軍の駒と化している。

「もうすぐだ」

「止められない？」

「無理だ」

なだめるように彼は言った。

「そう」

「ごめん。何もできなくて」

彼は優しく私を抱きしめた。温かい体温がゆっくりと伝わってくる。それでも私には、彼をしっかりと抱きしめる力がない。

全てのものが不可能になり、全てのものが絶望になり、ささやかな幸せすら脅かされる。

「仕方ないよ。君のせいじゃない」

この国がこうなったのは誰のせいでもない。たくさんの思惑と思想が絡み合っ、こうなってしまっただけだ。

「なら、戦争に行きなよ。君は民衆に必要とされてる。君がいなきゃだめなんだ。私のことはいから、この国を変えて」

私は言った。せいっぱいの希望だ。私の時代は既に終わりを告げた。新しい統率者が現れれば、民主はそれを英雄と呼ぶ。古い英雄は忘れ去られ、それが繰り返される。

「この戦争は長くなる。お前を置いてはいけない」

「死にかけた私なんかのために、この国を見捨てないで」

「クウェージアは大切だ。でもそれ以上に、俺はお前が大切だ」

彼のそんな言葉に私は首を横に振った。

「違う」

「違うない！」

「私のことはもう忘れてくれ、そして幸せな家庭を築け。君の幸せを潰して生きるのは嫌なんだ。私がいなければ、もっと違ういい道があった。私のせいで、君はどんどん不幸になる」

「エメザレがいれば俺は不幸なんかじゃないよ。どうしてそんな寂しいことを言うんだ」

「こんな顔とこんな体なんかじゃ、あっても何の役に立たない。何もできない。こんな私として、何が幸せなの？」

せめて。せめて、顔だけでも元に戻ってくれたら。こんな醜い私を、エスラールは一体どんな気持ちで、いつも抱きしめているのだろう。

「俺が愛してるのは顔と体じゃない」

「違う。君はそれも含めて私を愛していたはずだ。顔と体という私を愛する二つの理由を失った今、君の愛は完全じゃない」

「昔はそんなことを言う奴じゃなかった」

エスラールのそんな言葉が胸に突き刺さって、私はやっと我に返った。

そして同時に悲しくなった。私は心の持ちようまで変わってしまったのだろうか。

だとしたら、彼は一体私の何を愛しているというのだろう。私が思うにそれはおそらく、過去の残像だろう。

彼は、かつて輝いていた私を愛しているのだ。今の私ではなく。

「そうだね。私らしくない」

私は一生懸命に笑った。少しでも前の笑顔に似るように。少しでも昔に戻りたくて。でも実際は、硬くなり不自然に再生した皮膚が、わずかにつりあがっただけだろう。

どんなに醜い顔で私は笑っているのだろう。

「それよりも、エスラール。どんな本を買ってきてくれたの？」

「やっと機嫌を直してくれたか」

彼は嬉しそうに言うと鞆の中から古臭い本を取り出した。

表紙は焦げ茶色ですすけた金で装丁が施されている、分厚い本だった。

そこには意外な文字が刻まれていた。

「シクアスの本だね」

「確か、昔シクアス語を訳すのが好きだって言ってたよな」

「好きというか、敵の言葉だったから使えるといろいろ便利だったんだ。でも君にはそう言ったかもしれないね」

彼が少しがっかりしたような表情をしたので、あわてて私は彼を気遣った。

「それより、お腹がすいたよ」

また嘘をついた。食欲など皆無なのに。

エスラールの暗い顔は嫌いだ。

「ああ、そうだよな。ごめん。何か作ってくるよ。何が食べた
い？」

「なんでもいいよ。あんまり手間のかからないものでいいからね」

そう言うと、エスラールは大きくため息をついて立ち上がった。

「いつも、そればかり！ たまにはなんか、リクエストでもしてくれないとやる気がでない」

少年のように頬を膨らますエスラールの顔が、無性に可笑しくて私は笑った。

「じゃあ、卵焼きね。甘口で」

「おう！ 任せろ」

はりきって部屋を出て行く彼の背中を見送って、閉まるドアの音で私は現実に引き戻される。

ここは墓場なのだと。もっと苦しめと。一生、床を這いずっていると。

いらぬ言葉たちが私を襲ってくる。期待を裏切られた民衆の叫び声。罵る声。皆、私を恨んでいる、いやな言葉たち。

だから、私はそれを振り切るために、さっきの本を開いた。本は別世界の入り口だ。私はいつだって本の中では自由に手を動かせるから。

本からは古い香りがする。かび臭くて湿った臭いだけれど、どこか心地よい。柔らかな皮の表紙をめくってみれば、中はひどく汚れていて、書かれている文字がどうにか読めるくらいの状態だった。かなり注意して紙をめくらなければ、簡単に本自体がばらばらになってしまいそう

だ。

私はその本を注意深く膝の上ののせ、どうにか自由の利く右手を駆使して読み始めた。

私の名はスギスタ
私はゼーレより、情報を奪った
私は誰よりも世界を知っている

扉にはかすれた文字でそう書かれていた。

スギスタという名前には、どことなく聞き覚えがあったが、思い出すには至らなかった。

世界はアルテという全知全能の神が作成した、世界機構による半永久的な統制を受けて稼働している。

私を含め、世界上にある全てのものは世界機構の管理下であり、機構を作成したアルテそのものに自我はほとんど存在せず、世界機構がアルテの代行として、事実上世界の統制を行っている。

世界機構は世界にある全ての情報と、アルテによる極めて初期の多くの設定で構成されて、非常に複雑であり、我々がその設定を変更することは大変難しいことである。

と、このようなことが延々続いている。訳のわからないままに、それでも私は読み続けた。「世界を知っている」というスギスタの言葉にいたく惹かれたのだ。

「お待たせ」

三十ページほど読んだところで、あつあつの卵焼きをトレーにのせてエスラールが入ってきた。

「ありがとう」

続きが気になったが、私はそっと本を閉じて枕元に置いた。

「パンも食べよ」

「食べれたら、食べるよ」

卵焼きの隣にのっけてきたパンを彼は押し付けてきたが、苦笑いをしてトレーに戻した。食欲が全くわからないのだ。

「卵焼きは残したら怒るぞ」

「わかった。ちゃんと食べるから」

「食わせてやるよ。ほら、あーん」

エスラールは自分の口を大きく開けながら、私の口元に山盛りの卵焼きを近づけてくる。一瞬、いい大人が二人で何をやってるんだろう、とは思ったが、素直に口を開けてみた。

「ヴィゼルが明日うちに来るってさ」

「ヴィゼルが？ 懐かしいね。いつも本当にお世話になっているから、盛大にもてなさなきゃ。なんてお礼を言えばいいだろう」

「あんまりお礼を言い過ぎると、ヴィゼルが困るよ。そういうの苦手なんだ。あいつ」

そういえば、昔から褒めたりお礼を言ったりすると怒る癖がある。早い話が照れ屋なのだ。昔と変わっていないヴィゼルが少し羨ましかった。

「あ、ねえその本、一体なんの本なんだ？ それを買ったとき、古本屋のばばあが変なこと言ってたぞ」

「変なこと？」

「なんでも、世界を知りすぎると大変なことになるとか、なんとか。シクアス語の事典だと思って買って来たんだが、違うのか？」

エスラールは枕元にあったその本に手を伸ばした。

「あ」

彼が勢いよく本を開けると、そのついでにどこかから、取れてしまった四、五枚のページがはらはらと床に落ちた。

「うわ、すまん」

「いいよ。それ相当古いみたいだし。事典といえば事典のようだけど。何なんだがよくわからない」

エスラールは落ちたページを拾うと、本と一緒に私の膝の上に置いた。

「ま、飯食えよ。ほれ、あーん」

「待って、このページ、面白いことが書いてある」

それは、先ほどエスラールが落としたページ一枚だった。

「なんて書いてあるんだ？」

「新造生物ゴルトバについて―――体を修復する方法

新造生物には、変則能力を持ち、個人世界を所有できる変則系新造生物と、身体的に秀でた能力を持ち、個人世界を所有できない戦闘系新造生物があると説明したが、このゴルトバという新造生物は特殊である。

もともとは、エルド派のアンヴァルク＝イースと同じ能力を欲したレスト派のアンヴァルク＝ゼバスが作成した、復活と修復を得意とする新造生物だったが、ゼバスの消滅で、独立し自らの意思で復活と修復を行っている。

ただし、現世界では、世界機構により死者の復活は禁止されているため、修復だけの能力のようだ。

裂傷や骨折だけではなく、腕や足を失っていても、遺伝子の一部を初期化することで、身体の修復は可能である。

それ以外では、不変遺伝子の配布も特筆すべきだろう。身体の修復後、その身体の形状は死後も永遠に維持される。

ゴルトバは完全の母である。契約者は死後、母の元へと帰り、永遠に母へ我が身を尽くさなくてはならない。また、契約者にはゴルトバの分子が配布される。分子は人生の戒めと反省を教えてくれる、未来への導き手である。

ゴルトバの公式個人世界へは誰でも入ることができる。

入界の言葉は、次のページの一番下の段に直訳付で書いておく。

だって。次のページはその本のどこかにあるみたいだ」

「わけが、わからんな。新造生物に変則能力、アンヴァルクに不変遺伝子って何のことだろうな」

エスラールは苦い顔をした。彼は本を読んだり、難しいことを考えたりするのが、なによりも苦手なのだ。

「私もよくわからない。おかしい本だよな」

そう言いつつも、私は密やかな希望を抱いた。もし、この体が治ったなら、また人生をやり直すことができないと。もしかしたら、昔に戻れるかもしれないと。

「ヴィゼルが来たぞ」

ドア越しにエスラールが言った。

静かにドアが開いて、懐かしいヴィゼルの顔が入ってきた。

「久しいな。エメザレ」

久しぶりに会ったヴィゼルはだいぶ、男らしくなっていた。背は高くないが、それでも威厳の漂う顔立ちだ。落ち着いた雰囲気は、エスラールよりだいぶ年上を感じられる。

上等なコートに身を包んだヴィゼルは、まるでどこかの貴族のようだ。

「ええ。本当にお久しぶり」

「思ったより、君が変わってなくてよかったよ」

ヴィゼルは穏やかな顔つきで笑ってみせた。

「その辺にある椅子に勝手に座ってくれ。お茶でも入れてくるから、適当にくつろいでな」

「ああ、ありがとう」

エスラールがそう言うと、ヴィゼルは上品に会釈をした。

「もっと、近くにおいでよ。そこじゃ遠くて私の声がよく聞こえないでしょう。この頃はあまり大きな声が出せないから」

彼はベッドから少し離れた位置にある、テーブルの椅子を持ち上げると、私のすぐそばに置いて座ってくれた。

「だいぶ調子はいいみたいだな。顔色もいいし、元気そうだ」

「ヴィゼルのお陰だよ。ありがとう」

「いいんだよ。お礼なんて。照れるからやめてくれ」

ほんの少し頬を赤く染めて、気恥ずかしそうに笑った。

「ヴィゼル、戦争はいつ起きる？」

その質問をした途端、彼の瞳はにわかに濁った。

「それは……、なんていうか、エスラール次第なんだ」

「なるほど。なら、エスラール次第というより私次第、といった方が正しいのかな」

ヴィゼルが言いにくそうな顔をしていたので、私が代弁した。

「そいういことになるな」

「私をどうしたい」

きっと、彼にはこの言葉だけで私の言いたいことが伝わっただろう。その証拠に彼は黙ってうつむいた。

「構わないよ」

私は優しく言った。ヴィゼルはとても優しいから、心を痛めているのだろう。でも、何かを変えるためには、必ず犠牲が付きものなのだ。私は小さい存在だ。小さい犠牲のために、何も悩む必要などない。

「ねえ、ヴィゼル。この頃、よく昔のことを思い出すよ。おかしいね。大半は戦争と殺人の記憶なのに、何故か思い出すのは楽しいことだけなんだ」

ヴィゼルはうつむいたままで、何も言わない。

「何がそんなに楽しかったんだろうね。ただひとを殺していただけなのに。でも、今に比べたら、それですら楽しく感じられる」

「……エメザレ」

小さな声で、彼は苦しそうに呟いた。両手で頭を抱え込んで、しばらく彼は動かなかった。

「エスラールと話をしてくる」

立ち上がったヴィゼルの顔には、静かな覚悟があった。

「行ってらっしゃい」

私は彼の背中を見送った。閉まるドアの音。一人になった部屋の中は一瞬にして闇の世界になった。

私は体ごとを壁に耳を押し付けた。壁の薄いこの家は、少しでも大きな声をたてれば、壁に耳を当てなくても隣の部屋に丸聞こえだ。

隣の部屋のドアを開ける音がした。

「なんだ、来たのかヴィゼル。エメザレとなんかしゃべってればいいのに」

明るいエスラールの声がある。

「エスラール、例の話は考えてくれたか？」

深刻そうな低い声でヴィゼルが言った。

「...ああ、それは、その話はまだ.....」

「エスラール。お願いだ。俺と一緒に来てくれ。お前の力が必要なんだ。お前の強さと統率力があれば民衆の士気はあがる。俺たちの夢まであともう少しなんだ。

おそらく白い髪は、北の国スミジリアンから応援を呼ぶだろう。人数では負けないだろうが、装備は黒い髪が圧倒的に不利だ。士気が頼りなんだ。民衆は君を英雄と呼んでいる」

「エメザレは？ あいつも英雄だ。英雄だった。今じゃどうだ」

かなり強い口調でエスラールが返した。

「気まぐれな民衆をうまく、操るのも英雄の仕事だ」

「エメザレを置いていけない！」

「エメザレは連れていけない。目立ちすぎるし、足手まといだ。あんな体で連れていったら、ザカントで捕まってしまう。そんなことになったら、俺もお前たちも革命も全ておしまいになるんだぞ。言わなくてもわかるだろう。

だが、心配しなくていい。エメザレの面倒は俺の召使がみる」

「駄目だ。また、死のうとしたらどうする！ 俺のいない間になにかあったら.....。俺は一生自分を許せない。エメザレが死ぬのが一番つらい。

頼む。わがままは承知してる。こんなに世話になって、なにも返せるものがないなんて、馬鹿にしてると言われても仕方ない。でも、どうしてもエメザレが大切なんだ。本当に済まない」

悲痛なエスラールの声の後しばらくの沈黙があった。

「わかった。今のことは忘れてくれ。無理を言って悪かったな」

「ヴィゼル」

「エメザレとおしゃべりでもしてくるよ」

そして、隣の部屋のドアが閉まる音がした。

ゆっくりと、私の部屋のドアが開く。貴族のように優雅なヴィゼルが入ってくる。絶望の空気をまとわせながら。

「死んで、くれるのか」

私の顔を見るなり、ヴィゼルはそう言い放った。普通ならば怒るべき言葉だ。しかし、私にはその言葉が天からの救いのように聞こえた。もう、苦しまなくていい、俺が助けてあげるから。彼はそう言っているのだ。

「いいよ」

激しい感情はなかった。拷問以来、常に離れない嫌な言葉たちも、息をする苦しみも、悪いものは全て消え去って、懐かしい穏やかな気持ちが帰ってくる。かつての私。 晴れやかな心。静かで真っ直ぐな、私の瞳。

「本当にいいのか」

「いいよ。私を殺しに来たんでしょう？」

「.....エメザレ」

ヴィゼルは立ち上がり、ゆっくり近づいてくると、やわらかく私を抱きしめた。最後の抱擁。友人としての最後の別れ。

「俺は.....君に憧れてた。いつも、羨ましかった。今でも君が好きだ。尊敬してるよ。嘘じゃない。こんなことになるなんて.....こんな...残酷な.....こんなに頑張ったのに...」

彼の胸からは懐かしい、ガルデンの臭いがした。

生れた時から知っている香り。私を育て、ひとを殺すことを教え、種族の劣等を教えた。でも、エスラールやヴィゼル、たくさんの仲間たちと出会えた。あそこは楽しかった。こことは別世界だ。

急に楽しかったことを思い出して、それがなんだか悲しくて、目の前がぼやけてくる。

「ヴィゼル……いいよ。もう、いいよ。そんなことより、エスラールを頼むよ。誰か素敵なひとが見つかるといいね。清楚で優しく健康的で……きっと彼に似合うと思うんだ。もういい年だから、本当は早く結婚してほしかったんだけどね」

「わかった。わかったよ」

「ヴィゼル、この国を任せよう」

黙って頷く、ヴィゼルの右腕にはしっかりと短剣が握られていた。

光る刃は天からの導きのようで、神々しい。何故だろう、たくさんの思い出が、次から次へと頭に浮かんでくる。すごい速さだ。笑い声がする。無邪気だった。

いつも、私たちはこの刃のように光っていた。細く不安定で、そして無邪気さゆえに刃物のように残酷だった。憎しみは、いつも振り返らず、背中で受け取っていた。

たくさんのひとを殺した。なんの疑問も抱かないで、なんの罪も感じないでそれが当然だと思っていた。

それが私たちの軍人としての務めだったから。

やっと思い知った。こんな英雄なんていないのだと。

それでも私は愛されたかったのかもしれない。

そして終焉が来る。輝きの終焉が。

その時、私の死の幻想が途切れた。

「ヴィゼル！！ 貴様！！」

見たこともない恐ろしげな表情をして、今にもヴィゼルに飛びかからんばかりの勢いで、エスラールが叫び吐いた。

「エスラール……これは…」

ヴィゼルの表情が強張った。ヴィゼルが何か言い終わる前に、エスラールはヴィゼルに飛び掛った。

「やめてくれ！ エスラール！ エスラール！！」

しかし、二人の争う音で私の虫のような声は全く届かない。

体格でも腕力でも勝るエスラールは、ヴィゼルの手から簡単に短剣を奪い取った。

「やめろ！ ヴィゼルは悪くない！ やめてくれ！」

裏返った私の声は、もはや音すら発していない。無音の叫びをあげながら、右手を必死に伸ばすが、無論二人に届きはしない。こん身の力で、重い体を引きずって、私はやっとベッドから床へと落ちた。

「冗談はよせ！ エスラール」

切羽詰ったヴィゼルの声がした。

「邪魔するなよ！」

だが、怒りという感情に体を任せたエスラールは、なんの迷いもなくヴィゼルの胸に短剣を突き刺した。何度も。

私は床の上で無音の絶叫をあげた。

勢いよく噴き出した血が、辺りを汚していく。これでもかというくらいに、肉の破片が飛び散って、部屋の中を血の海にした。

「どうして皆で、俺を否定するんだ！ 俺は命を懸けて、これから先の人生全てを懸けて、エメザレと共にいることを選んだんだ！ 邪魔しないでくれよ。男同士で悪いかよ。よってたかって俺たちを馬鹿にしやがって。俺たちはただ生きいてるだけじゃないか！ 生きて何が悪いんだよ！」

泣いて叫びながら。何度も。原形がなくなるまで、刺し続けた。

「やめて！ それはヴィゼルだ。私たちの友達だよ！」

エスラールはヴィゼルの何がそんなにも憎かったのだろうか。

いや、憎かったのは多分この国だ。庇いたかったのは自身の人生だ。私を否定するということは、すなわちエスラールの人生を賭けた選択が間違っていたことになる。エスラールはこの選択が最も正しかったと信じたいだけなのだろう。

やがて、血だらけの顔で、私の方に振り向いた。

「エメザレ、俺はお前を置いてどこへも行かないよ」

臓物のついた血まみれの両手を差し出して、私のほうへ向かってくる。優しいいつもの顔をしながら。

「う……あ…」

生臭い両手が私の頬に触れる。温かな血が顔を伝う。逃げ出したくても、逃げられない。恐怖に震える私の顔を見て、彼は悲しそうな顔をした。

「なんで、そんな顔するんだよ。そんな顔するなよ」

「だって……だって…ヴィゼルが、何で殺したんだ……あんなにして……」

「いいじゃないか、俺がいるんだから。どこかへ行こう。どこか遠いところだ。こんな国、捨てよう。こんな国、いらぬ。もう、疲れたんだ。いつも心配ばかりで。お前が死ぬのが恐ろしくて。お前を置き去りにするなんて無理だ」

もう、エスラールは無理なんだ。もう、どうやっても私じゃどうにもできないんだ。

ごめん。気付かなかった。生きていても、死んでいても、「私」という存在がこの世界からなくなれない限り、君は安息を手に入れられないんだね。

私が死ねば変わってくれると思っていたけど、無理なんだね。私は君と生き続けるしかないんだ。

大丈夫。いつまでも君を愛しているから。

「明日は早いから、もう寝よう」

そう言って、彼は私をベッドの上に寝かせた。その私を腕で包み込んで、エスラールも同じベッドで横になる。かつて当たり前だった、二人で一緒に寝るということ。それが、今では懐かしい。

「どこに行きたい？」

「太陽の近くに」

血だらけの胸の中で、呟いた。

「わかった」

静かな心臓の音が聞こえる。私は目を閉じた。

誰かが、私の顔を嘲りの含んだ表情で覗き込んでいる。

「ジヴェーダ」

ジヴェーダは意地悪く微笑むだけで何も言わない。

「醜い私を嗤っているんですか。あなたがこうしたんじゃないですか。ジヴェーダ様」

「殺してやればよかったかな」

投げやりな感じで彼はそう言った。

「そうですよ」

「でも賭けられるものは、残してやっただろう」

「そうですね」

目を開けると、隣ではエスラールが寝息を立てて眠っている。

もう一度、私は賭けてみよう。これが私の最後の賭けになるだろう。彼のために。彼に安息を与えるために。彼の愛している私に戻るために。

エスラールは私に全てを賭けてくれた。私も全てを賭ける。私という存在。そんな小さな犠牲で、世界の何かが変わるなら、嘆くことなんてない。

そっと枕元にある、本を取った。その本は不思議と私を、必要とする言葉のページに引き寄せた。

導かれるまま無心に開けたページには、あの切れたページの次が書かれていた。辺りは暖かい光に包まれ、その時が来ることを知っていたかのように、本にはこうかかっている。

選ばれし黒い英雄よ、今こそ、異世界への扉を開け。

己の悲しき愛のために。永遠の時を駆けよ。

「さあ完全の母よ

母体に宿し愛しき子のための

汝の子宮に

真正なる新しき子を贈ろう」

心地よい、とても綺麗な風だ。金色の草原がゆったりと風に揺られている。

私は寝ているのだろうか。

日の光を浴びて温くなった土の上で、私は寝転がりながら、高い空を優雅に流れる雲を、ただ見ていた。

ここはどこだろう。

体を起こしてみたが、見えるものは金色の草原だけだった。

その時、一瞬だけ赤子の泣くような声がした。誰かを呼んでいるような泣き声だ。

そっと後ろを振り返ると、さっきまで寝転がっていたところに、大木が聳え立っていた。

泣き声は、その裏から聞こえてくる。私は、木の裏側を覗き込んだ。

おいで。

はっきりと声がした。妙に懐かしく、温かい声だった。

「どこに」

もっと向こう。

その声に導かれるままに、私は金色の草原を歩いていった。やがて、規則的に揺れる何かが見えてきた。

白い揺りかごだ。

おいで。

揺りかごの中から、優しい声がした。

「うん。行くよ」

無邪気な子供の声で私は答えた。揺りかごに近づくに従って、だんだんと視界が低くなっていく。自分の腰ほどもなかった揺りかごの高さが、今は背伸びをして手を伸ばしても届かない。

「中が見えないよ」

「大丈夫。わたしからは見えてるから」

目の前にある揺りかごは、常に大きくゆっくりと規則的な動きをしている。しかし、どんなに傾いても、けして中は見えない。

「君はだれ？」

「わたしはゴルトバ。新造生物」

「しんぞうせいぶつ？」

「旧世界で生まれた生物兵器。創造主はアンヴァルク＝ゼバス。ゼバスの消滅により、わたしたちは独立に成功したの」

「わたしたち？ 君以外にも誰かいるの？」

辺りを見回したが、先ほどと同じ背丈がやたら高くなった金色の草が、風になびいているだけだった。

「わたしが、わたしたち。正しくは、わたしとわたしの子供たち」

「子供がいるの？」

「そう。たくさん、たくさんいるの」

「どこにもいないじゃない。」

「ねえ、エメザレ、わたしの子供になって」

その時、突然に揺りかごの動きが止まった。瞬間、世界の動きも止まった。雲も草原も空間に張り付いてしまったように静止している。風の音も止み、痛い静寂に世界が包まれる。

その静かな世界の中で、ゴルトバの優しい声だけが響いた。

「どこにも、居場所がないのでしょうか？」

「なにもうまくいかなかったのでしょうか？」

「エメザレはとっても頑張ったのに、誰も何も認めてくれなかったのでしょうか？」

「本当は英雄になりたいのでしょうか？」

「皆から愛されたいのでしょうか？」

「この国を救いたいのでしょうか？」

「もっと力が欲しいのでしょうか？」

「無力な自分が嫌いなのでしょうか？」

「だから、わたしの子供になって。そうすれば、全部うまくいく。わたしが力を貸してあげる」

優しい声だ。救いの声だ。ぼくを包み込む温かい声、いつも憧れていた、無償に愛されるべき存在として向けられる、その声。母親のようで、そしてぼくは無償に愛される子供だ。

「さあ、おいで。哀れな美しい子よ。わたしの愛しい子よ。君に輝かしい未来を、そして永遠の美しさを、君に捧げよう。そして、いつか生きることに疲れ果て、わたしを懐かしく思った時は、またこの世界に帰っておいで」

その時、光の雪が降ってきて、同時にぼくは天空へと舞い上がる。

青い空から落ちる一本の金色の光を伝い、ぼくの体は優しく世界を流れていく。

美しい光の中で、また動き出す揺りかごが、まるで子守唄のようにぼくを夢の世界へ誘っている。

「わかったよ。お母さん」

願い事のように呟いた言葉が、頭の中を駆け巡る。そして優しい何かが、ぼくに同調した。

「エスラール」

辺りに響いた私の声はとても静かだった。だから、彼はまだ瞼を閉じたままだ。安らかな寝息をたてる彼は何よりも愛おしい。

「エスラール」

今度は耳元で名を呼んだ。そして優しく顔に触れる。

「エメザレ……？」

彼はゆっくりと、夢の世界へ行くようにとてもゆっくりと瞼を開いた。

「エスラール、帰ってきたよ。君のために」

「エメザレ……？」

「そう、私はエメザレ」

私は微笑んだが、彼の顔からはだんだんと血の気が引いてゆく。まるで、醜くおぞましいものでも見るかのように。突然起き上がった彼は、私からじりじりと離れていった。

「ち、違う……、お前はエメザレじゃない。エメザレじゃない。これは夢か？」

「夢じゃない。私はエメザレだ。ほら、よく見て」

私は彼を部屋の隅に追い詰めると、顔を近づけた。月明かりを借りて彼の瞳に映る私は、かつての、あの輝かしい時を生きた、その時の顔だった。どこが違うというんだ。まるで違わないのに。

「俺に近づくな！ 触るな！」

そんな罵声と共に、思い切り突き飛ばされた。途中でテーブルにぶつかってバランスを崩し、床に倒れこんだ。そのまま、私は起き上がりたくなかった。

喜んでもらえると思ったのに。抱きしめてもらえるとってたのに。

昔に戻りたかった。また、この顔で笑いたかった。

それを望んでいるのだと思っていた。この顔とこの体があれば、なんでもできる気がしていた

。一生懸命頑張って、いろんなことを我慢して、汚いことして、たくさん殺して、ここまでやっと生きてきた。

その終焉がこうならば、何故今まで死ななかったのだろう。なんでくだらない賭けをしたんだろう。

死ねばよかったのに、死ななかった。こんな場所で、まだ、生ぬるい希望でも抱いていたのだろうか。

「エメザレ……」

エスラールは、私がなかなか起き上がらないことを心配してか、恐る恐る私に近づいてきた。私は、堪えつつも溢れ出る涙を見られまいと、体を丸めた。

「もういいよ」

「泣いてるのか？」

その声は優しくかった。あまりにも優しくすぎて、余計に涙が噴き出してくる。

「……ごめん」

彼は低くそう言うと、私の頭を撫でた。それから私を体ごと引き寄せて、せいいっぱい抱きしめた。

「変なこと言ってごめん。せっかく帰ってきてくれたのに。どうかしてたよ」

「そうだよ。君はどうかしてた」

その瞬間だった。悲しみが唐突に消えた。心がきれいに整理され尽くして、感情がまるで静かになった。

どうして、あんなことで私は傷ついたのでだろう。死のうとか、生きたいとか、そんなくだらないことで、悲しくなったりしたんだらう。

何はともあれ、引っ付いているエスラールを放すまいと、抱きしめ返してから、私は彼の耳元で囁いた。

「私と一緒に来るだろう？ だって、私を愛しているんでしょう？ 私とこの国を変えよう。皆を救おう。私たちは英雄になるんだ」

「お前は、誰だ」

抱きつく私を引き離して、彼はしつこく同じ質問をした。

「何度、言わせるの。私はエメザレ」

彼は何か言いかけたが、結局何も言わなかった。

「さあ、ガルデンへ行こう。私たちの邪魔をするものは全て殺すんだ。君がヴィゼルにやったみたいに」 目に入ったヴィゼルの死体を見て、私は笑いながら言った。清々しい気持ち、冷たい小川のように、とても澄んだ気持ち。

「俺は愛してるよ。エメザレを」

「私も。愛してるよ。エスラールを」

くだらない戯言に縛られていては、幸福な人生を見出すことはできない。私はもっと冷静に生きるべきだったのだ。エスラールに対する愛はけして忘れないだらう。そして、くだらない戯言から開放された今、私たちの未来はかつてないほどに光り輝くものとなった。

そして安心した。

私はやっと存在として死ぬことができたのだ。

どこだ。ここは。

こんなに青い空を見たことがない。こんなに明るいのに太陽がない。こんなにも穏やかなのに息苦しい。辺り一面に色とりどりの花が咲き、たくさんの蝶が飛び、鳥の美しい鳴き声が耳に響いてくる。それなのに、肌は死んだように何も感じない。時は緩やかに進んでいるようでも、猛烈な早さで自分に向かってくるのがわかる。

この世界は自分を排除したがつているようだった。体が重く、立っているのがやっとだ。さっきから止まらない耳鳴りのような高い音が、頭に響いて吐き気を催している。ふと、そこに誰かがいるような気配がした。

「誰？」

重い頭を上げたが、そこには何も見えなかった。

「私はある意識の遺産。そして、この世界の保護者にして監視者、または象徴であり同時に聖杯」

低音と高音を重ねたような不思議な声で、なぜか安らぎを感じさせる声でもあった。イウは息苦しさを一瞬忘れて声に聞き入った。

そして、それはあきらかにそこにいるのだが、やはり姿は見えない。だが、イウはそれが特に気にならなかった。それがさも当然のような感覚だったからだ。

「ここはどこ？ これはぼくの見ている夢なの？」

「夢ではないが、限りなく夢に近い世界だ。ここは杯に付属されている個人世界。君達の理想郷として作成された世界だ。創造主はアンヴァルク＝イース」

「アンヴァルク？」

声の言っていることは全く意味がわからなかったが、アンヴァルクは知っていた。

「アンヴァルクとは神の使者、もしくは世界機構の一部。半永久的に存在する機能。しかし、一万年以上前にイースは消滅した。それにより、この空間は杯ごとイースから独立したのだ」

「どうしてぼくはここに来たの？ エメザレは？ ここに来ていないの？」

自分でも思考がどこかずれていることがわかる。だが、この変な空気の世界ではそれを直す術

がない。少しでも気を抜こうものなら、意識は世界に包み込まれて、永久に目覚めることはないだろう。余計なことを考える余裕はない。

もはや、美しい鳥のさえずりは、頭に突き刺さる雑音にしか聞こえない。温かそうな光は瞬きすぎて、視界を奪う邪魔な存在だ。

「通常、君達は第一世界に置かれる住基盤から世界機構を通して、基本世界に存在している。しかし、君は遺伝子の上書きの最中に機構へのアクセスが切断されたため、住基盤に重大なエラーが発生した。

この空間はエラーの発生した住基盤を、積極的に保護するよう設定されている。

今現在この世界に、君以外の生命体は存在していない」

「もう少しわかりやすく説明してくれない？ 全くわけがわからないよ。つまりぼくは死んだの？」

苛立って、強い口調でイウはきいた。

息苦しさは徐々に増してゆき、心臓の鼓動はうるさいほどに高鳴っている。

「君達の感覚でいうとそういうことだ。

第一世界から機構への接続が切断されたと同時に、基本世界では「死ぬ」ということになる。そして住基盤とは、つまり君達の遺伝子や、記憶、人格の情報を入れておく器のことで、君達がいるところの魂とほとんど同じ概念だ。ただ、住基盤は君達の住む基本世界ではなく、第一世界というところに置かれている。

私は君の死んだ時の状況を完全に把握していないから、言い切ることはできないが、おそらく新造生物との契約で、遺伝子の書き換えをしている最中に君が死んでしまったことで、書き換えが中断され、非常に不安定な状態で存在したためエラーが発生したと思われる」

「遺伝子？ エラー？ 何言ってるの？ それに、ぼく新造生物と契約なんかしてないよ。ぼくはエメザレに殺されたんだよ！」

どうもこの世界はいらいらする。声の言うことはどれも意味不明なあげく、この息苦しさと救いようのない不快感。そしてなぜか鮮明に覚えているエメザレに殺されたという事実。

どこが理想郷なんだ！

イウは胸の中で文句を言った。

「すまないが、私の情報は長い間更新されていない。基本世界での情報は一切ここに入ってこないのだ。よって私には推測することしかできないため、正確な答えは出せない。

世界機構について簡単に理解できることではないのはわかっている。君の現在の状況を平たく言ってしまえば、生と死の狭間にいるというわけだ」

「じゃあ、みんな死ぬとここに来んじゃないか」

息を切らせながらイウは言った。もはや呼吸をすることすら辛く、声を出すのが難しくなってきた。

「いや、来ない。公式ではないとはいえ、世界再構築後にこの空間を開いたのは君が初めてだ。つまり、一万年以上、誰も来なかった」

「なんで、来ないんだよ！」

特に意味はないが、怒鳴った。そんな理由などどうでもよかったのだが、なにかに当たらないと気がすまなかった。

「それは、基本世界にはもう、この空間を公式に開けることのできる遺伝子が存在しないからだ。
。一万年以上前に起こった「世界再構築」でその有効な遺伝子の全てが書き換えられてしまったことが原因だ」

「そうなの！ それで、ぼくはどうすればいいの？ ここにずっといるのは嫌だよ。息苦しくてたまらないもの。早くここから出してくれ。ぼくは元の世界に帰れるよね？」

心臓がおそらく限界まで鼓動している。息絶え絶えに力を振り絞って彼は叫んだ。世界の意思なのかわからないが、とにかくこの世界はイウを追いやろうと、なにかに恐ろしい力で攻撃をしている。

「君には三つ選択肢がある。このまま第一世界に行くか——つまり、死ぬか、それともここでエラーを修復し基本世界に帰り、また生きるか。または、ここで永久に存在することも可能だ」

「帰るよ。帰るって言ってるじゃないか！ 早くしてくれ！ 気持ちが悪いんだ。これ以上ここにいると頭がおかしくなりそうだ！ ぼくは基本世界に帰るよ！」

ついに世界は収縮し始めていた。彼を押し潰そうと、天空が迫ってきたのだ。世界が潰れていく低い音が腹に響く。

彼は目を見開いた。

呼吸は全くできなくなり、心臓は静かになった。そして目に痛い青い空がイウを飲み込もうとしていた。

「いいだろう。お前の遺伝子を修復する」

声がそう言ったとたん、急に意識がはっきりとしてきた。心臓はまた脈を打ち始め、澄んだ空気をしっかりと吸うことができた。

重かった空気は瞬時に軽くなり、空は限りなく高い位置にあった。

雑音のように聞こえた鳥の鳴き声も、今は信じられないくらいに美しく耳に届く。日の光は温かく、風は優しく顔をなで、花の甘い香りが鼻孔に届いた。

そして目の前に現れた空中に浮かぶ顔のようなもの。その画像は不安定で、顔を形成したかと思うとすぐに、砂のように崩れて消え去り、また現れては形を作る。出現する顔はどれも鮮麗で優美なものだったが、表情は全く動かない。

「声？」

「そうだ」

口だけが動いて答えた。

「これを飲め」

画像は変形しはじめ、やがて豪華に装飾を施された杯の形となった。

イウは恐る恐る宙に浮かぶその杯に手を伸ばした。それは半透明で、一見すると触れられないようだったが、以外にも硬く重かった。なかを覗き込むと、なにか液体が入っていた。

「これは何？」

「液体としては水だが、遺伝子を修復する機能が付いている。
遺伝子が修復されれば、世界機構への再接続が許可されるだろう」

杯自体から声がした。微妙に杯の映像が乱れた。

「変なの。儀式みたいだ」

「君達はこういう演出が好きなのだろうか？」

声は変な確信を持っているようで、自慢げにそう言った。

「まあ、それっぽいけどね」

なんとなしに嗤笑を浮かべてから、水を一気に飲み干した。

だが、変化はない。自分の身体をあちこち見まわしたが、やはり変わっていきそうなところはどこにもなかった。

「これ効果あったの？」

少々不安になって杯にきいた。

「修復は成功した。現在世界機構との再接続を申請している。回答はすぐに帰ってくるだろう」
「すぐっていつ？」

この世界のすぐがイウの感覚のすぐと同じとは限らない。

「たった今、申請が許可された。転送作業に移る。

基本的に、基本世界と公式個人世界の時間の移行は平行なはずだが、世界再構築時に若干それがずれたようだ。しかし、支障のない程度だろう。これより、君を基本世界へ転送する」

「いきなり？ 本当に大丈夫なのか？」

しかし、それを言い終わる前に世界の映像が突然に切れた。

気付くと、辺りは真っ暗だった。何も見えない。何の音も聞こえない。だが、感覚はある。どうやら自分は仰向けに寝ているようだ。とても心地いいものの上に寝ている。ここはベッドだろうか。

イウは起き上がったが、暗闇の世界は何も変わらなかった。

「誰かいないの」

声は明らかに響いた。しかしそれに反応するものはない。世界に静寂が戻り、虚無のような無限の闇が広がっている。

ここはどこなんだ。

彼は怖くなった。イースの世界ではないだろう。だがここはクウェージアなのだろうか。また別の知らない世界なのではないか。その心細さは尋常でない。

ここから出なくては。

見えない世界を這いつくばるようにしてイウはうごめいた。

「あ！」

心地のいい手触りが唐突になくなったかと思うと、下に落ちた。あまり痛くはない。段差はそこまで高くなかったようだ。しかし今度は硬く冷たい質感だ。石の床だろうか。ということは先ほどいたところはベッドで間違いないだろう。

廟葬。

という言葉がある。エクアフ種族の文化の一つで、伝統的な埋葬方法だ。火葬も土葬もせず、特殊な防腐処理を施して一つの部屋の中に埋葬する。その部屋は「死者の部屋」と呼ばれていて、大抵の場合生前に作られる。貴族や王族であれば廟葬が一般的であり、王族は「王家の墓」と言われる地下の巨大な廟に埋葬されるのだ。

確信はないが、おそらくそうだ。ならば出口があるはず。

イウは冷たい床の上を這いながら手探りでゆっくりと進んだ。

しばらくして手に何か触った。棒のようなものがある。手を添えつつ上に腕をのばしていくと直角に曲がった先に広い空間があった。

これはテーブル。

これはペン。紙。本。

そして手探りでローソクらしきものを発見した。

しかしここには火がない。もし視界さえ開ければ、なにかいい手段が思い浮かぶかもしれない。

もうすでにイウは泣き出しそうだったが、必死に涙を押し込めて考えた。

ここが廟であるなら、部屋のどこかに暖炉がある。無論、その暖炉に煙突はついておらず使えないのだが、火を起こすためのフリントが横に付いているはずだ。

エクアフ種族の信仰するエルド教では、エルドの復活と同時に建設される超高次元世界の出現を待望しており、死後は高次元世界出現の時まで「死者の部屋」で過ごすという考え方があった。

そのようなわけで、「死者の部屋」は部屋というよりも家の仕様に近く、ベッドや暖炉は当然のこと水場も付いており食料なども保管されている。

イウは暖炉を探して這い回った。何度も何かにぶつかり、同じ場所らしきところを彷徨いながらも、やっとおそらく暖炉と思われるものを発見した。

側面を手で探ると、手のひらに収まる大きさの石片と、取っ手の付いた火打金が立掛けて置いてあった。

イウは暖炉にワラが敷いてあるのを確認すると、フリントと火打金を打ちつけた。

一瞬にして照らされる世界。

そこはやはり「死者の部屋」であった。

自室に似せられて作られた部屋。いや、家具は自室から運んだのだろう。ぼんやり照らされたテーブルに、かつて嘆きのあまりに自分で殴り書いた「どうか平和を」の文字が浮かび上がっていた。

「ぼくは生き返った……？」

彼は呟いて不安になった。こうして生きているようだが、本当に生きているのだろうか。上記で述べたとおり、エルド教には死後、超高次元世界の出現まで「死者の部屋」で待たなければならないという考えがある。もしそれが本当であるならば、いつ復活するかもわからないエルドとやらの再臨を、この部屋で待たなくてはならないのだ。

「そんなわけがない！」

恐ろしい考えを一掃しようというは大声を出した。

ここから出れば答えはわかる。

彼はローソクに火を灯すと、部屋の出口を探し始めた。

そう広くもない室内。ローソクで視界のきく状況で出口を見つけるのは容易く、すぐに見つかった。その扉は硬く閉ざされているようだったが、鍵がかかっているだけで中から開けるのは簡単のようだ。

イウは鍵を外すとその扉を開けた。

ローソクの火が照らせる範囲はごく狭く、それ以外は相変わらずの暗黒。どこまでも広がっているかのような闇。異世界に繋がっていきそうな廊下の一部を頼りない明るさで照らすローソクが今は何よりもありがたい。

一歩踏み出した足音が響き渡るが、その音からして相当広い空間であるようだった。

400年続いた王朝の墓だ。その数はいくつかわからない。それは本当に果てしない広さのように感じた。

ふと、イウは振り返った。部屋の扉には「クウェージア最後の王子ここに眠る 第6期1566年から1580年」と刻まれていた。

やはりぼくは生き返ったんだ。

信じられない気持ちで、しばらく呆然としていたが、やがて出口を探さなければいけないのだと思い出して、彼は歩き出した。

隣の部屋には「グセルガ」の文字があった。やはりグセルガも死んだのだ。その部屋を開ける気には少しもならなかった。立ち止まりもせずただ、その文字に対して侮蔑に似た眼差しを向けて通り過ぎた。

その廊下はおかしいくらいに真っ直ぐだった。曲がり角もなく道がわかれているということもなく、ひたすらに真っ直ぐで、しかも果てが見えない。

そんなはずはない。

いつだったか、幼い日にイウは一度この廟を訪れたことがあった。確かに広かったが、入り組んでいてまるで迷路のようだったと記憶している。

物珍しさと夢中になって歩いていたら、グセルガとはぐれて大泣きしたのだ。こんな一本道で

はなかった。

ここはどこなんだ。

どれだけ歩いたらろうか。その果てしなさに負けて彼はついに歩くのをやめた。

ローソクは溶けてあとほんの少しの寿命しかない。

死という絶望がイウを襲い来る。

こんなところでぼくは死ぬのか。

一人で。こんなに冷たい暗闇の中で。

力なく地面に座り込むと、大声で泣き出した。

死にたくない。死にたくない。

イースの世界から帰ってきたのに。

エメザレに会いたい。

こんな時でも頭に浮かぶのはエメザレの優しい顔だった。

エメザレはどうして。どうしてぼくを殺したんだろう。

泣きながら思った。どうか死ぬ前に理由だけでも聞かせて欲しい。

「エメザレ」

眩きは響き渡った。何度も何度も繰り返されてから残響は消え、やがてローソクの火も尽きた

。

全くの静寂と暗闇の中で死の存在だけが鮮明だった。

彼は死を覚悟するが如くに身体を横たえた。石の冷たさが全身に凍みるようだ。

だが、目の前に光る糸のようなものがあることに気付いた。いや、糸ではない。これは光だ。ローソクの火が消えなければ、このわずかな光を発見することはできなかつたらう。

彼は勢いよく身体を起こすと、その光の方へと走っていった。

やはりそれは外へと続く扉のようだ。下のほんのわずかな隙間から細い光が湧き出ている。

取っ手を掴み、開けようとするが扉は動かない。鍵はかかっていないようだが。

「くそ！」

イウは渾身の力を込めて体当たりをした。呆気ないほど簡単に扉は開き、勢い余って床に転んだ。が、転んだ先にはやわらかいクッションのようなものがあった。

ずっと暗いところに居たせいだろう。周りが明るすぎて霞んで見える。目を擦りながら彼は辺りを見渡した。そこには見覚えがあった。

宮廷の納屋だ。

使われなくなったソファやベッドやらが、ほこりを被って置かれている。

なぜこんなところに扉が。

出てきた場所を覗き込むと、そこには今も恐ろしい闇が広がっている。

「あ」

彼はまた遠い日の言葉を思い出した。

「今日行った場所は、王家の墓ではない。本当の王家の墓は違う所にある。その場所は――」

グセルガの言葉だ。思い出せるのはそこまでだが、その続きは「納屋」だったのかもしれない。確か、昔は使われていたが、黒い髪による盗掘がひどく、何十年か前にどこかに移したと。相当昔の話だが、そんなことを言われたような気がする。

しかし、まさか宮廷の中に廟への入口があったとは。

「誰か！」

そう驚きに浸っている暇もなく、彼は立ち上がって走り出した。

納屋を飛び出し本城へと向かったが、なぜか人气が全くない。宮廷に1000人はいるであろう召使の姿も、大臣の姿も。誰も居ない。

「誰か！誰か！誰か！」

叫んだが、白い宮廷に虚しく響くだけだった。城の部屋は荒らされた様子はなかったが、家具が一式なくなっていて、まるで全員どこかに引っ越してしまったかのようだ。

かつての輝かしい宮廷は廃墟のように静まり返っていた。息を切らして走り回るが、この状況を説明してくれそうなものはないもない。また恐怖がイウを包み込んだ。

ここはどこだ。違う世界なのか。

ぼくはこの世界で一人なのか。

「誰か！！いるなら答えてよ！」

皮肉にもそこは自分が刺された玉座の間だった。グセルガが座っていた玉座は持ち出されたのか既になく、玉座へ続いていた階段が、今は無意味にそこにある。床には血痕らしき茶色い染みが、掃除されることなく残っていた。

ぼくの血。

ぼくはなんなんだ。ぼくは……亡霊？

絶望しながら、玉座の間に連なる窓の一つに手を置いた。

外には長きにわたり黒い髪を拒絶し続けた、冷徹な巨大都市が広がっている。クウェージアにおいて最も先進した技術と莫大な費用をかけて建設され、白い髪の酷薄な支配を証明するには充分なこの都市は、本来ならば活気にあふれているはずだった。

だが誰もいない。なにも動いていない。唯一耳に届くものは、冷たく無慈悲な風の音のみ。

「誰かいないのか！！」

窓の外に向かって翻った声で叫んだ。

「誰だ」

その時、後ろから男の声がした。

驚いて振り向くと、そこには少しの距離を置いて黒い髪の男が剣を携え立っていた。

「誰だ」

十八くらいだろうか。男は背が高く荒々しい印象だ。

男はイウを睨み付けて言った。

イウは誰かが居たことに安堵したが、今度は殺気に固まった。

しかもこの場所は一度死んだであろう場所だ。嫌でもあの時の痛みや情景を思い出してしまう

。

「ぼくは、イウだ」

彼は震えながらもやっと言った。

「イウ？王子と同じ名前だな」

興味ゆえか敵意ゆえか知らないが、男は近づいてくる。逃げようにも背中には窓、扉は男の後ろ側にある。

「殺したりしない。親はどこにいる」

イウの怯えが伝わったらしい。男はいくぶん優しい声で言うと両手を挙げ、歩み寄る速度を落とした。

「いない。ぼく一人だ」

「俺はアスヴィットだ。臨時政府直属の整備部隊に所属している。剣は持っているが、つまるところ引越部隊さ。恐れなくていい」

アスヴィットはかがみ込んで視線をイウと同じ高さに合わせると歯を見せて笑った。

「臨時政府……？」

理解しがたい言葉にイウはアスヴィットをまじまじと見つめて呟いた。

「クウェージアは三十五日前に革命が起きて、エメザレ元帥の率いる臨時政府が発足されたんだ

。知ってるだろう？だから――」

「……革命？エメザレが元帥？何を言ってるんだ」

一瞬にして血の気が引いていく。指の先が冷たくなって鳥肌が立つのを感じた。

三十五日前？

革命？クウェーシアがなくなった？

エメザレが元帥？何をばかなことを。

ばかなことを。

エメザレはいつまでも自分と暮らすことを待ち望んでいるはずだと、ずっと信じていたのに。

「知らないのか？お前、今までどこにいたんだ？どこかに隠れていたのか？」

イウの動揺を心配してか、アスヴィットは優しく言った。

「白い髪はどこに……？殺されたの？」

彼は放心に近かったが、一種の願いのようなものを乗せてそう聞いた。

「スミジリアンに追放されたのさ。白い髪は王と王子以外は誰も殺されなかったし、黒い髪は誰も死ななかった。全て元帥様のお陰だよ」

アスヴィットはまた歯を見せて明るく笑った。そこにはエメザレに対しての感謝や尊敬の気持ちが大きく込められているのが見て取れる。

「そうか」

よかった。

エメザレは全ての白い髪を憎んでいるわけではないのだ。エメザレはこの国を変えたかっただけなのだ。そのためにグセルガを殺さなくてはならなかった。

ぼくを殺す予定などなかった。きっとエメザレは誤解しているのだ。

あの時グセルガに言った、約束など忘れたという言葉に、裏切りを感じて傷ついた。だからエメザレは泣いたんだ。ぼくにそんなことを言われて悲しかったんだ。

ぼくが殺されたのはぼくのせいだ。エメザレは少しも悪くない。だからぼくはエメザレに謝らなければ。

「エメザレは？エメザレはどこ？どこにいるの？」

にわかにアスヴィットに詰め寄るとイウは聞いた。

「知らないよ。本部じゃないのか？」

「本部ってどこ？ぼくはエメザレに会いに行く」

「ちょっと待て。お前、置かれている立場をわかってるのか？」

アスヴィットは、今にも走り出さんばかりのイウの腕を強めに掴むとあきれた声で言った。

「白い髪はスミジリアンに追放されたんだ。ここはもう黒い髪の国なんだ。俺たちは白い髪の残党は発見次第殲滅させよと命じられている」

イウが少し驚いた顔をしたので、アスヴィットは腕を掴む力を緩め、イウの目を見つめてなだめるように微笑んだ。

「慌てるな。元帥様は殲滅なんてしない。ましてお前みたいな子供を殺すわけがない。だからと言ってこの国に住んでいいわけじゃない。それに俺の立場上お前を逃がすわけにはいかないんだ」

「でもぼくはエメザレに会いたいんだ！」

それでもイウが譲らず叫ぶと、アスヴィットはあからさまに困った顔をした。

「とりあえず、整備部隊の駐屯地に来てもらう。そこでゆっくり話をきくよ」

殺す気はなさそうだが、逃がすつもりもなさそうだ。この人のよさそうなアスヴィットに、今のところは大人しく付いていくしかないらしい。イウは仕方なくうなずいた。

駐屯地というのは、革命前は大貴族の屋敷であったようだ。

アスヴィットが言うには、首都は遷都せずにおきたいというエメザレの意向で、白い髪の巨大都市は特に壊されることもなくそのまま使われるのだそう。首都は都市ごと黒い髪に明け渡され、アスヴィットの所属している整備部隊は首都の早期復興を目指している。

その屋敷の一角だけ、アスヴィットと同じくらいの年若い男たちで賑わっていた。しかし白い髪のイウを見ると途端に静まり返り、好奇や嫌悪の眼差しを向けた。

「大丈夫だから、行こう」

アスヴィットは笑うとイウの手を引っ張った。

「飯でも食って元気出せよ」

アスヴィットはパンをたくさん詰めた大きな籠をイウの前に置いた。しかしそのパンはお世辞にも美味しそうには見えない。

「いらない」

それに何かを食べたい気分じゃない。アスヴィットの部屋は広く、豪華な内装だったが部屋の中にはテーブルと三脚の椅子、それとベッド代わりらしい綿の飛び出たソファしかない。

椅子も座っているだけで不安になるような音を出して鳴いている。

「アスヴィットはエメザレと会った事があるの？」

それでも無理に勧めてくるパンを仕方なしに受け取りながらイウは聞いた。

「遠巻きで見たことがあるだけだよ。結構細い感じのひとだったな」

アスヴィットはいかにも硬そうなパンにかじりついた。

「四年間で何があったの？」

「元帥様の話か？それは俺もわからない。でも四年前、元帥様が宮廷に勤めることが決まった時、黒い髪はみんな過剰なほど彼に期待した。

しかし、散々持ち上げておいて、解雇されると手のひらを返したように冷たくあしらった。

確か、軍事教育所からも不名誉除隊させられたとか。それで彼の存在は忘れられてしまったんだ。一説ではひどい拷問を受けたとか、それが原因で死んだとか、色々噂はあったが半年前に突然にまた表舞台に現れた。

俺が知っているのはそのくらいだ。なにせ革命が起きる前までは、俺はただの農民だったんだから」

解雇されてからの、エメザレの消息などは一切、イウの耳に入ってこなかった。グセルガはエメザレを警戒していたから、おそらく彼の行動を見張っていただろうが、当然のことながら、イウにその情報を与えたりはしなかった。

イウの知らない空白の四年という時間は、あまりにも長い気がした。不名誉除隊。あの身体では仕方なかっただろう。どう考えても、もう軍人としての勤めは果たせなかった。再び歩くことすら無理であったように思う。

確かに右目は潰れていた。顔も身体も傷だらけだった。それはとても鮮明な記憶だ。四年の月日が流れたとしても、その傷跡は残るはずなのだ。

しかし、三十五日前に現れたエメザレにその傷跡はどこにもなかった。常識で言うならば、それは不可思議で有り得ない話だ。

もしイウが先ほどの奇跡の世界を体験していなかったならば、この話を信じたりはしなかっただろう。

半年前、エメザレに何がおこったのか。

奇跡。その言葉しか見当たらない。

その時、突然にドアが開いた。

そこにはアスヴィットと同じ歳くらいの男が立っている。

「おい、なんだそいつ。なぜ白い髪がここにいる」

安らぎを知らないかのようにいらついた表情と、どこかグセルガを思い出させる厳しい雰囲気は、とても好感の持てるものではなかった。

鋭い目の男は、イウに強い憎悪の眼差しを向けた。

「城にいたんで連れてきた。まだ子供だし、放っておくわけにいかないだろう」

イウをかばうようにしてアスヴィットは立ち上がった。

「どうする気だよ。規則だと立ち退かない白い髪は死刑だぞ」

「いや、そんなことにはならない」

男にではなく、イウの方を見てアスヴィットは優しく言った。

「俺がスミジリアンまで連れて行く。それで問題ないだろう。元帥様のことだ、例え知らせても子供の命は取らないだろうし、この忙しい時にこんなことで手間を取らせたくない」

「だが一応規則だ。知らせておいたほうがいい。黙って白い髪を逃がすのはいくらなんでも不味いだろう」

男はアスヴィットのことが気に食わないのか、声の感じは限りなく冷たい。とても淡々としているのだが責めているような印象だ。

「オーウェ。お前はいちいちうるさい奴だな。確かに臨時の法には死刑だの処刑だの殲滅だの物騒なことが書かれているが、一度だって元帥様がそんなことしたか？」

「そうだ。全くしなかった。そう定めたのになぜ元帥はそれを守らないんだ。今まで散々俺たちを虐げてきた白い髪に、そんな慈悲はいらないのに！元帥は臆病者だ！」

オーウェはなぜかイウに向かって叫んだ。気に食わなかったのは、アスヴィットではなく、白い髪とその白い髪に甘い制裁を下したエメザレのこのことのようなのだ。

「エメザレの悪口を言うな！」

ついくせで、イウはエメザレをかばった。

「黙れ、白い髪！俺はお前たちを許さない！」

オーウェは腰の剣に手をかけた。

「わかったから。落ち着けよ、オーウェ。本部に行って知らせてくる。それでいいだろう。だからもう出て行け」

アスヴィットがオーウェの手を押さえつけると、オーウェはもの凄い形相でイウを睨みつけ、次にアスヴィットを思い切り突き飛ばして部屋を出て行った。

「気にするな。もうこないよ」

オーウェが出て行ったのを確認してからアスヴィットは座った。

「どうしてあんなこと言うんだろう？」

「ああ……、白い髪に家族を殺されたのさ。気にすることない。別にお前のせいじゃないんだ

から」

アスヴィットは複雑な表情をしてパンをまたかじった。

確かにイウのせいではないと思っている。ただアスヴィットにも少なからず白い髪への恨みはあるんだろう。イウはアスヴィットのそんは表情を悲しく思った。

「エメザレのところへ行くなら、ぼくも連れて行ってよ」

「ばか言うなよ。無理に決まってるだろう」

アスヴィットはパンを噛みつつ、ため息をついた。

「じゃあ、ぼくが会いたいって言っていることを伝えてよ」

「元帥様はお忙しいんだ。お前なんかには会いに来るわけないだろう」

「それなら手紙を書かせて。それを届けてくれるだけでいいから。お願いだ！」

イウが椅子から立ち上がって懇願すると、アスヴィットはパンの最後の一欠けらを口に放り込んだ。

「わかったよ。仕方ねえな」

渋々にアスヴィットは腰を上げると紙とペンを持ってきてくれた。

そして手紙にこう書いた。

ゴルトバの血を持つエメザレへ

この手紙を見て、たちの悪い冗談か、あるいは何かの脅しだと思うかもしれないが、その意図はなく、これは真実であることをここに誓う。

ぼくの名はイウだ。知っての通りお前が殺したはずのクウェージアの王子だ。なぜ生きているのか、いまだにぼくにもよくわからない。

ただ、ぼくは世界の踏み入れてはならない領域に入ってしまったようなのだ。

それをいうならば、きっとお前にもぼくと近い何かが起こったはずだ。だから、ぼくがこうして生き返ったことを、お前はそれほど抵抗なく受け入れてくれると信じている。

だが、この現象についてはこれ以上、どちらの件も検索する気はない。
検索したとて、ぼくたちが納得する回答は得られないだろうからだ。

それよりも伝えたいことは、ぼくが最後に父上に言った言葉のことだ。

もし、お前がその言動に裏切りを感じてぼくを殺したのなら、それは仕方のないことだ。ぼくは、そのことに関して、なんら怒りの類のものは感じていない。

しかし、あの言葉はぼくの意中を正しく表したものではない。

あの言葉はまったくの偽りなのだ。嘘や弁解にきこえたとしても、それだけは信じてほしい。

そして、お前に心から謝罪したい。ぼくはお前をこの世の誰よりも尊敬し私淑してきた。お前を裏切るようなことはしたくなかった。

しかし、ぼくの愚かさゆえに結果として、ひどくお前を裏切ることになってしまった。こんなことになってしまったのも、全てぼくの責任だ。

こんなぼくに、何かを言う資格はないのかもしれないが、ひとつだけ希望を言わせてほしい。どうか、ぼくに会いに来てくれ。どうしてもお前に言いたいことがある。手紙にはとても書ききれない。

お前を信じて待っている。いつまでもお前を信じ、思っていることを忘れないでほしい。

追伸

アスヴィットはいい奴だ。よければ、もっと上のほうで働かせてやってくれ。

没落した王族の生き残りイウより

「悪いな。規則なんだ。こうしないとオーウェうるさくて。すぐ帰ってくるから」

イウは牢屋の中に入れられた。大貴族の家にはさずが、地下牢が付いている。

アスヴィットは申し訳なさそうに謝りながら、また不味そうなたくさんのパンをイウに差し入れた。

「手紙を受け取ってくれなさそうだったら、「ゴルトバ」と叫んでくれ。お願いだ」

「ゴルトバ？」

「いいから！頼んだよ」

鉄格子にしがみついてイウは叫んだ。

「わかったよ。じゃ行ってくる」

アスヴィットは少し頭を傾げながら出て行った。

何の因縁か、牢に入れられたイウの面倒はオーウェが見ることになった。

どんな仕打ちをされるのかと始めこそ恐れていたが、彼は最初の印象ほどに粗暴ではなかった。確かに温顔ではないが、それでも人並みの気づかいくらいはしてくれた。

だが、その多少雑な優しさに触れても、イウはいたたまれない気持ちになるだけだった。仕事とはいえ、白い髪をこうして扱うのはオーウェにとって苦悩でしかないだろう。もし許されるならば、家族の敵を討ちたいと思っているかもしれない。

穏やかとはいえない、冷厳と遺恨を押し込めた顔の下には、どれほど激烈な殺意がうごめいていることだろう。

それを押し殺して、オーウェはイウに理性的に接するのだから、その努力は人並みはずれているとあっていい。

かつて彼は“良いひと”であったのかもしれない。そんな彼から安らぎを奪って、こうさせてしまったのは、まぎれもなく自分たちである。

そしてそれを横暴と呼んで嘲笑した白い髪を恥ずかしく思った。

オーウェがイウを憎むのは当たり前のことなのだ。それを逆恨みするのはばかばかしい。

「ごめんなさい」

朝食を届けに来たオーウェにイウは言った。

「なにが」

オーウェはいつもの、少し乱暴な声できいた。

「ぼくたちが、あなたにしたことだ」

「もういい。時代は変わったんだ」

そして、初めて彼は笑った。どこか遠い目をしてオーウェは優しい顔をした。白い髪を許したわけではないだろう。それでも、イウの言葉でほんの少しだけ彼は救われたように思う。そうとだけ言うと、オーウェは去っていった。

そしてわかった。黒い髪の人に白い髪は必要ないということ。

それを思い知った。

それはアスヴィットが発ってから四日過ぎた早朝のことだった。

外がにわか騒がしくなり、イウは物々しいざわめきで起こされた。

地下牢に窓はないが、この冷え具合からして日はまだ昇っていないだろう。

「おい、起きろ」

血相をかかえたアスヴィットが入ってきた。

「お前、何者なんだ。元帥様がほんとに来て下さったぞ」

「本当に！」

イウは飛び起きると鉄格子を握り締めた。

「お前のおかげで元帥様と話すことができた。なんだかよくわからないが礼を言うよ」

興奮した様子でアスヴィットも鉄格子を握り締めて言った。

「ところでゴルトバってなんだ？」

アスヴィットは本部へと赴いたが、少年をスミジリアンの国境で解放せよ、とだけ末端兵に言われ手紙の受け取りも拒否されたらしい。

そこでアスヴィットはエメザレの部屋と思われる扉に向かって、イウに言われたとおり「ゴルトバ」と叫んだ。途端、慌てたように部屋からエメザレが出てきて、アスヴィットはすんなりと部屋に通されたのだそう。

「ゴルトバってなんなんだろう。ぼくも知らない」

「それは新造生物の名前です」

その時だった。よく通る美しい声がした。

その声の先には、あのエメザレの姿があった。

呆然と立ちすくんでいるエメザレ。

それでも彼の瞳は真っ直ぐで、迷いがなく清らかだ。これこそが全ての者から賞賛され崇拝されるべき英雄の姿。イウがいつまでも信じ続けたエメザレの姿だ。

昔よりも更に崇高に洗練され、元帥たる威厳を携え、恐れのない姿勢を持ってエメザレはイウ

のすぐ傍にいる。

「エメザレ」

イウの声は感動に震えていた。

「アスヴィット。すみませんが、二人にしてください。あと牢屋の鍵を。それから馬の支度をお願いします」

「わかりました」

アスヴィットは慣れない動作でうやうやしくお辞儀をすると、牢屋の鍵をエメザレに渡して出て行った。

「王子……」

エメザレは呟いた。信じられないといった様子で、しばらくその場所に立ち尽くして動かなかった。

「そうだ、ぼくだよ」

「生きていた……いえ、あなたは生き返ったのですか？」

やがて正気に戻ったのか、エメザレは牢屋の鍵を開けた。

「そうだよ！」

牢屋から解放されるなり、イウはエメザレに抱きついた。

どれだけこの瞬間を待ちわびたことか。何度夢見たことか。このどうしようもない気持ちを。何度。何度。

けれどもそんなイウを抱きしめも引き離しもせずに、エメザレはその恐ろしいほどに真っ直ぐな瞳でイウを見つめているだけだった。

「エメザレ。ぼくを許してくれ。エメザレ。ぼくはお前が好きだった。憧れていたんだ、この世界の何よりも。

だから、ぼくが約束を破るはずがないんだ。あの言葉は嘘だったんだよ。ぼくは少しも黒い髪が劣っているなんて思っていないよ。

でも、ぼくはもう少しで父上に殺されてしまうところだったんだ。だから、お前との約束を果たすためには、嘘をつくしかなかったんだよ。信じて！」

荒ぶる気持ちは抑えきれずに、たくさんの言葉がとめどなく口からあふれ出す。

「わかっていました」

エメザレはイウの瞳を見つめてしっかりと言った。

「じゃあ、どうして殺したの？ ぼくの嘘に怒って殺したのではないなら、なぜぼくを殺す必要があるんだ？」

だんだんと黄金の夢の世界は傾いていく。その答えは実に簡単なことだった。

「それは――単に私があなたを裏切ったからですよ」

エメザレは目を背けたりしなかった。あまりにも自分を真っ直ぐに見つめ続けるエメザレが怖くなってイウはその視線から逃げた。

「……そんな。嘘だよな？ 嘘にきまってる！ ぼくが嘘を言ったから怒ってるんだよね？ どうして皆ぼくに嘘ばかりつくの？ ジヴェーダも嘘を言った」

「ジヴェーダが……」

エメザレは、ジヴェーダがイウに何と言ったのか理解したようで、諦めの表情を浮かべた。

「それは嘘ではない」

にわかに瞳を曇らせて、辛そうに言った。

「嘘だ。全部、全部嘘だ」

無意識に涙が溢れた。激情はあまりにも巨大すぎてもはや静かな祈りでしかない。

「私はあなたを裏切った。それだけのことです」

「どうして？ どうして？ もう少しで、ぼくは王になれたのに。そうしたら、誰も死ななかった。そうしたら、お前の力になろうと思って……ずっと約束を覚えてた」

嘘だと言ってほしくて、希望を消したくなくて、必死にエメザレにしがみついた。

けれどもエメザレはそんなイウを抱きしめてはくれない。絶望的な答えはすぐそこまでやって

きている。けれども諦めたくない。エメザレを放したくない。

「私もですよ。王子」

エメザレの声は優しくかった。

「なら、なぜ...？」

「待つてほしいと頼みました。でも、誰も私の言うことなんかに耳を貸さなかった。戦争が起こりかけていた。私は世界を知らなかった。あそこを出て、初めてこの国が置かれている状況に気付いたのです。でも気付いたときにはもう、私の力ではどうにもならなかった。多くの血が流れる、たくさんの者が傷付き、悲しみ、絶望する。どうしても、とめたかった。私は自分にできる全てのことを考えました。でも、どんなに考えても私にできる最良の手段は、王の血筋を断つことだったのです」

エメザレは言った。悲しそうに。苦ししそうに。申し訳なさそうに。

でも、だからなんだというんだ。

「でもぼくは四年間も.....四年も我慢したのに。全てを敵にまわしても、お前を選んだのに！ずっと独りで.....それでもお前と暮らせる日を夢見てた。そのぼくに、お前がくれたのは裏切り？」

巨大な激情は今、心の中でおぞましく低い音を立て、深い底の方からイウの全てを飲み込むようにして湧き上がってくる。

四年間。それはとても長い孤独との戦いだった。その中でどれだけの想いが積もっていったことだろう。計り知れない。

とめどなく溢れ出る涙を拭うことすらできなかった。

「どうか許してください。私は無力で愚かなのです」

エメザレは嘆いた。自分を呪うようにして。

「許す？どうやって？ぼくの全てを返してくれ」

国も城も財産もなくなってしまった。

でも王子になって生まれてきたくなかった。あんな城で暮らしたくなかった。財産などあったところで幸せでもなんでもなかった。

エメザレと二人で国を統治するという夢だけが、その夢を見ることだけが幸せだった。それだ

けでどんな苦痛にも耐えられた。

四年前、弱く臆病であった少年を変え、それこそ人生を、全ての価値観を変えてしまったのは、この世界で唯一無二のもしくはただの一つのエメザレという存在であり、それこそが絶対でそれだけが光で、全ての希望で、願いで、祈りで、救いだっただ。

孤独にも無関心にも耐えられたのは、自分に価値を見出し使命を持って勇気を出せたのは、エメザレという神がイウの傍で常に瞬いていたからだ。

エメザレという神が居ない世界では、イウは四年前と同じ無力で脆弱なただの少年でしかない。

「スミジリアンへ行くんです。あそこなら、必ずあなたを受け入れてくれます。スミジリアンの王にあなたを優遇するようにとの手紙を書いてきました。それを渡せば住居と最低限の生活は保障して下さるはずですよ。

多くの白い髪がスミジリアンに向かっています。きっと、あなたが知っている顔もいるでしょう。

何年かは不自由しないだけのお金もこちらで用意します」

「いやだ！ ぼくはスミジリアンなんかに行かない。白い髪の中に友人も理解者もない。ぼくは四年間、常に孤独だったんだから。いまさら、どの面を下げてスミジリアンに行けと言うんだ。なにをより所にして生きていけと？」

住居もお金もいらない。ぼくがほしいのはそんなもんじゃない。

ばかにするな。そんなくだらないもので。

「お願いします。あなたが拒否するならば私はあなたを殺さねばなりません。私は覚えています。あなたが「黒い髪は劣っていない」と言ってくださった時の喜びを。今でも感謝しています。だから、もう殺したくない」

しがみついていたイウを引き離して、エメザレはそっとイウの肩を掴んだ。

「いやだ」

エメザレから離れたくない。今離れたら、きっとエメザレは手に届かない遠くに行ってしまうって、二度と会うことはできないだろう。

エメザレのためだけに生きてきた。ひたすら信じて。ばかみたいに。

だけど、どうしても好きなんだ。だからいやだ。

いやだいやだいやだいやだ。

「お願いですから……お願いします」

彼は最後の願いを口にした。涙を一杯瞳にためて、唇をかみ締めて、そしてイウを見つめ続けて。

「いやだ」

その言葉を口にした瞬間、イウの腹にエメザレのこぶしが突き刺ささっていた。

「どうか、黒い髪を救ってください。どうか、戦争が起こらぬように。誰も苦しめないように。あなたが王になった時は、必ず良い国にすると、私と約束してください」

そう約束した。

ぼくはたった一日だって忘れたことはなかった。

いつかエメザレが全ての苦しみから救ってくれる日が来ると信じていた。

そしてエメザレは微笑んでいる。

イウの頭の中にだけ存在する、完璧なエメザレが。

恐れのない真っ直ぐな姿勢で。

穢れのない空気で。

勇気に満ち溢れた黒い瞳で前を見据えて。

いつまでも光り輝いて。夢みたいに。

儚い夢から目覚めると、そこはエメザレの腕の中だった。

マントを被せられているらしく視界は狭いが、エメザレの手綱を引く腕と鼻息荒く森を疾走している馬が見えた。

日は既に西へだいぶ傾いている。

「エメザレ、馬をとめろ！」

しかしエメザレはそれに従う気配はない。

「とめろと言ってるんだ！ ぼくをおろせ」

イウはエメザレから手綱を奪い、引くと馬はいなないて止まった。

辺りには木々しかない。ここが一度も来たことがない森の奥深くであることは明らかだ。

「ここは北の国境の近くです。馬で行けばスミジリアンにすぐに着きます。あなたにこの馬を差し上げますから。これは少ないですがお金です」

エメザレは馬から降りると、そう言って小さな袋を差し出した。

「ぼくは行かない！」

馬から飛び降り、憎しみを込めてその袋を思い切り払った。

詰め込まれた、たくさんの金貨は地面に散らばり夕日を反射して皮肉のように輝いている。

「きっと会いに行きます。約束しますから」

それでもエメザレは声を荒げたりしないで落ち着いていた。

「嘘だ」

会いになんてこない。もう二度と会えない。

なぜかそんな気がしてならない。それがとても恐ろしい。

「どうして、あなたはそんなに優しいのですか」

エメザレの声には静かな苦しみが混じっていた。

「なぜ、私をそこまで思ってくださいるのですか。

知っているのでしょうか。私の汚らわしい行いを。ジヴェーダとのことも。軽蔑されるべきなのに……。

あなたは私を、まるで穢れのない聖人のような目で見ると。

こうして生まれ変わったかのようにも、沁み付いた悪習は変えることができなかった。私はあなたが思っているような英雄ではないのに」

あの真っ直ぐな瞳がついに下を向いた。

「いいんだ。エメザレ。ぼくはお前が、どんなことをしていたって気にならない。何をしていたって、汚らわしいと思わない。同性愛者でも殺人鬼でも化け物でもなんでもいい。

お前はエメザレなんだろう？ ぼくを殺したことくらい、なんとも思っていないよ。そんなことくらい許すから！

だからぼくと一緒にいてくれ……どこにも行かないで、離れたりしないで！」

闇雲で盲目の思いは滑稽なほどに純粋にエメザレを愛しているらしい。

先ほどの巨大な感情のうねりはすっかり掻き消され、今はそれよりもこの目の前にいる偉大な

英雄に何としてもすがり付いて、わずかな愛のお零れを頂こうと必死に醜態を晒している。

それを恥じることも忘れて、イウはただ思いを叫び吐いた。

「本当です。新政府が確立し落ち着いたら必ず迎えに行きます」

エメザレの言葉を信じてこうなった。その言葉をもし信じることができたらどれほど嬉しいことだろう。

「いや...いやだ。ぼくを置いて行かないで！ もう独りは嫌だ！ 一緒にいて、一緒にいてよ！ お願いだからぼくを独りにしないでよ.....」

確かなのはこの思いが報われないということだけ。目の前が濡れて、何がしたいのか、どうすればいいのか、もう前がよく見えない。

無様にもエメザレの胸に擦付いて、よだれを垂らして泣いて、そしてエメザレの腰についていた短剣を引き抜いた。

「王子.....何をします！」

エメザレはそれに気づき身を引いた。エメザレが遠のいていくのが、とてつもなく気に食わなかった。

「もう王子じゃない！ ぼくの国はもうない！」

「剣をしまってください！」

エメザレは叫びに近い声を上げた。

「うるさい、黙れ！ 何も無いんだぼくには。何も無い。何も。どうしてぼくから遠ざかるんだ？ お前まで、ぼくを嫌がるのか？ お前のせいだ。お前がぼくを駄目にした！」

「私達の時代です。あなたはいらない」

一体お前は誰なんだ。

その瞳。虚無を携えた瞳は澄んでいない。ただ真っ黒な果てしない闇。

そしてあの日の鮮やかな映像が、イウの頭の中で何度も何度も繰り返して流れては、無慈悲にもその闇の中に次々と吸い込まれていく。

美しすぎたエメザレと、あまりにも光り輝きすぎた想いが、今まさに天地を反して暗澹の底へと落ちていく。

だから、絶望と憎しみのあまりに。

ただ――

大好きだったのに

お前のようになりたかったのに

ぼくは大きくなったのに

お前の力になれると思ったのに

エメザレ。ぼくは許さない。

叫び声と激しい憎しみが、すさまじい勢いで全ての思いを猛爆する。

イウはその絶望に任せてエメザレの胸に強く剣を突き刺した。

確かな手応え。刺したという感触。

しかし、彼は避けられたはずなのだ。ろくに剣も握ったことのない小さな少年の一突きなど。簡単にかわせたはずなのだ。

それなのに、エメザレは動かなかった。黙ってそれを受け入れた。それが義務であるかのよう。

恐れのない真っ直ぐな姿勢で。しっかりと。

血が流れ出るエメザレの胸の中で、はっとしてイウはエメザレの顔を見上げた。

その顔に憎しみや苦しみは浮かんでいなかった。

ただ、微笑んでいた。

そして胸の中でイウを優しく抱きしめた。それだけで、彼は何も言わなかった。それからだんだんと、エメザレの体から力が抜けていき、体が傾くと一瞬にして、エメザレは固い地面へと落ちていった。

「ああ」

どうして

どうして微笑んだんだ。エメザレ。

どうして憎しみのひとつも言わないでぼくを抱きしめたんだ。

罵りの言葉ひとつ浴びせてくれれば、ぼくはいくぶん楽だったろうに。

ごめんなさい。ごめんなさい。

ぼくは死を恐れないくらい全てを信じて大きな夢を見ていればよかった。
一瞬だって疑う必要はなかった。
それでも彼の正しさをずっと信じていればよかったんだ。
全部ぼくのせいだ。ごめんなさい。ごめんなさい。

「ごめん……ごめんなさい。ごめんなさい。ごめんなさい」

地に横たわるエメザレを抱きしめて、泣きながらも後悔の言葉をとめどなく繰り返したが、
彼が動くことはなかった。エメザレは微笑んだままに永遠の静寂に包まれたのだ。

何もなくなってしまった世界で、イウは独りきりになった。

希望を与え続けてくれた存在はもういない。だから悲しくて。悲しくて。世界が暗くなって。
何の救いもなかったから、エメザレを抱きしめてただ泣き喚いた。

昔のようにそれしかできなかった。彼は一人ではなにもできない、ただの弱い少年なのだから
。

「イース。どうか彼を助けて。ぼくを助けたのなら、お願いだからエメザレを助けて」

その時イウは半ば妄言のようにして願った。

イースだと。

それは声のようだった。大きな広がりやで頭に響いている。

「エメザレ？」

エメザレの声に似ていた。驚いて、エメザレの顔をのぞき込んだが、彼の口が動いたようには
見えない。

わたしは不完全な部分を補う不完全な存在。エメザレではない。

君はイースに会ったのか。

「エメザレはイースのところへ行ったの？生き返る？」

イウはエメザレを抱いたまま空中に聞いた。声のようなものは姿が見えない。

生き返る？不可能な話だ。

エメザレの住基盤は既に我々の手に渡った。

これは契約によるものだ。

声のようなものは聞き取りやすいように配慮したのか、広く鈍い音域から狭く絞った音に変わった。

「契約？エメザレに何が起こったの？」

彼が力を望んだから、母さんが力を貸したんだ。

「母さんってゴルトバのことか？ぼくに、エメザレに何をした！ぼくはゴルトバの血を浴びて生き返ったんだ！エメザレの身体を治したのもゴルトバなんだろう？」

イウは宙に向かって叫んだが、相変わらず声は姿を現さない。頭に、半強制のように音が送られてくるだけだ。

母さんはたくさんの遺伝子情報と住基盤を集めているんだ。

君は死にそうだったから、どうせ死ぬのなら住基盤を乗っ取って母さんにあげようと思ったんだ。

でも完全に乗っ取る前に君は死んでしまった。

「お願いだ教えてくれ！エメザレを生き返らせる方法を知っているんでしょう！だってぼくはイースの世界へ行って生き返ったんだから！イースの世界にはどうやって行くの？」

イースは旧世界で破壊された。

イースの世界はまだ存在しているのか？

だとすればその場所はとても危険だ。きっともう狂っている。
おそらく君も手遅れだ。

声は動揺したのか、にわかに音域が広がり音が乱れた。

「イースが狂ってる？どうやったらエメザレは生き返るの？方法を教えてよ！」

今現在、世界機構の法則の中に死者を蘇らせる方法はない。

又、機構は同じ人物を二度とデザインしない。

方法があるとすれば、新規の住基盤をなんらかの手段で作成し、その中に契約前の遺伝子情報と、

第二世界に無作為にばらまかれた3億6954万年分の記録源からエメザレの記憶だけを抽出して入れ、

なんらかの手段で第一世界に接続させるというくらいだ。

住基盤の生産ラインは凍結されているし、契約前の遺伝子情報を手に入れるのは難しい。

なにより3億6954万年分の記録源から、ランダムにちらばった27年のエメザレの記憶を抽出するのは不可能だ。

「それじゃ具体的なことがわからない！ぼくはなにをすればいいの？どこへ行ってどうすればいいの？世界機構はどこにあるの？」

小さな希望を放すまいとイウは必死に聞いた。

そうだ、わたしは母さんのところへ行かなくては。

母さんが、待っているんだ。

なんだか嬉しそうだった。音域はまた鈍くなり広がっていく。

「待って！聞きたいことがたくさんあるんだ！行かないで！行かないで！」

わたしは君にオルギアへ行くことを勧告する。

アシディアに会うことができれば、彼女は君に力になってくれるかもしれない。
今、君にはそれしかない。
しかし、気をつけろ。彼女はやがて世界を————

だんだんと遠のいてゆき、そしてそれきり声のようなものは聞こえなくなった。

「わかった。ぼくはオルギアに行く」

イウは眠りについたエメザレに優しく言った。

「絶対にお前を生き返らせてみせる。お前の作った国が見たい。その国に住めることをぼくはずっと待ち望んでいるよ」

その言葉にエメザレがうなずき微笑むことはなかったが、イウにはそれでも今度こそ約束が果たされるように思えた。

エメザレの夢を叶えることで、この罪を償えることを願った。

そしてエメザレを木の根元に座らせると、優しく黒い髪を撫でた。

まるで、眠っているかのように優しげな死に顔は、永遠に腐敗しないように見え、微笑んでいる口元には、エメザレ歩んだ人生からは全く連想されない、穏やかな安らぎがあった。

まだほのかに温かい、エメザレの体に身をよせて、二度と鼓動しないであろう心臓の上に顔を置いた。

「ぼくはとても疲れたよ。いろいろなことがあったから。今日は、今日だけはぼくと一緒にいてくれ。ぼくはお前のそばにいたいんだ。それだけで、それだけでぼくはこんなにも幸せなんだから……」

なんと満ち足りた気分だろうか。生きてきた時間の中でこんなにも幸せな気分を味わったことはあっただろうか。

もう誰にも支配されていない。なにもなくなった世界にまた美しい光が芽吹きつつある。その感覚のなんと素晴らしいことか。

けれども今日を終えてしまったら、この至福のときはしばらく訪れないだろう。そしてまた明

日から、孤独と絶望が長く彼を支配するのだろう。

それでもこの一瞬の幸せが、その長い時を打ち負かすようにと願って、イウは英雄の胸の中で静かにまぶたを閉じた。

彼のまぶたの中では、完全なる神と化して新たに爆誕したエメザレが絶対的に君臨していた。

彼は初めて世界が広いことを知った。

クウェージアで過ごした十四年、彼は常に白い色の世界に住み、それが「世界」だと信じてきた。無論、クウェージアの小ささもその外に国があることも知っていたが、別次元のように思えて実感などわかかなかった。

牢獄に似たクウェージアの生活は苦痛と狭さに満ちていたが、奇しくもついにそこから解き放たれた世間知らずの彼には外の世界はあまりに広すぎた。

それはまるで恐怖だった。ただ一人、知らない道を駆け抜けるというのは、彼にとって、いつ岸に辿り着くのか知れない大海をあてなく泳いでいるに等しく、途中で溺れないだけマシではあるが、もし町に辿り着けなければ野たれ死ぬ可能性もあるのだから、彼にしてみれば同じような試みであった。

幸い、彼はただ一人ではあったが独りではなかった。エメザレが乗り付けてきた馬がいた。もしこの馬がいなければ、彼はとっくに進むのを諦めてエメザレの横で死を待ったかもしれない。

しかし馬も長い旅に疲れ果て、馬とは思えぬ緩やかな速さで進みながら、苦しそうに息を荒げていた。水も餌も三日与えていない。いつ息絶えてもおかしくなかった。

そんな馬の背中の上で、馬の苦しさを察する余裕もなく彼はずっと泣いていた。

「オルギアってどこにあるの？」

もちろん馬は答えない。

弱々しい太陽の光は西へ傾き、静かな夜の気配が立ち込めてきている。

「ぼくたちは北に向かっているよね？ スミジリアンにちゃんと着くよね？」

馬は鼻息を荒く噴出すばかりだった。

北に進めばスミジリアンに着くというエメザレの言葉を信じ、三日、馬を走らせている。

彼のお粗末な計画では一日目の夕方頃にスミジリアンの領土に入り、末端の町か村かで宿泊しオルギアの情報を集めて三日目の――すなわち今日の朝にはオルギアに向けて発つ予定だった。しかしこの有様だ。

太陽を見る限りでは北に向かっているのはずなのだが、町らしきものは一向に見えない。

彼はとにかくクウェージアの外についてはほぼ無知であり、地図上の国々のなんとなくの位置

を知っているのみ。スミジリアンはクウェージアの隣国で国交も盛んなため、舗装された道が繋がっているのだが、その道がどこにあるのかわからない。

戦争で何度も国外に出て地理に詳しいエメザレはもっと近道を知っていて、そこからスミジリアンに行くつもりだったのかもしれないが、道を大きく外れた道なき道はただ広い草原で、目印になりそうなものはなにもない。まるで草原の海だった。

孤独に恐怖し罪を後悔し未来を恐れ、それら全てに涙して緑の海を進み続けた。なにせクウェージアに彼の居場所は残されていないのだし、第一戻る道がわからない。止まれば死が待っている。進む以外に希望に繋がりそうな道はなかった。

三度目の夜が訪れようという頃、ついに馬は力尽き地面に横たえて動かなくなった。かろうじて馬はまだ息をしていたが、死が迎えに来るまで、あといくばくもないだろう。

「死なないで……！」

横たわる馬を抱きしめるように覆いかぶさって彼は願った。それは快適な移動手段を失う悲しみ以上に、孤独を恐れて言った言葉だった。

彼は何度も願ったが、馬が立ち上がることはついにはいまま無情にも夜の闇が訪れ、そこで夜を明かす以外になくなった。火を起こす道具など持ち合わせていない彼は限らない闇に恐怖しながら、まだ暖かい馬の身体に身を寄せ縮こまり、わずかな温もりにすがって夜が明けるのを待った。

「おい！大丈夫か！」

という声と共に激しく揺さぶられて翌朝彼は目を覚ました。

夢にかすむ瞳の前に現れたのは白い髪の子だった。三十に届くか届かないかくらいの歳の頃で、そのくせなんとなく少年の無邪気さを捨て切れていないような顔立ちをしていた。

イウを覗き込む子の顔はひどく必死の形相であったので、イウは驚いて一瞬身を硬くした。

「ダルテスにやられたのか？」

イウの驚きに全く気付いていないらしく、子はさらに激しくイウを揺さぶった。

「ダルテス……？ いや、ぼくは……ぼくはクウェージアから来たんだ」

言いながらイウはさりげなく無骨な子の手を払った。子のすぐ後ろには、子が乗ってきたのだろう栗毛の馬の姿がある。

辺りはまだほの暗く、朝は明けきっていないようだ。寒さに子は小さく身震いした。

「クウェージア？ お前一人で？ クウェージア移民の受け入れ先はヴルドンって町でずっと東の方だぞ。ここはカルテニっていうド田舎の村の果てでお貴族さんが来るようなところじゃない」

クウェージアの名を出すと、半分冗談のようにも見えるが男は嫌そうな顔をした。イウの服を見て貴族だと思ったのだろう。白一色の服はクウェージアの宮廷でこそ映えるものの、外に出てしまえば一特に田舎などでは、舞台衣装のままで歩いている変人にしか見えない。

男はクウェージアの移民をこころよく思っていないのか、貴族の類が嫌いなのか。

そういえば男の着ている服は安っぽい布でできている。デザインもとりとめのない量産型であることからして、考えずとも男が農民であることはわかった。

「ぼくはヴルドンに用はないんだ。どこでもいいからスミジリアン内の町に行きたかったんだけど……道が…わからなくて……」

「ああ、つまり道に迷ったのね」

男は気の抜けた声をだした。

「そのカルテニって村まで連れてってくれない？」

「そりゃもちろん連れてくよ。野垂れ死にされたら夢見が悪いし」

男は悪意のなさそうな顔で言って笑い、それからイウの後ろに目をやった。あまり振り向きたくはなかったが、イウも後ろの存在に目を向けた。

案の定、夜までは暖かかったはずの馬は冷たくなり息絶えていた。幸い、馬に苦しんだ様子はなく眠るようにして召されたいらしい。少し不謹慎ではあるが数時間、馬の死体に寄り添って寝ていたのだと思うと小気味が悪くなった。

しかし、この馬がいなければ確実に彼はここまで来ることはできなかった。三度の夜は馬の温もりに助けられたし、孤独を紛らわせることもできたのだ。

「……馬、残念だったな」

「ごめんね」

すぐさま、小気味が悪いと思ったことを詫びるようにして、イウは冷たくなった馬を抱きしめ安らかな目元に口づけた。

それから男は立ち上がり首からさげていた笛を吹いた。高い音が響き渡ると、しばらくして馬

に乗った男が現れた。

「デミング！ こっちだ！」

男は遠くに見える馬に乗った男に向かって手を振って言った。

「ダルテスカ！」

やって来た、デミングと呼ばれた男は、辺りを見渡し警戒した様子で血相を抱えている。

「いや、標的にされそうなガキを拾ったんだ。危険だからカルテニまで届けてくる」

「拾った？」

デミングは馬に乗ったまま怪訝そうに聞き返し、イウをちらと見た。そしてイウの後ろに横たわる馬の死体を見つけ、ますます如何わしそうな表情をした。

二人のやり取りからして、男とデミングは同じ年くらいなのだろうが、若い印象のする男に比べてデミングはたいぶ老け込んで見えた。おそらく目の下に広がる濃いクマのせいだろう。

「そ、道に迷ったんだそうだ。そういうわけだから今日は俺、帰るわ」

「おい！ ただでさえ人手が足りないというのに！ そのうえまだ早朝だぞ。早引けにしても早すぎる！」

「こいつが一晩明かせたってことは、ここいらにダルテスはいないんじゃないのか？」

男が言うとデミングは押し黙った。その隙を見て男はイウに馬に乗るよう目で促すと、自分も馬にまたがった。

「そういうわけだから、な！」

言うが早いか男はイウを乗せ、馬の腹を蹴り上げて走り出させた。

「おい！ 待て！ セウ＝ハルフ！」

後ろでデミングが叫んだが、男は振り返らなかった。かわりにイウが振り向き、男の腕の隙間からデミングと横たわる死体の馬を見送った。だんだんと小さくなっていく馬の死体を見ながらイウはエメザレのことを思い出していた。

馬と同じく、エメザレの死体を埋葬できなかったことが悔やまれた。いや、できなかったというよりしなかった。土の中に埋葬しようと思えば、恐ろしく手間はかかったろうが、できただ

ろう。

ただ、死んだエメザレはあまりにも美しく不変であるように思えたので、白い肌を土で穢したくなかった。かわりに森に生えていた花で花束を作り死体に持たせ、エメザレの周りを花で敷き詰めた。

それはいつの日にか育った花がエメザレを包み込むという妄想めいた幻想を抱いてしたことであったが、実際、摘まれた花は根付くことなく死体と共に朽ちていくことだろう。

それでもイウには土に埋めるよりそちらの方がエメザレにはふさわしいように思えた。

しかし、本来ならばクウェージアの英雄として、国を挙げて盛大に弔われるべきである。寂しい森の中で朽ちゆき忘れ去られてしまうのは、あまりにも不憫だ。それがどうしても心残りだった。

そして、それがただ三日前の出来事であったことが未だに信じられない。自分がしたことも、置かれている状況も。全く信じられない。

「それにしてもよく無事だったな。ここ一ヶ月、ダルテスがこの辺りを一一と言ってもかなり広範囲だが、お前くらいの歳の少年を次々に襲撃してるんだ」

追憶を切り裂くように、馬を快適に走らせながらもセウ＝ハルフは言った。

ダルテス種族はクウェージアから遠く東の地域に住んでいるはずだ。父から教えられた限りでは、ダルテスは野蛮で殺人と戦争を好み、横暴で頭足らず。筋肉と体躯こそ秀でて素晴らしいもののそれ以外に取り柄らしきものはない、とある。

しかしそれはおそらく白い髪を選民思想と他種族蔑視による、偏った表現であるだろう。

彼はダルテスの体躯が素晴らしく背が高いらしいことは信じていたが、全てのダルテスが殺人と戦争を好んでいるとは思っていなかった。

わりと近くのラルグイムという国にもダルテスは少数住んでいるそうだが、クウェージアは他種族の立ち入りを拒絶していたので、実際見たことはなかった。

「こんなところにダルテスが？ なんのために？」

エクアフの国に無理してダルテスが来たところで楽しめそうな場所はない。スミジリアンも同じである。ましてこんな田舎に遥々やって来ても利益に適うものは得られないだろう。

「それが、なにが目的なのかわからんのよ。金銭目当てでもないし、というか金銭目当てなら中年か金持ちそうな年寄りを襲うだろうし、さらってどうにかしようというのでもなく、快樂殺人

にしても全て一撃で殺しているからこれも違うような気がするし、ただ白い髪で十四、五くらいの少年ばかりを片っ端から殺しまわってる」

「なぜダルテス種族だとわかるの？」

「一人だけ即死じゃなかった奴がいて、死ぬ前にダルテスにやられたと言っただけらしい。カルテニは絵に描いたように平和でのどかだったっていうのに、そいつのおかげで村全体が混乱状態だ。村の男衆は総出で見張りに駆り出され、こうして朝から晩までこの辺りを徘徊してるわけ。それがまた暇なんだ。なにせこの辺りは草しかないからな」

一度黙ってから、思い出したようにセウ＝ハルフはまた口を開いた。

「そういえば、スミジリアンの町ならどこでもいいとか言ってたが、目的地がないわけじゃないだろう。どこに行くつもりなんだ？ それに家族は？ というか名前は？ なぜあんなところで寝てた。単に国境を渡りたいなら八号線街道を通ればいいだろう。よりもよって原っぱを突っ切るのは無謀すぎないか」

セウ＝ハルフの質問は多かったが、ごもっともな質問ばかりだった。

「ぼくは……名前はイウだ……。貴族の生まれだが、小さい頃両親を亡くして家族はいない。ぼくはオルギアに行きたいんだ。案内を頼んだ人がいて、近道を知っているらしかったんだけど途中ではぐれて……」

どう答えればいいのかと考えながらイウゆっくりと言った。彼の身に起こったことは、おいそれと話せる内容ではなかったし、話したところで簡単に信じられるようなことでもない。

それにイウがエメザレを殺したと知れば、クウェージアでは間違いなく死刑。同盟を結んでいるスミジリアンでも極刑は免れないだろう。例え両国の王、または指導者から、どのように寛大な処遇が下されようとクウェージアの王族である以上、自由の身でいられないことだけは確かだ。

おそらくこれが一番無難な答えだった。

それにしてもクウェージアとスミジリアンを結ぶ街道を「八号線街道」と呼ぶことを彼は初めて知った。

「ふうん。オルギアねえ。あんな遺跡、命がけで見てどうすんの？ おたく考古学者でも目指してるの」

嫌味には聞こえないがセウ＝ハルフはふざけた調子だ。

「まあそんなとこだよ」

とりあえず、納得してくれたらしいセウ=ハルフに安堵して、イウは息を吐くように言った。

しばらく馬を走らせたところで、カルテニに着いた。そこは今日寝ていた場所から驚くほど近く、死ぬかもしれないと恐怖していた昨晚の自分が恥かしくなるくらいだった。

セウ=ハルフが言っていた通りカルテニは田舎の村であり、道も石で舗装されているところはほとんどない。広大な畑の中に一軒一軒小さな家が建っているだけの寂しい風景で、それでも何人かの村人が朝から畑を耕してはいたが、活気とは無縁の村に思えた。一帯が平原であるせいで景色は単調で絵にもならないような地味な印象だ。

「カルテニに着いたが、お前どうするよ？ 泊まるどこ探してんならうちに来るか？ こんな朝早くちゃ宿屋も開いてねえよ」

セウ=ハルフは馬を走らせたまま聞いてきた。

「いいの？」

漠然と宿屋に行くつもりだったが、言われてみればこんな早朝に開いているはずがない。

「構わんよ。どのみちお前の世話を焼くのは俺じゃないし」

と言ってセウ=ハルフは悪そうな顔をしてみせた。

さらに馬を走らせ村の中心らしき場所に辿り着いたが、中心といってもかろうじて道が石で舗装され、潰れかかった商店が何件が並んでいるだけの寂れようで、さらに人の少ない時間帯ゆえに少し間違えれば廃村だと思ってしまうくらいの静かさだ。

その中であって、古いがかなりの存在感と威厳の漂う屋敷の前でセウ=ハルフは止まった。

「ここがセウ=ハルフの家？ すごい屋敷だね」

セウ=ハルフの着ているものから、すっかり農民だと思い込んでいたのでイウは驚いて聞いた。

「ああ、ここは借りてるだけ。昔、ここの領主様が狩りをする時に使ってた別荘さ。今は世代が変わって全く使われなくなったんで俺たちが使ってるの」

「セウ=ハルフって何者なの？」

イウが真面目な顔をして聞くと、セウ=ハルフはそれが面白かったらしく声を上げて笑った。

「俺たちは……そうだな、まあ農民の親戚かな。よく農作業手伝うし」

答えを濁しながらも、彼は敷地の中に入っていった。

よく言えば、おもむきがあると言ったところだろうか。古めかしく痛んではいるが、元は貴族の屋敷だけに中はその当時の流行を取り入れた豪華な造りだった。クウェージアでは貴族は白い屋敷に住むのが定番だったが、このスミジリアンではそういう風習はないらしい。全体的に黒い色が使われ、壁紙にはエキゾチックな模様が描かれている。

「あら、セウ=ハルフさん。もうお帰りですか？ デミングさんは？」

出迎えたのは美人だが、そう特徴のない顔立ちの若い女性だった。メイドか、と思ったが、それにしては主従を感じさせないような親しみを持っている。

「この人は近所に住んでるマデルミートさん。農作業手伝う代わりに家の手伝いを頼んでるんだ」

とセウ=ハルフは言った。

「そちらのお坊ちゃんは？」

マデルミートは興味深げに彼の顔をまじまじと見つめてきた。この小さな村では外から来る者が珍しいのかもしれない。恥かしくなってセウ=ハルフの後ろになんとか逃げたが、マデルミートの眼差しはイウに釘付けだった。

「この子は原っぱで寝てたところを拾ってきたんですよ。クウェージアのお貴族さんらしいですけど、ちょっと面倒見てくれます？ デミングは、二人揃って巡回に穴を開けるわけにはいかないんで置いてきました。」

「あらま。置いてきたのですか」

そう言いつつも、いつものことなのかそこまで気にする風もなく、マデルミートはそれよりイウの事が気になるようで、セウ=ハルフの後ろに周り込むと彼の頭から足の先までゆっくり見回し急に笑顔になった。

「まあ、ずいぶん可愛らしい子ね。綺麗な洋服着て、さぞかし立派なお家で育ったんでしょうね。せっかくの服が泥だらけ。あたしが洗って差し上げますよ。早く中に入って、暖まって、

ご飯も食べてないんでしょう？」

「……ありがとう」

イウが小さく呟くとマデルミートは嬉しそうにイウの頭を優しく撫でた。十四にもなっておかしな話だが不思議と嫌な気はしなかった。むしろ心地よい気分だ。

それにしても疲れた。こんな過酷な旅は無論生まれて初めてである。

マデルミートに勧められるまま田舎臭い部屋着に着替えると、食事せずに彼はそのまま眠り込んでしまった。

目が覚めると外は夕暮れ時になっていた。いつの間にやら眠ってしまったはずだが、体には毛布がかけられていた。実はその毛布のかび臭さで起きたのだが好意には感謝したい。

屋敷の外は驚くほど静かだ。朝と変わらず人の姿はない。中ではデミングが帰ってきたらしく、セウ=ハルフとデミングの楽しそうな声がイウのところにまで洩れ聞こえていた。

声のする部屋を覗くとセウ=ハルフとデミングが夕食を食べているところだった。

「起きたのか！」

セウ=ハルフはすぐイウに気付き手招きをした。

テーブルにはマデルミートが作ったのであろう、美味しそうな料理がぎっしり並べられている。高級なものではなかったが、三日何も食べていないせいもあってか、宮廷で出されたどんな料理よりも美味しそうに見えた。

しっかり彼の席と料理も準備されていたので、彼は二人の間の席に座った。

「君、クウェージアから来たんだって！？」

座るなり、デミングが興奮した様子で聞いてきた。

傍でよく見るとデミングの肌は若く、目の下のクマさえなければ顔は整ってすら見える。しかし髪形が一昔前のワンリングスであるのも手伝って、残念ながら無風流な印象が強い。

「うん。そうだよ」

「あの噂は本当なのか？ エメザレは死んで蘇り空間移動して王を殺した、というのは」

誰が聞いているわけでもないのに、デミングは小声で――そのくせ鼻息はうるさいくらいに荒くして言った。

デミングは興味本意なのだろうが、彼には鋭い緊張が走った。

「……どこで聞いたの？」

知らない顔で平常心を装ったが、一気に食欲は失せていった。

「僕もクウェーシアの人間じゃないからよく知らないが、少なくともそう言って騒いでるのはクウェーシアの移民たちだ。なんでも『エメザレは四年前に死んだはずだ。あれは偽物だ』とか『蘇った魔物はクウェーシアを破滅に導こうとしている』とか『エメザレが王の首を持って王の間から消えるところを七人の側近が目撃した』だの数えればきりが無い。エメザレは魔法使いか何かなのか？」

デミングの目は真面目そのものだった。おそらくその強い知識欲がデミングのクマをひどくさせているのだろう。

なんと答えるべきか、とイウは考えた。しかし、そもそも自分自身も、なぜエメザレが突然玉座の間に現れたのか、新造生物ゴルトバとエメザレはどのようにして会い、どうやって身体を修復したのかを知らない。うまく説明もできないだろうし、なにより身を案じるならば、わからないという答えが最良だろうか。

「認めたくないだけさ」

しかし、デミングの問いに答える暇もなくセウ=ハルフが入り込んできた。

セウ=ハルフは何かを頬張っていたようで、しばらく口をもごもごと動かしてから一気に黒ワインを飲み干して続けた。

「死んだ奴が生き返るわけがない。空間移動だって側近の七人がでっち上げた嘘かもしれないだろう。エメザレとグルだったか、ありえない失態を認めたくないだけか。考えてもみろ、王と王子二人の犠牲だけで革命を成功させたんだ。この偉業は語り継がれるだろうが、クウェーシアの白い髪たちはそれが気に食わないのさ。

もしくはエメザレの計画のうちか。だとしたら大した話だね。特別な力を持った奴が新王になるのなら誰も文句は言わんだろうし。もし全てがエメザレのパフォーマンスだったとしたら、俺はマジ尊敬しちゃう」

「だがしかし！ セウ=ハルフ！ 世の中にはどのような理屈をこねても説明のつかない出来事がたくさんある。例えばオルギア遺跡とか……」

「あ、オルギア遺跡っていえば、こいつも行きたいらしい」

不服そうなデミングの話遮り、セウ=ハルフはイウを目で差した。

「なんと！」

途端に目を輝かせ、デミングはくたびれているような目を精一杯に見開いて、イウの右手を両手で握り締めてきた。

「そうなのか！ きみは学者を目指しているのか！ 素晴らしいね。若いうちから命も顧みず研究に励むというのは。きっと将来は大物になるよ！ 僕も考古学者なんだ。オルギアについて研究をしているんだよ」

「デミング」

静止するようにセウ=ハルフは言った。しかしデミングは二度軽く頷いただけで興奮は止まらなかった。

聞けばデミングは元々ドゥレゾンという大きな町に住んでいたのだが、昔から遺跡に興味があり、特にオルギア遺跡について強い興味を持っていたので、わざわざカルテニに越してきたらしい。

そこで知ったのだが、カルテニはスミジリアンの最西端にあり最もオルギアに近い地点だった。自身では真北に向かっているつもりでいて、実は大きく西に逸れていたのだ。

なるほど三日もかかるわけだ。と彼は一人納得した。

「ぼくは研究し始めたばかりで、詳しくない。だから教えてほしいんだけど……女王アシディアに関することを」

「目の付け所がいいね！ そう、女王アシディア。その存在こそオルギア最大の謎だ！」

そう言ってデミングはテーブルを勢いよく叩いた。ちらとセウ=ハルフを見るといかにも面倒くさそうな、嫌な顔をしながらつまみのパテをかじっている。

「オルギアの建国は第四期251年5月15日。今、第六期1580年だから……7329年前の出来事だ。そして滅亡したのは、というか突然消滅したのは第五期1982年8月3日。その間の約4700年、女王アシディアなる人物はオルギアを統治し続けてきたことになっている。つまり女王アシディアは不老不死だった」

「消滅？ 滅亡ではなく？」

世界史について詳しくはないが、オルギアの歴史はかなり不鮮明で教わった内容も不詳の項目が多かったうえ、ほとんどの場合頭に伝説上と前置きがある。なぜそんなに確信を帯びて日付まで言えるのだろうか。彼は不思議に思った。

「そう、オルギアは何者かに滅ぼされたのではなく、ある日突然、建物を残したまま全国民が跡

形もなく消えてなくなった」

「デミング」

セウ=ハルフが暇そうにしながら、半分なだめるように名を呼んだが、デミングには聞こえていないようだった。

「さらに我が種族エクアフの最盛期時代と揶揄される、デネレア大帝国時代の女王もアシディアという名でオルギアの女王と同一人物だ。デネレアは世界最初の日からあった国の一つだ。ゆえに彼女は世界の始まりから生きていたヴェーネン(人類)、すなわち伝説上不老不死といわれている旧ヴェーネン(旧人類)ということになる。旧ヴェーネンの存在は古代の歴史的文書にも多く記載されているんだ。第五期1982年にも十三人の旧ヴェーネンの存在が確認されていた。しかし旧ヴェーネンは第五期1982年の8月8日に全員死んだ。おそらくオルギアが消滅したことと関係がある、というのがモートの研究団がスミジリアンに報告してきた内容だ」

「モートだって？」

それはかなり意外な言葉だった。

モート種族は東端に住んでいる、足の長い漆黒の肌を持つ種族だが種族全体で三つの国しか持っておらず、その全ての国が他種族の国との国交を拒絶しているために、文化や思想はほとんど謎に包まれている。西の端に住むエクアフにとってモートはかなり縁遠い存在だった。

世界を征服できるだけの兵器を所持していると昔から言われているが、千年近く彼らが戦争を起こしたことはなかった。しかしごく稀に流出するモート製の武器や装飾品は、他種族が真似できない高度な技術が使われており、いかにモートが先進した文明を持っているかを如実に証明していた。

「そうだよ。彼らもオルギア遺跡に興味があるんだ。頻繁に訪れているよ。スミジリアンへの研究報告を条件に国内の通過を許可しているんだ。モートの見解によれば、オルギアは別次元に空間移動し、アシディアとオルギアの民はそこでまだ生きていると信じている。多分彼らは、エメザレの一件についても深く興味を持つだろうね」

別次元。

イースの世界があったことから推測するに――もしモートの見解が本当に正しいのなら、世界は複数存在することになる。イースの世界に行ったときのように、何か特定の条件を満たせばアシディアのいる世界に行けるかもしれない。

そして新造生物ゴルトバの勧告が的を射ていたなら、オルギア遺跡の中に手掛かりがあるはずだ。

「オルギアの遺跡に、アシディアに関する特別なものはない？ 碑、像、あるいはそこに記述され

ている文面、もしくは部屋とか……なにか……」

「特別なもの……特別な……いや、遺跡全体が特別だからなんとも……」

「なら、新造生物は？ 新造生物ゴルトバって知ってる？」

そこまでの情報を持っているならばゴルトバのことも知っているのではないかと、興奮を押し殺してイウは聞いた。

「新造生物……ゴルトバ……その単語は――」

「ラルレの空中庭園。その冒険小説の中に出てくる登場人物だ」

答えたのは長らく暇そうにしていたセウ=ハルフだった。

「ラルレの空中庭園にそんな登場人物出てきたっけ？」

とイウは聞いた。

ラルレの空中庭園は世界的に有名な児童書である。アンジェルという不老の青年が生まれ育った理想郷、ラルレの空中庭園を捨てて世界中を旅する、といった話であり、子供向けであるのと同時にあらゆる国の歴史についての記述が詳しいことから、よく教科書代わりに使われていた。中産階級以上で、ある程度の教育を受けている者であれば、誰しも一度は読んだ事があるのではなかろうか。彼も昔に読んだ事があったのだが、残念ながら細かい内容はほとんど覚えていなかった。

「お前が読んだのはエクアフ語翻訳版だろう？あれは子供向けにかなり編集されてるんだよ。原作のダルテス語版はもっと長く、もっと生臭い人間関係が描かれているし、宗教の問題で書き換えられているところもある。俺が読んだのは原作がそのまま翻訳されたシクアス語版だが、その中に新造生物ゴルトバが出てくる」

「その新造生物ゴルトバはどんなことをするの？」

「ちょっと待ってろ」

そう言うとセウ=ハルフは先ほどまでの面倒くさそうな顔から一転して、喜々とした様子で立ち上がり、小走りでどこかへ行ってしまった。

「セウ=ハルフはラルレの空中庭園マニアなんだよ。ああいう冒険物に憧れていて、いつまでも子供のままだ。いつも僕の考古学への熱狂ぶりをばかにするくせに、まったくひとのことも言えないと思わないか？」

デミングはセル=ハルフが聞いているわけでもないのに、また声をひそめてイウの耳元で囁いた。なんだかんだと言い合いをしながらも、結局のところ彼らは仲が良いのだろう。そんな雰囲気デミングの口調から伝わってきて、彼は少し羨ましく思った。

「そうだね」

イウは苦笑して言った。

しばらくして、セウ=ハルフはシクアス語でおそらく『ラルレの空中庭園』と書かれた本を持ってきた。高級そうな皮の重々しい装丁にシクアス的な独特の模様が刻印されている。農民の親戚であるらしい彼らが持っているには不自然なほどに立派な本だ。この本の一体なにか、セウ=ハ

ルフをここまで惹き付けているのかは定かではないが、相当読み込んでいるらしく、いたるところにしおりが挟まれていた。

「お前、貴族だしシクアス語は多少できるよな？」

「うん。多少ね……。本当に多少だけど」

「ここを見ても。『新造生物ゴルトバ』って書いてあるだろう」

セウ=ハルフが指差した箇所には――『新造生物』は読めなかったが――確かに『ゴルトバ』とシクアス語で書いてある。イウが納得したようにうなずくと、セウ=ハルフは満足げな顔で口を開いた。

「主人公のアンジェルは、戦争で負傷して片足を失うが新造生物ゴルトバに治してもらった描写がある。それだけで、たいした登場人物でもないが、ゴルトバがどうかしたのか？」

「やっぱりそうだ。ゴルトバは身体を修復できるんだ！」

思わずイウは叫んだ。

「そうらしいが、これは架空の話だぞ」

「そうか。ゴルトバは身体を治せるんだ……」

イウの横でひらめいたようにデミングが呟いた。

「この子の言いたい事がわかった。エメザレの事だよ。クウェージア移民の話によればエメザレは生死に関わるような拷問を受けている。しかし革命を起こしたエメザレに負傷したような痕跡はなかったらしい。エメザレがゴルトバに身体を治してもらったとすれば辻褄は合う、ということだね？」

デミングにそう訊ねられて、イウはやっと自分の犯した失態に気が付いた。己の発言でエメザレの件に一層の興味を抱かせてしまったのだ。もしこれ以上エメザレの件を詳しく調べられたりすれば、かなり早い段階でエメザレの消息が絶たれている事実にとどり着くだろう。いや、すでにクウェージアでは事態に気付いて混乱が起きているはずだ。もうエメザレの死体が見つかる可能性もある。カルテニまでその情報が到達するには今しばらくの時間が掛かるにしても、できるだけ早くオルギアに発たなければ、彼が捕まる確率はどんどん高くなっていく。

彼はにわかに混乱して、デミングの問いにうなずきもせず目を反らせた。

「だから、これは作り話だっけの」

だがデミングがそれを不審に思う前に、勢いの良いセウ=ハルフが反論した。

「いや、セル=ハルフ。これはものすごい発見だ！確かに『ラルレの空中庭園』は今のところ架空小説だということになっている。しかしこの本が何百年の時を経ても読み継がれてきたのは、架空ではないと提言した有能な学者が各時代に存在したからだ。架空ではないという証拠はないが、架空である証拠もない。それがこの本における最大の魅力のはずだ。きみだって充分わかってるだろう？少なくともモートたちは絶対に興味を抱くはずだよ。むしろ彼らのことだから既に発見しているかもしれないが」

「確かにモートの奴らが喜びそうな発見ではあると思うが、俺にはよくわからん」

「モートの見解を聞いてみたい。『ラルレの空中庭園』に関してモートに聞いたことなかったけど、実はすごいことを知ってるのかも。ちょうど、五日後に来ることだし」

「モート種族が五日後に来るの？」

まだ混乱したままの頭で、イウは興奮気味に聞いた。彼はアシディアについて、なにか知っていきそうなモート種族に会って見たかったのだ。五日ここに留まるというのは、かなり危険なことであると承知で――本当ならば明日にでも発ちたかったのだが、それはこのさい諦めることにした。

「ああ。モート学術研究団がオルギア遺跡を調査しに啓示の国から来るらしい。で、俺達が奴らを監視観察しながらオルギアまで案内するわけ。農民の親戚は仮の姿でそっちが本業なのよ」

と、セウ=ハルフはどこか誇らしげに言った。

「ぼくも一緒に連れて行って！どうしてもオルギアに行きたいんだ」

どの道、闇雲に一人でオルギアへ行ったとしても、たどり着ける保障はどこにもない。なにしろ真北に向かっているつもりでいて、西に進んでいたほどの方向感覚しか彼は持ち合わせていないのだ。せっかく案内役が目の前にいるのだから、多少の危険を冒しても頼った方が賢明であるだろう。

「まあ俺は構わないが、モートの奴らがどう言うかな。どうもモートはオルギア研究を極秘裏におこなっているらしいんだ」

「僕がなんとか説得するよ。モートは知識を求める者には敬意を払うものだし、熱意を伝えれば了承してくれるはずだ。それにいくらカルテニがオルギアに一番近い村だと言っても、遠いことには変わらない。霧は濃いし、道だってあってないようなものだし、もしかしたらあのダルテスが出るかもしれないし、一人で行かせるなんて危険すぎる。せっかくこの子はここまで来たんだ。僕はこの子をオルギアに連れてってやりたい」

デミングは右手で拳を握り、左手でイウの肩をがしっと掴んで引き寄せ、セル=ハルフに言った。

「オルギアってそんなにいいところかねえ」とぼやいてから「仕方ない。一応、俺も頼んでやるよ。一応だけ」と多少、歯切れが悪そうな表情で笑った。

「二人ともありがとう。とても助かったよ。本当にありがとう」

彼は恥かしそうに笑うと、肩に置かれたデミングの手を二度叩き、そして左に座るセウ=ハルフに頭を下げた。

「ところでさっきは、どうしてアシディアの話から急にゴルトバの話になったんだ？ アシディアとゴルトバは何か関連があるのか？ 第一にお前はどうして『新造生物ゴルトバ』の名前を知っていた？ お前はなにかを知っているのか？」

重い雰囲気を感じさせない軽い口調で、セウ=ハルフは聞いてきた。故意か不故意かわからないが、どうもこのセウ=ハルフという男は鋭いところをよく突いてくる。この調子ではイウの話のほころびが見つかるまでに、そう時間はかからないだろう。

五日間、もつだろうか。

「.....ぼくは特別なことを知ってるわけじゃないよ。さっきはただ、ぼくが興味のある単語を並べて言ってみただけ」

イウは表しようのない不安を胸に抱えながら、二人に微笑んで言ったが、セウ=ハルフはなんとも言わずにイウに微笑みを返しただけだった。

幸運なことに、この屋敷は広く、住人が一人増えたところで特に困ることもなかった。ただ、掃除はお世辞にも行き届いておらず、二人が使っている部屋以外はほこりが山のように積もっていた。イウに与えられた部屋は、ごく稀に訪れる客人用なのか比較的きれいだったが、それでもあまり使われていないことを証明するかのよう、薄くほこりがかぶっていた。

おそらく領主様とやらの趣味であろう家具一式は、クウェージアではまず見かけない黒い光沢があるもので、円を描く装飾が美しく、その輝きは多少くすぶってはいたが、それでもつい見とれてしまうような美を誇示し続けていた。物珍しさから、彼はわりに夜遅くまで家具の一つ一つを見つめていた。

ちょうど昼に差し掛かった頃合にイウは目覚めた。ぼんやりと現実を受け入れてから、しばらくして起き上がり、そして唐突にやってきたかゆみに気付いて身体中を掻いた。寝ていたときは気にならなかったのだが、どうも毛布がいけなかったらしい。

お世話になっている手前、文句も言えずにとりあえず窓を開け、彼は毛布を干すことにした。天気は一応晴れであったが、クウェージアと大して変わらない弱々しい太陽の光がカルテニを照らしている。相変わらずの単調な景色で、活気のありそうな時間帯にも関わらず村人もまばらである。

彼のいる位置からちょうどこの屋敷の馬小屋が見えたが、馬はいなかった。二人はまた巡回に出ているようだ。

窓辺に腰掛け、つまらない景色を眺めながら、彼は思考を巡らせた。

一体なぜ、セウ＝ハルフとデミングはこんな屋敷に住んでいるのだろうか。いくら使われていないからといって、一般人に別荘を開放するほど優しい貴族を彼は見たことがない。デミングは本当に考古学者なのだろうか。セウ＝ハルフはモートの学術団をオルギアへ案内するのが本業だと言っていたが、誰に雇われているのだろうか。この屋敷の持ち主である領主に二人は従えている、というのが一番自然な考え方だろうか。

と、このように実のところ彼らに聞きたいことはたくさんあったのだが、昨日のやり取りを考えると、あまり深入りしない方がよさそうだとイウは結論づけた。あの二人が何者であれ、イウのなによりの目的はオルギアに行き古の女王アシディアに会うことなのだ。それに関係ないのなら、わざわざ関わる必要もない。それより自分の素性がばれぬよう、大人しくしているのが一番だ。

面倒だな。

彼は大きなため息をひとつ吐き、身体中を掻いた。

しばらく外を眺めているとデミルマートが屋敷に来るのが見えた。買い物に行っていたのだろう。たくさんの食料品が入った大きな籠を抱えていた。デミルマートは窓から頭を出していたイウにすぐ気付き、籠をなんとか片手で支えてもう片方の手を振った。

「おはようございます、お坊ちゃん。起きたんですね。今朝食をお持ちしますから、ちょっと待っていてくださいな」

と言って、屋敷に入っていくと、本当にすぐに朝食を持って部屋に現れた。デミルマートはこれから洗濯物を干すのか、朝食が乗ったトレーを持ちながら、器用にも小脇に洗濯籠を抱えて微笑んでいた。

「おはよう、デミルマートさん。なにからなにまでありがとう」

「いいえ、作る量が一人増えたからって、どういうことでもありませんよ。五日間泊ると聞いてあたしは嬉しく思っているのよ。ここだけの話、あの二人の面子に飽き飽きしていたところですから」

デミルマートは茶目っ気たっぷりに毒づきながら、大きくはないテーブルに料理を並べて椅子までひいてくれた。

「お坊ちゃん。ちょっとすいませんよ」

にわかにデミルマートはイウの前を通り過ぎると、なぜか窓を閉めた。

「どうかしたの？」

「お洋服が乾きましたよ」

デミルマートはイウの質問には答えず、抱えてきた洗濯籠の下の方から、隠すようにして布に包んである白い服を取り出し、しのび声で言った。

「それで……ポケットからこんなものが出てきたの」

差し出された白い服の上には、見たことのない銀の指輪が乗っていた。指輪には折りたたまれた紙切れが結ばれている。

「持ってきた覚えはないんだけどな」

白い服と指輪を受け取りイウは言った。見たところ指輪の銀は粗悪で宝石も付いておらず、ただ表面になにかのマークが刻印されているだけだった。内側には素人が無理やり彫り刻んだような文字で“エスラール(名無し)”と書いてあるが、彼にはそれがなにを表しているのかわからなかった。結んである紙切れのほうに目をやると、透けて反転した文字で“エメザレ”と書いてあるのが見えた。

その名に、思わず彼は立ち上がった。小刻みに震える手で指輪は握り締めていたが、せっかく

きれいになった白い服は床に落ちた。

「このメモを読んだ？」

声は驚くほど揺らいでいた。

「いいえ。あたしは文字が読めませんから」

デミルマートは落ちた白い服をひろい、たたみながら優しい顔で笑った。そして白い服をベッドの上に丁寧に置き、向き直るとイウの肩をそっと掴んでまた優しい顔をした。

「これはあたしの勘なんですけど、たぶんお坊ちゃんは入り組んだ事情を抱えていると思うんです。少なくともあたしにはとっても困っているように見えるわ。政治とか国がどうのとか難しいことはわかりませんが、ただセウ=ハルフさんの様子がおかしいことはわかります」

「おかしいってどういうこと？」

「あのお二人はとってもいい方なんですよ？ 親切だし優しいし、権力を振りかざすこともしないし、偉ぶらないし、農作業だって嫌な顔もしないで手伝ってくれます。苗の植え方も上手いし、誰かが困っていれば助けてくれます。

でもセウ=ハルフさんはけして仕事に私情をはさまないひとです。モートのオルギア探査はスミジリアンにとってかなり重要な事柄だというようなことを、デミングさんから聞いた事があります。そんな重要なことにお坊ちゃんを巻き込むなんて変だわ。きつとなにか考えがあつてのことだと思います。どうもセウ=ハルフさんは都市から来たエリートの警吏(警官)みたいななんです。あたしもデミングさんも、セウ=ハルフさんの本当の職業を知らないんで、めったなこととも言えないんですけど、気をつけるには越したことはないと思って」

「どうもありがとう。気をつけるよ。でも安心して、ぼくにそんな複雑な事情はないからね。ぼくはオルギアに行きたくて、ちょっと脱走めいたことをしたんだ。あんまり騒ぎになるとぼくを探しにくるかもしれないし、それを恐れているだけだから」

親切なデミルマートに嘘をつくの申し訳なく思いながらも、イウは精一杯の落ち着いた表情を作り静かに言った。

「そうですか。それならいいんです。じゃああたしは洗濯物を干さないといけないんで、失礼します」

とデミルマートは軽くお辞儀をして、洗濯籠を抱え出て行った。

一人になった部屋で、緊張が途切れた彼は椅子に座る気力すらなく床に座り込んだ。指輪を握り締める手の震えは止まらなかった。鬱陶しくも震える指で、憑かれたように忙しく紙切れをほどくと、そこには数行の文が書かれていた。

“必ず迎えに行きます。私はクウェージアの王にはなりません。王位は古くからの友人であるエスラールに譲り、私は余生をあなたと暮らします。それが嘘ではない証に私の最も大切なものを贈ります。――エメザレ”

どこからともなく涙がただ溢れてくるのがわかった。

どうして。どうして、最後までエメザレを信じなかったのだろう。

エメザレがとても正しいひとであると、一番知っていたのは自分であるのに。

どうして、嘘だと思ってしまったのだろう。もう二度と会えないと思い込んで、どうして殺してしまったのだろう。

彼は声を押し殺して泣き、しばらくなにを考えることも、動くこともできなかった。息をするのも面倒なくらい、虚空に似た悲しみが脳を覆いつくして、否定的な感情以外もう永遠に抱けないようにすら感じた。

「ごめんなさい」

誰にも聞こえないように小さく口の中で言った。

彼はその頭で、その身体で、その皮膚で、冷たく果てしない喪失を感受した。それは生きる上で長らく感じていた類の孤独よりも、遥かに壮大な喪失であった。居場所という意味でも未来という意味でも、なんの安定も感じられない。安心を得られる当てもない。理解できないほどに広い世界で、彼の意識は確固たる意志を持って、支えもなく漂っているのだった。それでもエメザレという存在が残された最後の座標であり、明るい星のように、もしくは太陽のように、煌々と爛々と、美しく小さく強く荘厳に輝いていた。

もう彼を救えるのは、エメザレという概念だけなのだ。

イウは涙が溢れるのを諦めるまで、静かな声で泣き続けた。悲しかったのではない。哀しかったのだ。

彼がカルテニに到着して三日目のことだった。隣町のカオクールで例の襲撃事件が起こった。セウ=ハルフとデミングは隣町へ詳細を聞きにいったらしく、夜遅くまで帰らない、とデミルマートが朝食を運んできた時に教えてくれた。

「どうにも物騒ですね。早く解決するといいいんですが……。これではモートの研究団の方たちも来るのが大変でしょうね」

イウの部屋の小さなテーブルに、朝食を並べながらデミルマートは呟いた。

元々他種族を嫌う白い髪の村でダルテスの襲撃事件が起きたのだ。おそらく関係ないと思われるモートの研究団を近隣の白い髪は警戒するだろう。変な輩が自衛と称して研究団を襲うようなことがなければいいが、あれば国際問題に発展しかねない。もっともそこまでの問題になってしまえば、むしろこのように小さな村には、関係のない出来事になってしまうだろうが。

「二日後にちゃんと来るのかな」

「来ると思いますよ。あの方たちが時間に遅れたことはありませんもの。見た目はまあ、ちょっと不気味で無愛想ですけど、基本的には律儀な方たちだと思います」

温和そうなデミルマートですらこの程度なのだ。そう世の中は温和な人物ばかりで構成されているわけではない。彼は会ったこともないモートの研究団を想像して心配になった。

「ただいま。デミルマートさん」

一階の玄関の方からセウ=ハルフの声がした。ただいまと言うからには、もう帰ってきたのだろうが、まだ昼と呼ぶにも早い時間帯である。

「ちょっと行ってきます。お坊ちゃんは朝食を召し上がってください」

デミルマートはそう言って、小走りで部屋を出て行ったが、彼も事件のことが気になっていたのですぐに後を追いかけた。

「あら、お早いお帰りですね。お一人ですか？」

玄関にいたのはセウ=ハルフ一人だった。デミングのことは察しが付く。

セウ=ハルフは珍しくよそ行きの格好で、それなりに上等な茶色の上着を羽織っている。靴もいつものではなく、よく磨かれた皮のハーフブーツを履いており、洒落た小さな帽子も頭に乗っ

けていたが、それはあまり似合っていなかった。

「あ、デミングは例のごとく置いてきました」

「あらまあ」

とデミルマートは一応言ってみせた。彼女なりの配慮なのだろう。

「ちょっと知らせておきたいことがあって」

慌てている様子はなく、いつものように適当な理由をつけてデミングに仕事を押し付けてきたように見えたのだが、セウ=ハルフは二人を広間に誘導し、座るように言った。雰囲気には現れないだけで、大事な話をするつもりらしい。

「今回の被害者は死ななかつたんです。怪我は負ったが、生死に関わるものじゃなかつた」

「それは初めてのことですね。前にも一人だけ即死ではない子がいたけど、すぐに死んでしまったとお聞きしました。ひどい目にあつて運が良いとは言いがたいですが、命が助かつて本当に良かったですね。事件に進展はあつたんですか？」

デミルマートはなぜか少し緊張しているようで、胸の辺りで落ち着きなく両手の細長い指を絡ませている。

「それなんです、どうもダルテスに深手を負わせたらしいんです。襲われた少年は下級貴族の息子で狩りをするためにカオクールにやって来ていました。で、その狩りの最中に少し夢中になって護衛とはぐれてしまい、一人になったところを襲われたんです。ダルテスを見たことないほどに立派で大きな黒い馬に乗り、月の形を模した矛(ほこ)のようなものを持っていて、動くたびに矛に付いている飾りがシャンシャンという音を立てていたそうです。彼は狩りをするために弓を持っていたから、それでダルテスに向かって矢を射った。矢は命中し、ついでに護衛もその音ですぐに気付いて駆けつけ、ダルテスに反撃を加えた。少なくとも三本の矢は命中していたと彼らは言っています」

「それで、ダルテスは捕まったの？」

イウが聞くとセウ=ハルフは今度、イウの方を見た。

「いや、武器を構えている護衛部隊に突進してそのまま突っ切り、森のどこかへ消えてしまったそう。護衛の一人がその時、馬に頭を潰されて死んだんだと」

「まあ。かわいそう……」

眉を寄せてデミルマートが小さく呟いた。

「目撃証言によるとダルテスの髪の色は緑だったらしい」

「ダルテスって髪が緑色なの？」

とイウは聞いた。実はダルテスの髪の色も知らなかったのだ。

「いや、普通は金色か茶色だが、おそらくラルグイムのダルテスだろう。ラルグイムには染髪文化があるからな」

「じゃあ、実行犯がダルテスで、裏で糸を引いているのはラルグイムのシクアス種族ってところでしょうか？ あの国は確か、お金持ちのシクアスがダルテスを傭兵として雇っているんですよ？」

「カオクールの警吏はそう考えているみたいですね」

セウ=ハルフはため息をついた。そして上着の裏ポケットからスミジリアンの地図を取り出して広げだした。なかなか大きな地図であり広間の大きいテーブルいっぱいには地図は広がった。

「二十二件目にしてやっとヘマをしたって感じだな」

と、今回の事件現場を指でコツコツと突いてセウ=ハルフが言った。

「二十二件も！」

地図にはご丁寧に事件が起きた場所は印がされており、順に番号がふられ日付まで書かれている。その印の多さにイウは声を荒げた。

「そうだよ。一ヶ月で二十二件。ここ十日はこの近辺にばかり出沒する。最初はヴルドンへ向かうクウェーミア移民ばかりが襲われたから、移民の受け入れを反対している勢力の仕業だと思われていた。しかしヴルドンを三度襲撃してからは円を描くようにしながら西へ向かってきている。そして最西端のこの村も先日一度襲われた。ダルテスは今のところ、この西近辺から動く気はないらしいな」

セウ=ハルフは説明しながら事件順に地図の記しに指を差していった。地図の印を目で追っていると、彼はあることに気付いた。はっとした瞬間、それと同時くらいにセウ=ハルフが口を開いた。

。

「そういえばダルテスは少年にこう訊いたそうだ。『お前の名はイウか』と」

「そんな……！」

彼は思わず震えた声を出した。

イウにダルテスの知人はいない。長らく異文化を拒絶してきたクウェージアとダルテスにはもちろん縁などない。巨人のように大きく逞しく、戦争好きで横暴だと教わってきただけで、生まれて此の方見たこともない。狙われるような理由も思いつかない。第一、クウェージアの王子イウは死んだことになっているはずだ。死んでいないことが発覚したのだとしても、追ってくるのはクウェージアの新政府の軍人か、スミジリアンの警吏というのが筋だろう。

しかし――彼は襲撃事件現場がマークされた地図に目をやった。そのダルテスはクウェージア移民の通ってきた道を辿って事件を起こしている。クウェージアとスミジリアンを結ぶ八号線街道を二度往復した後、クウェージア移民の目的地ヴルドンを三度襲撃。しばらく沈黙し、その先はほぼ正確に半径十キロの円を描いて巡回しながら、物凄い勢いで西に――つまり西端の村カルテニを目指すように向かってきていた。ダルテスが西へ進路を変えたのは、偶然にもイウが墓場で目覚めた日であった。そして今はカルテニの近隣にある町村にダルテスは潜伏しているのだ。

どうにも嫌なものを感じる。気味が悪い。

セウ＝ハルフはなにか言いたげにイウの顔を見た。疑っているのは明らかだが、その表情からは見て取れない。いまだ親しみさえ浮かべたような、嫌味のない面構えなのだ。かえって恐ろしいものがある。

「でもイウってクウェージアの王子様の名前よね？ クウェージアではイウって名前のひと、たくさんいるんじゃないでしょうか？」

二人に割って入るようにしてデミルマートが口を挟んできた。確かにイウという名は珍しくない。王族の子供には国民的な名を付けるのが習わしであったし、国民は王家への敬意と憧れの表しとして王族の名を付けたがるものである。よってイウは当然のように普遍的な名前であった。クウェージアの少し大きな道通りで、その名を呼ぼうものなら少なくとも見積もっても五人は振り向いただろう。

「そうだよ！ だってぼくにはダルテスの知り合いなんて一人もいないし、狙われる覚えもない。それにクウェージアにイウなんて名前の奴はいくらでもいるもの。そうだよ、ぼくじゃないよ。きっと狙っているのは貿易商の息子あたりだ。クウェージアで他種族と交流があるのは貿易商しかいないもの。きっとそうだ」

「奴の言葉にはまだ続きがあるんだ」

セウ＝ハルフの表情は崩れない。まだ少年の無邪気さを捨て去れていない、悪意のない笑みを僅かに湛えている。それはなにか決定的なことを言わんとしているようにも思えた。イウはけして

それに屈しまいと静かに唾を飲み込み、呼吸を整え、セウ=ハルフの次の言葉を待った。

「『お前の名前はイウか。アンディゴウノの』」

一瞬、呼吸が止まった。烏肌が湧き立ち、緊張のあまり全身が痺れに包まれている。

アンディゴウノ。それはクウェーシア王家の隠された家名である。なぜ隠されているのかい
えば、それはもう四百年も前に捨てられたことになっている家名だったからだ。

クウェーシアは元々、黒い髪のエクアフであるノーマーリ王家が統治している国だった。そこ
へ隣国スミジリアンの王位継承戦争に敗北した時の第一王子デュードウエがクウェーシアへの亡
命を希望し、ノーマーリ王家はそれを受け入れたのだった。そのデュードウエがアンディゴウノ
王家だった。そしてアンディゴウノ・デュードウエー—正確には息子のベルドゥエはノーマーリ
王家を乗っ取ってしまったのだ。形式上、ノーマーリ王家の養子に入ったことになっている。ゆ
えにクウェーシアは先日の黒革命が起こる前まで形式的にはノーマーリ朝を引き継いできたこと
になる。しかし、黒い髪を嫌悪する白い髪 of 王族らは、黒い髪の家名を名乗ることを嫌い、ア
ンディゴウノの家名を大切にした。

よって代々、クウェーシアの白い王子はアンディゴウノの家名を極秘裏に受け継いできたのだ
った。

ちなみにご本家スミジリアンのアンディゴウノ朝は二百年前に滅びており、今はエルティエオ
という王家がスミジリアンを統治している。つまりダルテスの言った『アンディゴウノ』は明ら
かにクウェーシアの王家を指していた。

知っているはずがない。

アンディゴウノの家名を知っているのは、主要の王族と側近の選ばれた数人しかいない。
一体、誰だ。誰がぼくを狙っているんだ。

「そういえば、俺はお前の家名を聞いてなかった気がするな」

セウ=ハルフは軽い口調で言った。

ここで口をつぐんでしまっは、自分がアンディゴウノ・イウであると認めてしまったのも同
然だ。なんとか毅然として振舞わねばならない。彼は息を吸った。

「それは秘密にしておきたいんだ。実はぼくはどうしてもオルギアに行きたくて、勝手に抜けて
きてしまったんだ。セウ=ハルフは農民じゃないそうだし、こんなに立派な屋敷に住んでいる。ま
んいち警吏だったりでもしたら、ぼくは目的を達成する前にヴルドンへ返されてしまうかもしれ

ない。だからぼくはできうる限り、個人情報を洩らしたくない。ぼくはオルギアに行きたいだけだ。本当にそれだけで面倒な事情を抱えているわけじゃないし、そのダルテスのことも知らない」

彼が刺々しい口調で言うと、セウ=ハルフは驚いたような不思議そうな表情を浮かべ、何度か瞬きをし、少し考え、そして唐突に泣き出しそうな顔になった。

「なにを勘違いしているのか知らないが、俺は警吏じゃないぞ。俺はもっとお前に信頼されてると思ってたんだけど……。少なくとも、ヴルドンへは追い返したりしないさ。一応モートの研究団にお前も一緒に行けるよう頼んでやるつもりなわけだし……」

「ごめん……」

気が抜けるほど本当にしょんぼりしてしまったセウ=ハルフを見て、彼はなんだかかわいそうなおもいしたと思った。心持ちか、セウ=ハルフの頭に乗っている小さな帽子もしょぼくれているように感じる。

「いや、いいけど」

と言いつつもセウ=ハルフは肩を落として小さくなってしまっている。その様子はただの子供のようだ。もしこれで嘘を付いていたのだとしたら、天性の詐欺師である。

「とにかく気をつけろよ。ダルテスはイウって名前の少年を標的にして、この近辺をうろうろしてるんだから。って、俺は言いたかっただけなのに……。せっかく無理して早く帰ってきたのに……」

「ごめん……本当にごめん」

イウはセウ=ハルフの背中を撫でながら顔を覗き込んでなだめようとしたが、案外傷は深いようで、明後日の方向にぶつぶつと何かを言っている。

「セウ=ハルフさん。ワイン飲んでご飯食べて元気を出してください」

いつの間にか姿を消していたデミルマートが昼食を持ってきた。

「あれ、昼食あるんですか？」

「きっとセウ=ハルフさんは昼頃に帰ってくると思って、昼食を作っておいたんですよ」

その言葉を聞くと、セウ=ハルフはなんとも居た堪れない顔をして力なく笑った。デミルマートの勤は侮れない、ということらしかった。

カルテニの空気は冷え冷えとしていた。クウェージアのあの白い都市の拒絶的な空気によく似ている。元々人影は多くない小さな村であり、加えて早朝ともなれば人影がないのはごく日常の風景だが、今日は漂う空気が違う。いつものどかな静けさではない。殺伐として戦慄すら感じて取れる静寂だ。暗い朝の色がぼんやりとカルテニを照らし、希望的であるはずの夜明けはここにはなかった。村の者は家に引きこもり窓もドアも硬く閉ざし、それらが早く過ぎ去ることを祈っているのだろう。ここから見える馬小屋では馬が立ったままで寝ているようだ。馬ですらこの索漠を感じているのだ。異形の者が来る、と村全体が無言に知らせていた。

確かあの日も彼はこうして窓の外を眺めていたな。と彼は思った。やけに冷える冬の日で、鉛色の雲がいつにも増して重そうであったことを、未だ鮮明に思い出せた。あの時は宮廷の窓から黒い髪のエメザレがやって来るのを、特になにかに期待するわけでもなく待っていた。エメザレを愚かだと思っていた。不条理を理解していないのだと。無謀で浅はかで死ににきたのも同然だと。理解しがたい憤りさえ抱いたように思う。その黒い髪の英雄があらゆるものを、全てと言ってもいいものを変えてしまうなんて――

そして今は古ぼけた屋敷の窓から、漆黒の肌の訪問者をこうして妙に熱い気持ちで待ち望んでいる。嫌な既視感だった。

それにしても、なぜエクアフという種族はこんなにも他者を拒むのだろうか。デネレアの時代にこの選民文化は一般化したとかつて教わった。支配者が自分と同じ種族をひいきするのはよくあることであり、世界の三分の一を統治した大帝国であるならば支配層の種族がそれを誇りに思うのは当然かもしれない。強い選民思想を誕生させるにはよい状況であったにせよ、今は全く状況が違う。エクアフの国は世界の隅でごく小さな領土を死守しているに過ぎないのだ。いわば斜陽の種族である。それでいてなぜ選民文化は降下の段階で淘汰されなかったのだろう。もしや、エクアフという種族はいまだにデネレアの支配を受けているのではないだろうか。昔々に滅びてしまった大帝国という形なき存在にまだ囚われている。おそらく滅びるまで、それはきっと継承されるのだ。

悲しいことだ。エクアフはもうすぐ滅び去ることを知っていて、でもまだそのことを信じようとしなないのだから。

彼らの足音は静かだった。戦慄の静寂を荒立てない優雅な足並みだ。八頭の光る毛並みの黒い馬が二列縦隊で闊歩してくるのが見えた。うち二頭には貨物が乗せられている。東の果てからやってきたにしては、少なすぎる荷物である。馬に乗るひとびとの肌は深淵の底をくり貫いたようにただ黒く、彩度のないモノクロオム的な、純粹な漆黒だった。髪は四人が金髪で、二人は髪が白、あるいは灰色だった。服も全身が真っ黒で統一され、ここからではまだ詳細は見えないが

、服の形はなんだか奇妙である。

黒い塊が静かに進入してくる様は、常闇がカルテニを侵蝕していくようだった。悪い意味ではない。夜の神エルドを信仰するエクアフ種族にとって夜の闇は神聖なのだ。いくら排他的であろうとも、この光景に荘厳さを感じずにはいられまい。しかしこの神秘を目撃しているのは、彼一人であるのが残念でならない。

「おーい、もう用意できただろう。降りてこーい」

セウ=ハルフの大声が響いてきた。用意もなにも、彼はクウェージアからほとんどこの身一つで来たのだ。忘れるものもない。ただ一つ大切なものはこの指輪だ。彼は上着の内ポケットの底の底に大切にしまってある指輪に、上着の上から手を置いた。

ぼくは大丈夫だ。

丁度、心臓の位置に重なる指輪は彼からおののきを取り去った。

「今、降りるよ」

と答えて下に降りると、セウ=ハルフとデミングは大きな荷物を玄関に運んでいるところだった。

オルギアへ行くには順調にいても一週間はかかるらしい。霧が深く、天候が不安定だから最悪だと二週間くらいかかるとデミングに教わった。モートはモートで必要なものは持ってくるそうなのだが、三人でも往復で一ヶ月ともなれば、それなりの装備を持っていかなくてはならない。

二人はオルギア探索にはぴったりの厚めの服を着ていた。クウェージア同様スミジリアンも夏であっても気温は高くない。か弱い太陽が当たっている日中は暖かいが、朝晩は夏でも寒いのだ。二人ともレデルセンという皮のズボンと靴を組み合わせた脚依を履き、灰色の薄めで短い丈のチュニックを上に着て、羊毛の分厚い真紅のコートを着ていた。エクアフの文化では赤はあまりいい色ではなかった。正確な理由はわからないが、シクアス種族が太陽を赤で表現しているからだと言われている。コートは赤は意図的で、濃霧でも目立つように、ということなのだろう。

自分はといえば少々汚れてきた白い服を着ている。これしか持っていないので仕方ないのだが、濃霧の中に紛れ込んだら容赦なく一体化されてしまう。

「もう来たみたいだ。窓から見えたよ」

「あいかわらず奴らは時間に正確だな」

セウ=ハルフは大きな荷物を玄関にどすんと投げるように置いた。

「そりゃあモート種族だもの。正確さ」

デミングのクマは相変わらず治っていないが、早起きのせいなのか今日は一層クマが濃いような気がした。

「体内時計でも内蔵されてんのか。奴らには」

「彼らの国には原子時計というとんでもなく正確な時計があるらしい」

「ゲンシ時計？ ゲンシって何だ？」

「知らん。説明されたがちんぷんかんぷんだったよ。哲学的には分割不可能な存在で物事を構成する最小単位だそうだが、物質としては元素の最小単位だそうだ」

「ゲンソ？ なんだそりゃ」

「だから、知らんて。化学物質を構成する基礎的な要素を指す概念で、原子は物質を構成する具体的要素なのに対して、元素は性質を包括する抽象的概念と言っていたかな」

「え、化学物質？ ゲンシ？ 性質を包括？ 構成するゲンソがなんだって？」

「もういいよ。その頭はしばらく休めておいた方がいい」

「おはようございます。お坊ちゃん」

二人の会話はその後しばらく続いたが、そこへデミルマートがやってきた。二人は取り込み中らしいと悟ったらしくデミルマートはイウに言った。

「おはよう」

「これ、着替えの服です。上等の物でなくて、しかもうちの子のお下がりです。申し訳ないですが、白い服は汚れると目立つと思って。よかったですら着てください。靴はお坊ちゃんには少し大きいかもしれませんが、その靴が駄目になってしまったら履いてください。あとこれは昼食です」

とデミルマートは麻布に包まれた小包を差し出してきた。ありがたく受け取りながら、ところでデミルマートの年齢は一体いくつなのだろうか。と彼は思った。あまり女性の年齢を気にして生きてこなかったこともあり、今の今までしっかり考えもしなかったが、改めて優しいデミルマートの顔を眺めた。

驚くような美人ではないが、特に欠点のない顔立ちで美しかったし、しわもない。声も落ち着いているが若々しい。勝手に二十代後半か、いっても三十くらいだと思っていたが、デミルマートの息子は彼よりも年上であるらしい。そう考えると、なかなか恐ろしいことになった。

「助かります。ありがとうございます。親切にしてくれて、とても感謝しています」

イウの母親は物心のつく前に死んでしまったが、生きていたらデミルマートのように美しく優

しかっただろうか、とふと思って、なんだか急に泣きたいような気分になってきた。

「無事に帰ってきてくださいね。みなさんで必ず無事に帰ってきてください」

「無事に……」

イウは弱々しく呟いた。

ここへは、おそらくもう帰ってこない。オルギアへ着いたその後でなにが待ち受けているのかわからない。アシディアへ会えるかどうかかも知れないが、確信めいたものがあった。どちらにせよ、ここへは帰ってこられない。一ヶ月も経てばエメザレが殺害されたことと、亡国の王子からの手紙の噂は、カルテニにまで及んでいるだろう。彼女には二度と会うことはないのだ。

イウの表情は沈みかけたが、デミルマートが不思議そうな顔をしたので、はっとして彼は笑いかけた。

「いや、ちゃんと帰ってくるよ。三人で」

と彼が言い終わってすぐに朝を告げる鐘が鳴った。

「よし、行くぞ。というか多分、もうそこに着いていると思うが」

玄関を開けるとセウ=ハルフが言ったとおり、彼らはもうそこにいた。二列縦隊のまま微動だにせず、三人を待ち受けている。六人とも馬にまたがったままだ。視線が上から来るせいなのか威圧感がある。デミルマートが愛想はよくないと言っていたが、まったくその通りだと思った。

それよりも、イウはモートたちの細長さに驚いた。貧弱な、と揶揄されるエクアフ種族に負けないほど彼らは細く――というか長いのだ。輪郭といい手といい足といい指といい、身体中のパーツを全て引き伸ばしたような、目の錯覚を疑ってしまうほどにシルエットが細長い。彼らがイウと同じヴェーネン(人類)というのが信じがたい。根本的な骨格の違いを持っていた。

「あれ、待った？」

セウ=ハルフは空気を読めないのか読まないのか、厳しい顔のモートたちに頓狂とも言うていい声で聞いた。

「いや、来たのは今です」

最前列の左にいるモートの男が答えた。エクアフ語だったが少し訛っている。「来た」というところがイウには聞き取りづらかった。声はそれほど恐くはない。言葉使いは礼儀正しいし、むしろ優しげだった。最前列の左の男はなんとなく他を従えているように感じる。おそらく彼がト

ップなのだろう。

モートの六人はほとんど同じような、見たこともないテカテカと光る光沢のある素材の黒く長いコートを着て、コートの上に黒いベルトを二本巻き、そこに小型のナイフや小物入れや、用途のわからない細く短い棒などを括りつけていて、セウ=ハルフやデミングの探索に適した格好とは真反対に、六人全てが常識では考えられないくらいに高いヒールの、ベルトなのかバンドなのか、これまたよくわからない紐がこれでもかと巻かれた、膝よりも長いブーツを履いている。何人かは額より少し上に、台形状の浅い筒にガラスを乗せたようなものが二つ連なっている奇妙なものをつけていた。下にずらせば丁度、目を覆う形になるので、モート式的眼鏡なのだろうか、とイウは思った。

「そちらは？ お約束では二人のはずですが、案内は」

怒ってはいない。純粹に疑問に思っている、という印象だ。

「この子は！」

と勢いよくデミングが叫ぶように言った。モートたちは一斉にデミングを、その表情があまり感じられない顔で見た。デミングは一瞬たじろいだが、負けんとばかりに声を張り上げて続けた。

「この子は、考古学に興味があり、どうしてもどうしてもどうしてもオルギアの遺跡に行きたいそうなのです。クウェーシアの子で、本当はヴルドンへ行かなくてはならないところを、こっそり逃げてきてしまったくらいです。悪さなんてしませんし、あなた方の邪魔もしません。なんとか連れて行ってやりたいのです」

「なるほど。そうですか」

驚くほどあっさりとした口調でそう言うと、モートたちは自分達の言葉でなにやら相談し始めた。音を文字に起こせないくらいに耳慣れない言葉で、しかも音域が平坦であり、そもそも母音が違いすぎてお互いにお互いの言語を完璧に習得するのは難しいように感じられた。

「こいつは本当にオルギアに行きたいみたいなんだ。俺からも頼むよ。一緒に連れて行ってくれないか」

セウ=ハルフが約束どおりモートの背中に一応頼んでくれた。先日の一件でセウ=ハルフはしばらく気を落としていたが、イウが積極的に話しかけるようにしたところ、どうやらセウ=ハルフの心の傷は治ったらしかった。

「クウェージアの子だと言いましたね。先ほど。そうですね」

会議が終り、隊長らしき先ほどの男がデミングに向き直ってそう聞いた。

「そうです！クウェージアの子で家柄はたぶん立派な子です！分別のある子です！全く！」
「わかりました。いいでしょう」

優しくはあるが高揚のない、淡々とした言い方だったので、喜びを大声で表現することははばかられたが、イウの内心は安堵と歓喜でざわめいていた。

「おー、良かったね」

セウーハルフはぽんとイウの肩を叩いて笑った。

「言うのが遅くなりました。名前です。私は高峰といいます」

隊長らしきモートの男は馬を降り、イウに右手を差し出して、エクアフ語で意味のある単語を組み合わせた名を名乗った。

高峰の顔は自分より二倍近く長く、そのぶん額も広く、落ち着いた色味の金の直毛は、腰の辺りまである長さだった。長髪の合間からは、耳にぶら下がったたくさんの銀色のピアスが見えた。肌の色は闇色という表現が一番ふさわしく、それでいて瞳の色は白い髪のエクアフと同じように、色素がほとんどない白っぽい色だったが、角度を変えるとまるで猫の瞳のように瞳全体が光って見える。大人であることはわかったが、高峰の年齢は全くわからない。二十代だと言われても五十代だと言われても、そうかもしれないとしか思えない。美的感覚が違うので断言はできないが、細い鼻筋と切れ長の凛々しげな目元から、それなりの顔立ちをしているように見える。

「なんと言うのですか？名前は、あなた」

表情は全く変わらない。怒っているわけでもないし、拒もうとしているわけでもないのだろうが、とにかく顔の筋肉が静かで取っ付きにくい。

「イウ」

イウは差し出されていた高峰の右手を軽く握り返して言った。

「ではイウさん。よろしくお願ひします」

高峰が礼儀正しく言ったので、イウは笑いかけてみたが、高峰はにこりともせずにとだ黙って軽く頭を下げただけだつた。